
独りよがりの魔術師 ～ 幼女好きで変態の俺は、魔法少女を愛している～

天馬 龍星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

独りよがりの魔術師　　幼女好きで変態の俺は、魔法少女を愛している

【Nコード】

N2184W

【作者名】

天馬　龍星

【あらすじ】

2036年。世界は多く変わっていた。
日本の首都は東京から大阪へ。頭脳は筑波。東京は日本から隔絶された。

東京は萌え文化にのまれ、昔の面影はない。

幼い頃一人の少女に呪いを掛けられ、その呪いを解くために魔導書を追い求める少年。魔導書の手掛かりを求めて秋葉原に赴く。そして魔法少女と出会う。契約を結び、バトルロワイアルに参加する

ことになる。

だが幼女誘拐の罪で警察に捕まってしまう。

しかし組織に入ること条件に無実を証明してくれるという謎の神父が現れる。その条件をのむことにした。

入団した少年は、魔法少女と再会して。超常現象の調査をしながら、バトルロワイアルに参加することになった。

魔法少女の力を借り、なんとか生き残ることができた。

質問アンド補足。

土佐きんとん 2011年09月18日 00:12

思うのですが、イブと呼ばれた少女がいた。と言う書きだしの後に、少女と再会するために、という文章を書くとその少女がイブなのか違う人なのか読者が混乱してしまいます。というか混乱してあります。

また、冒頭は読者を作品に引きこむところであり、主人公がどんな人か、世界がどんな艦橋なのか印象付ける為の場だとわたくし考えております。はい。

まず、この大地くん全然変態的要素が見当たらないですよね。ただの気弱な少年にしか見えません。しかも途中からキャラ崩れますし。

しかもこの焰とやらは必要なのでしょうか。

五年後、とか意味ありげな伏線を貼りつつも、結局的等に当てがったボスキャラってだけだったじゃ無いっすか。冒頭に態々登場させるいみがあったのでしょうか。わからんわからん。

そして、なぜ五年後？ どうかそんな思考がくるの？ わからんわからん。

恐らく、ツバサさんの中で設定という物が出来上がっているのでしょう。

一度読んだ身としては、それらが表現できていない気がします。あー、なんか色々考えてんだろうなー、この人、程度にしか伝わってきません。

こちらとしてはキャラ設定や世界設定、プロットなどを知ってから再読してみたいのですが。

まあ……流石に無理っすよね（笑） すいません。

長文失礼致した。それではこれにて、ドロン

ツバサを愛する者 2011年09月18日 04:24

確かに混乱しますよね。ごめんなさい。

再会したい少女もイヴ何ですけど。正確に言うといヴの遺伝子を元に創られたパンドラの娘なんですよ。同じ人物ではないですね。ごめんなさい。

どんな主人公でどんな環境なのか印象付ける為の場所だとわたくしは考えています。

その考えは間違っていないと思いますよ。

この大地くん全然変態的要素が見当たらないんですよ。ただの気弱な少年にしか見えません。しかも途中からキャラ崩れてますし。

最初から最後まで気弱な少年のつもりで書いたんですけどね。

大地くんは常識ある人間です、ただ幼女を見かけると変態的な行動を起こすのがたまに傷です。ほぼ無意識で行っていますから、でも男の前では紳士ですよ。脳内補正が激しく、人の話はあまり聞きませんけど……ね。だからイジメられるですけどね。焰くんとは普

通に話すことができますけどね。彼は特別な存在なんですよ

焰くんは必要ですよ。このキャラがいなかったら何も始めりませんから……一件この約束が無くても大地くんは魔術書を探しそうですが……探しません彼は、行動力ゼロですから。本当に気気弱な少年なんですよ。それを知っている焰くんはわざと怒らせることをいつているんです。それが彼の優しさなんです。

なぜ、5年後なのか？ 卒業までじゃあないでしょうか？
一年という短時間で魔術書が見つかるとは思ってないんです。

だから、今度会うときは成人式だという意味が込められています。

なぜ、成人式なのでしょうか？ その頃は社会人としての自覚があるだろう、中2病は卒業しているだろうと踏んだからです。

焰くんは意外と優しい人なんです。ただし不器用なだけで……

かなりの『キー』キャラなんですけどね。あまり伝わってないみたいですね、ごめんなさい。

土佐きんとん 2011年09月18日 09:23

コメント返し、拝読させていただきました。

それではコメント返し返しとさせていただきます。

成る程、色々と理由を考えているんじゃないですか。全然伝わってませんよ。

ただ、焰とか言うオタク嫌いなインテリが、魔法がどうのこうのと煩い大地と喧嘩して、いきなり五年後に証明しろとかわけのわか

らん事言い始める。

そんな印象しかありませんでした。

何故そこまで考えていて、書かないのですか？

そんなに尺が厳しいとも思えません。勿体無いですよ。

これは拙者の持論なのですが、ラノベの読者派基本馬鹿だと思っています。

ただ紙に書かれた文章を、その通りに頭に入れ、テーマとか作品が訴えてるものとか、そういうものを余り考えずに読んでいます。むしろだからライトノベルだと思っています。

眼光紙背に徹す、それは嘘です！

文字にしなきゃ読者には伝わりません。当たり前のように大事な事です。

それでは、これにて

第2回目

土佐きんとん 2011年09月17日 23:50

なんと云いますか、ただ起こったことを眈々と羅列しているだけなんですよね。

第一話でもそうでしたが、ツバサさんの文章を読んでいると、イラストの無いノベルゲーをやっている感じがします。……例えば悪いですね。

つまりは、情景やキャラの表情、仕草が一切と云っていいほど書かれておりません。そのため、キャラの心情や性格を読者がつかむ為のヒントが見当たりません。折角読者が入り易く、主人公の独特の感性を見せつけられる一人称なのですから、もっとそういう描写を増やしましょう。一人称である意味が無いです。

また最後の十行あたりですが、少し辛辣な言い方ですが、はつきり言って不自然です。

まずいきなり主人公が呪いを掛けられてるのを暴露しますが、アツサリ過ぎます、大事な部分なのに拍子抜けです。そしてこの呪いも終始大した要素として物語に含まれていないのが大問題です。

そもそも言葉が通じないのに、どうやって魔法使いだとわかったり呪いを掛けられたりしたんでしょうか？

彼女に会うために、魔法を調べる。しかしそれがなぜ始まりの書を探す事に直結するのかイマイチ理解出来ません。

まあ、単純に私の脳が弱いせいかもしれませんが……。

あと、彼女は深いところまれ、になつてますよ。

長文失敬、頑張ってください

ツバサを愛する者 2011年09月18日 05:11

ただ起こったことを眈々と羅列しているだけなんですよね。

その通りですね。

つまりは、情景やキャラの表情、仕草が一切と言っていていいほど書かれておりません。

ずばりその通りですね。

一人称である意味が無いです。

意味が無いですか……シクシク。

はつきり言って不自然です。

やっぱり不自然ですか？

まずいきなり主人公が呪いを掛けられてるのを暴露しますが、アツサリ過ぎます、大事な部分なのに拍子抜けです。そしてこの呪いも終始大した要素として物語に含まれていないのが大問題です

ごめんさい、この呪いつてそんなに重要だったですかね。それらしいことを書いたような気もするんですが……作者的にはそんな重要なモノだとは、考えてませんでした。日常生活を送るうえで不便なことはないと考えていたので……実際一六年間生きてますしね。

童貞ですけど……問題ないかなと……。この呪いが無くてもたぶん童貞ですからね。

まあ、イヴを探すヒントの一つになるかな、ぐらいにしか、考えてなかったですね。

そもそも言葉が通じないのに、どうやって魔法使いだとわかったり呪いを掛けられたりしたんでしょうか？

言いたいことはわかりますよ。

4歳の頃に本物魔法使い会ってるんですよ。父を殺した、魔法使いなんですけどね。その辺のことは詳しく書かれてませんね。それではわかるわけですね。ごめんなさい。

どうして呪いをかけれた？ 少年を助けるため、あとは少年を縛るのが目的です。意外としたたかな女なんです。

呪いのシステムは直接頭に流れ込んできたのです。

なら、念話ぐらいできるだろうと思うでしょう。

でも、彼女には真意を知られたくない理由があったのです。
だから、呪いをかけてすぐに姿を消したのです。

なぜ、始まりの書なのか？

有名な伝説だからですから、あとイヴに似ていたというのも理由の一つですね。まあ、母が探していた魔術書というのもあるですね。

他にもいろいろあるです。

あと、彼女は深いところまれ、になってますよ。

後で直しておきますね。ご指摘ありがとうございます。

ツバサを愛する者 2011年09月18日 11:31

内容が少しかたいというか、哲学的になっっているからな。シリ
アスな小説を書きたいわけじゃないです。ギャグマンガを参考にし
て書いているです。タイトルを見ればわかると思うですが、ギャグ
小説です。だから笑いがとれば何でもOKなんですけどね。あく
までも娯楽小説ですから。作者の考える娯楽とは笑いですから。
でも、ギャグだけだとよくわからない内容になちゃて、まさに力
オスです。

ラブコメにも挑戦しが、いきづまり、こんな中途半端な作品がで
きわけです。

ツバサを愛する者 2011年09月18日 11:41

イヤ！ だってツッコミどころがたくさんあるじゃないですか？
空から少女が降ってる、しかも自分の理想の女性。普通に考えた
らありえないことですよ。

ゆきあつ

もし自分で駄作だと思っても最後まで書くことが大切ですので頑張
ってください。俺は最後までおっかけますので。。。（7時
間前）

ツバサを愛する者

スピカちゃんといちゃいちゃ、ラブラブするだけの小説だっただ
けど、ストーリーが進まない。内容のない小説になってた。これ
では、マズイと思い、試行錯誤している内に、こんな内容になっ
てしまいました。だから、スピカの出番が異常に多く、ラストボスに
あっさりやられます。その方がスピカらしさが出せるからです。（
7時間前）

ゆきあつ

わかったわかった笑 俺が悪かった笑 もう何も言わないから
熱くならないでくれ笑（7時間前）

ツバサを愛する者

スピカらしさとは、その儚と可愛いらしさにあまり。ガラスのよ
うに壊れやすい心、でもそれを見せようとしない強さがあります。
裏切られ続けていた彼女は、少し臆病になっています。でもそんな
ところが可愛いです（7時間前）

ツバサを愛する者

最後に一言。小説を書くは難しい（7時間前）

土佐きんとん 2011年09月18日 15:21

なるそど、ギャグだったんですね。

私としては、シリアスに書きたいのにもかかわらず、誤植や脱字、不自然な展開の結果ギャグになってしまったのかな？ という感想でした。

折角ですから、この際主人公が唐突に熱血になったり、シリアスになったりするのをやめるのはどうでしょう。まあ…これは素人意見ですので、聞き流して貰って構いませんが。

特に気になったのがこの世界における魔法の存在です。どういう立ち位置で、どのような原理なのでしょう。

また、なぜバトルロワイアルが開かれてたり、その優勝賞品がオカルチズムな始まりの書なのでしょうか。魔法は一般に浸透していたんですか？ ではなぜ冒頭で焰は信じていないのでしょうか。ちょっと混乱してしまいました。

全体的に、下地はいいのに練り足りない気がします。

土佐きんとん 2011年09月18日 15:23

あと、理想の美少女が空から降ってくる

これはまあ、二次元ではよくある話ですから

読者は驚きません。

それよりも、物語の起点となりそうなその落下シーンが、たったの一行しか書かれていない事には思わずツツコミをいれてしまいました。

ツバサを愛する者 2011年09月18日 17:49

でもでも……実際に居たとされる人物だつて、みんな言ってるよ。記録にも残ってるし、母さんが残してくれた、本にも実在するって書いてあつたもん

ここで言っている『みんな』とは、イヴの伝説を研究している人です。

イヴという少女が居たことは記録に残っています……けれど、その少女が本当に魔法が使えたはわかりません。

例えるなら、イエス・キリストが本当に奇跡を起こせる力があつたのか？ わからないのと同じです。

でも、信じている人はたくさんにいます。イヴの伝説も同じ感じですよ。

一般には、魔法は復旧してません。だから魔法は迷信だと言われるんです。

また、なぜバトルロワイアルが開かれてたり、その優勝賞品がオカルチズムな始まりの書なのでしょううか

バトルロワイアルの開催者は教会の人間です。

教会の目的は、最強の自動人形を手に入れること、それ以外の自動人形の破壊です。

また、その餌が始まりの書だと考えてください。

始まり書は、すべての魔術書原点、これを元に多くの魔術書が作

られました。有名なところだと、ネクロノミコンや、エイボンの書や、金枝篇、ソロモンの鍵、ナコト写本、魔女の槌などです。どれもとても危険な魔術書です。

また、始まりの書には、持ち主に『神の力』を与えるという伝承があります。

餌としては十分な効果があります。

土佐きんとん 2011年09月18日 18:08

教会がそれだけの力を有している始まりの書を手放してでも、自動人形を壊したいのでしょうか。

というか、この世界にはクトゥルーの書籍も存在してるんですか

……

やばいっすね

土佐きんとん 2011年09月18日 18:13

あー、すいません、

意味を取りたがえてました。

つまり、たくさん自動人形が参加して戦わせ、勝ち残った最強を頂戴するつもりだったんですね。歯向かった奴は始まりの書でぬところせばいいと……。成る程、すいません勘違いをして。其れがしとした事が……

しかし、始まりの書持つてりやもうそれで全部済むような……

ツバサを愛する者 2011年09月18日 18:25

自動人形は世界を滅ぼす危険な兵器ですから。

しかも、始まりの書は、誰でも扱えるものではありませんかね。それ単体では何の意味もありません。イヴの遺伝子を持つモノにしか扱うことはできません。そのため、パンドラの娘イヴを捕らえ

のですが、始まりの書を使う資格を持ってなかったのです。

だから、教会は魔導書を餌にして、その資格者を捜し出すことにしたのです。

教会は手放すつもりはありません。

またパンドラの娘イヴは、聖女としてのカリスマ性があることから生かされています。

ツバサを愛する者 2011年09月18日 18:35

あと教会に寝返った、自動人形もたくさんいます。

カンナギルナまたの名をベルヴィルも、その一人です。

すべての自動人形が契約している訳ではありませんし、教会に付くことで……素晴らしい見返りもあります。衣食住も保障されます。一人で戦うより断然有利なんです。

スピカにも勧誘にきました。断りましたけどね。

土佐きんとん 2011年09月18日 18:41

イブの遺伝子を持つものって、世界に結構いるんすか？

というか、結構設定あったんですね。

知れば知るほど勿体無く感じてきました。

上手く書ければ別次元に面白いものになりますよ。

第1話 魔法少女との出会い そして契約。 その1

イヴと呼ばれた少女がました。全身を白いケープのようなもので隠した、天使のような少女だと言われています。背中に天使の翼があり、三対の大きな翼で空を飛び、あまたの魔術を操り、世界を救った聖女であると言い伝えられています。

その伝説の聖女が残した魔術書。それが『始まりの書』です。

それを元に多くの魔術書が作られました。有名なところだと、ネクロノミコンや、エイボンの書や、金枝篇、ソロモンの鍵、ナコト写本、魔女の槌などです。どれもとても危険な魔術書です。

また、始まりの書には、持ち主に『神の力』を与えるという伝承があります。

「イヴの伝説か？ 俺も母ちゃんから聞いたことがある

確か、聖母マリアに匹敵する人物で、数千年前にいた聖女をモデルにした小説だろ。俺は読んだことないけどな。でも昔は、魔法とか信じている人がたくさんいたって話しだからな」

子供を諭すように喋り出す。コイツは火竜焰^{かりゅうほむら}。大のオタク嫌いで、
メッドサイエンティスト 狂気の科学者だ。

頭が良く、白衣の似合う嫌味な男で、俺の宿敵だな。

放課後の教室で、何故こんな話をしているかというと、俺の夢を笑ったからだ。

高校受験を控えた俺達は将来のことについて話し合っていた。

俺の夢は、母さんみたいな立派な魔法使いになること、それが幼い頃の誓いで、少女と出会い唯一の方法だ。

その夢を嘲笑いやがっただから、俺はイヴの伝説を聞かせてやったんだ。

この世界に魔法使いがいるということを証明したかったただけなんだ。

「科学があまり発展していなかったからな。まあ、どうせ作り話だろ。」

それに今時宗教とか流行らないし、何か怖いじゃん。魔法は迷信でいいよ」

「でもでも……実際に居たとされる人物だつて、イヴの伝説を研究している人達も言ってるよ。ちゃんと記録にも残ってるし、母さんが残してくれた、本にも実在するって書いてあったもん」

「神学者の言うことなんて、俺は信じないかな？ 奴等はみんな嘘つきだ。イヴは確かに存在したのかもしれない、でも奇跡を起こす力なんてなかった。それが真実だ」

「あくまでも魔法の存在は否定するんだね。それで俺は魔法を信じるよ」

「まさか……本気で魔法とか信じてるのか？ これだからオタクは嫌なんだよ。アニメとかラノベにすぐに感化される」

「その何が悪いんだよ。魔法とか好きなんだよ」

人の話をまったく信じてない、その態度は気に入らないが、言葉が通じるというのは嬉しいものだ。

特に俺みたいなの！ 誰からも無視され、空気存在になり果てた者には——誰かと繋がっている実感があるだけ救われるのだ。だから拳を握りしめ怒りを抑えることができるのだ。もっとも俺は暴力は好きじゃないけどな。もう十二月も終わりだな、ふっと窓を見て思った。中学の生活もわずかだ。その前に俺は——コイツに認めてもらいたい、友達になりたいんだ。再び拳を強く握りしめた。「お前バカじゃねの。だから中二病とか呼ばれるんだよ。お前みたいなのがいるから中坊は夢見がちだとか言われるんだよ」

「それこそ濡れ衣だよ。偏見だよ。オタクは現実とフィクションの区別くらいつけられるもん」

「じゃあ何か、マザコンか？ 親の言うのなら何でも信じるのか？ 気持ち悪いんだよ」

「俺はマザコンじゃないし、魔術書は実在するよ。これはマジだか

ら

「だったそれを証明して見せるよ、口だけなら何とでも言えるよ。俺の前にその魔術書を持ってこいよ。まあ、無理だらうけどな。」

ふっははは」

「笑うんじゃない。魔術書を持って来てやるよ」

コイツは科学しか信じない、イヤ信じられないんだ。親が悪徳宗教にハマって家族崩壊を起こした、今は児童相談所で生活をしているが、もうすぐ出ていかなければならない。

だからコイツは魔法を憎んでいるのだ、全てを奪ったモノだから。トラウマの一つや二つ、誰もが持っているものだ。

いくら科学が発達しようと宗教は無くならないのだから――

「本気で言ってるのか？」

「ああ、おおマジだ！ 目にもの見せてやる」

「期限は五年……俺達が大人になるまでだ。デッドラインを過ぎたら全て忘れる。もう魔法には関わらないと約束しろ」

「ああ、わかった。その条件でいい、そのかわり、俺が魔術書を見つけたら、魔法の存在を認めてもらうからな」

「ふっ！ いいぜ、見つからな」

コイツは何も変わっていない、兎相で会った時のままだ。本当にコイツは不器用なんだよな。

俺がイジメられていると助けてくれたし、今だって俺の将来のことを真剣に考えてくれている。

たぶん……五年後というのは、成人式ことなんだろう？ その頃には、社会人としての自覚が芽生えだろう、中二病は卒業しているだろうと踏んだのかもしれない。ほんと愚直な奴だ。

第1話 魔法少女との出会い そして契約。 その2（前書き）

はじまして天馬 龍星です。

これは魔法少女と変態の話です。

第1話 魔法少女との出会い そして契約。その2

なぜそこまで魔術書にこだわるのか、それを語るには、幼い頃の不思議な体験を話さなければならぬ。

あれは小学校に入学してすぐのことだった。近くの公園で独り寂しく遊んでいると、歌声が聞こえていた。とても澄んだ綺麗な歌声で思わず聞きいつてしまった。心震えるこの歌声に興味を持った、俺は声の主を捜してみることにした。

そして世にも奇妙な少女と出会った。たぶんアレが初恋だったのかもしれない。

少女の言ってることは何一つ理解できなかったが……何故か？とても大切なことを言ってる気がした。真っ赤な瞳が、そのしぐざが訴えてくる、心をざわつかせる

少女の身体的特徴を述べると、髪は、澄みきった日の白い雲なみたいなのに、ふわふわと柔らかそうに靡いていた。一点の曇りも無い白磁の肌が人形だしさを強めていた。その肌よりさらに白いワンピースに白い靴、そして黒い日傘を差していた。ワンピースはとても質素なもので彼女には不釣り合いだと思った。雪の精霊を思わせるくらいの神々しさがあったから――

例え、言葉が通じなくても、仲良くなるのにさほど時間はかからなかった。言葉を交わさないでもわかりあえてる気がした。

なぜ、そんな気がしたのか？ 傍で笑っていてくれたから、ずっと一緒に居てくれたから、いつもいつも、公園にいた。約束もしていないに毎日毎日俺が来るのを待っていてくれた、それがとても嬉しかった。彼女は俺の深いところまで入り込んで来ていた。学校にも家にも居場所のない俺は、彼女と居るときだけ、安らげた。彼女も同じ気持ちだと思っていた。でも、そんなのは俺の勘違いだった。

事件が起こったのは、彼女と出会って二週間の後のもとても寒い日だった。今日も親父にしごかれて、これだから武闘派は嫌いなんだ。特に今日のはひどかった、まだ身体中が痛む。にしても今日は寒いな吐く息は白くなり、雪もぱらついている。手袋にマフラー、使い捨てカイロと防寒装備で、いつも公園に向かった、彼女に会うためだ、公園に到着した時にはうすらと雪が積っていた。雪の中で見る彼女はとても幻想的で、輝いていた。この世界に舞い降りた天使のようで、息をするのも忘れて見てしまった。それだけ彼女は美しかったのだ。

「……………」

俺が来たことに気付き、ゆくりと歩いてくる。左胸辺りに手をあて、呪文のようなものを唱えると少女はニコリと笑って走り去ってしまった。

次の日、公園に來ると少女の姿は無く、一枚の紙切れだけが残されていた。

スベリ台に貼られた紙には、汚い字で「さようなら」と書いてあった。

名前も知らない少女を捜す手段も無く、ただ呆然と立ち尽くすことしかできなかった。

一体彼女は何者だったのか？ 何を伝えたかったのか、わからないままである。

ただ一つだけ分かっていることがある。

彼女は魔法使いだということだ。

彼女からもらった力【呪い】がある。

魔法のことを調べていれば――

また彼女に会えるかもしれないという期待があった。

だから俺は始まりの少女・イヴが残した、魔術書を探し出すと決めたんだ。

あれから一年、俺は高校生になった、でもまだ魔術書は見つかっていない。

冬は嫌いだ、彼女のことを思い出すから……

第1話 魔法少女との出会い そして契約。その2（後書き）

最後まで読んでくれてありがとうございます。

面白かったですか？ わかりやすかったですか？ 気に入たキャラクターはいましたか？ 世界観はどうですか？ 好きですか？ 嫌いですか？

何か質問、感想がありましたら書いてくれるとうれしいです。

第1話 魔法少女との出会い そして契約。その3

魔術書か……どこにあるんだろう、早く見つけないとな！ やっぱり有力な情報は、例のアレか？

最近秋葉原に魔法少女が現れたという噂がある。

なんでも、世界の命運を駆けた異能力者達のバトルロワイアルがあつて、それに魔法少女も参加しているというもので、他にも亜種と呼ばれモノも参加しているらしい。

これはネットからの情報なので、その噂の真偽は定かではない。ソースも不明。

まあ、よくある都市伝説みたいなものだ。セカイ系が好きな人が考えた設定だと思われる。

俺の名前は天海大地、てんかいだいち重度の厨二病の高校生だ。

まあ、そう思っている思っている人が大半です。よく『現実を見るよ』と言われます。

しかしそんなものに興味はありません、俺は自分をかつこよく見せることしか考えてません。

そのためよく変つてると言われますとか、本気でそんなのがかつこいいと思つてゐるの？ と言われれることもあります、全然気にしません、聞こえません。

また、見知らぬ人に「イカレタ野郎」とか言われたことがあります、が、どれだけ気持ち悪がられてるんですか？ 計り知れませんが、そんな俺にも友達が二人います、もちろんリア充ではありません、リア充は敵です。

俺は二次元信者で、エロゲーやギャルゲーは大好きな人間です。

時は二〇三六年、世界は多く変わっていた。日本の首都は東京から大阪へ、頭脳は筑波になり、そして東京は日本から隔絶され、萌え文化にのまれ、昔の面影はない。

そんなこんなで、今秋葉原にきています、もちろん魔術書を探すためです。

でも折角来たので、友達を誘ってエロゲー買ってから探しますことにしました。

「じゃあなダイチ」

「おお！ またな」

かみなか しらやま
神中と白山と別れた俺の両手には、エロゲーショップで買った、大量のエロゲーが入った紙袋がある。もちろん本日発売したものです。

二人とも、とあるオフ会で知り合った二次元信者で、とても気の合う友達です。

空から女の子が降ってきた、最初は自殺志願者だと思った、この不景気で自殺者は後を絶たない。

だから飛び降り自殺は決して珍しいことじゃない。もはや日常茶飯事だ。

ただ一つ腑に落ちないことがあった。ここは公園だ、高い場所などはない。

では彼女はどこから落ちてきたというか？ 空からだ、たぶん、彼女は空を飛べるのだらう。

そうとしか考えられない。自分の考えにビックリしてエロゲーの入った紙袋を落してしまった。

数メートルに倒れてる少女を凝視する。

「あそこに倒れてる美少女は、神様からの送りモノだらう。うん、間違いない」

自分を落ちつけるように、小さく小さく呟いた。

（しかしなぜ？ 全裸で、萌えキャラが降ってきたのだらう。実際のところどうなっているんだらう？）

あちこち怪我をしている、誰かに襲われたのか？ それとも事故

か？ 判断情報が少なすぎる。

人に襲われた可能性も考慮して辺りを見渡すが、人影はなく物音すらしない。

気が付いた時には、人気のない公園に迷い込でいった。

確か白いワンピースに、黒い日傘を持った、小学生くらいの女子を追い掛けていたはずだ。どこか雰囲気がい出の少女に似ていたから、思わず後を付けてしまったが、結局見失ってしまった、尾行に気付かれたのかもしれない。変質者だと思われたのだろう。探偵や刑事に向いていたいな。

——よく考えたら、可笑しな話だ。あれからもう十年近くも経っているのに、姿が変わってなかった。まるで歳をとってないように見えた、そんなことありえないのに。

彼女を見失った場所に白い羽が何枚か落ちていた、これは天使の羽などではないのか？ そんなメルヘンチック考えながら歩いていたら、空から全裸少女が降ってきた。

夢でも見ているみたいで、こんな展開、エロゲーの世界に迷いこんでしまったみたいこと——とても信じられない。

リアルな世界で起こるわけがないだろう。全くどうかしている。そんなことはわかりきていることだ。

（数メートル先に倒れている、アレはなんだ）

わからないが、何だか少しワクワクしてきた。

非現実的に足を踏み入れたと思う——ライトノベルの主人公の気持ち少しわかった気がした。

それと同時に危険な匂いがプンプンする、上手い話には毒ある。

これは罠ではないのかという気持ちが芽生えはじめていた。裏があるはずだ、どう考えても可笑しいだろう。

関わったら大変なことになるぞ。

それでもいいのか俺。

自問自答。

（ここで逃げたらヘタレだ。美少女を目の前して逃げるなど愚か者

がすることだ)

何より胸が高鳴りを押さえることができなかった。

高校生活は、思っていたよりも普通に平凡で退屈なものだった。

家に帰ってマンガ・ラノベを読み、ゲームをやり、また学校に行く、その繰り返しだ。

高校生になって変わったことは何一つ変わっていなかった。

バイトを始めたわけでもないし、彼女ができたわけでもない。

中学生の頃と何にも変わってない。

成長していないだ。

それはなぜか！

勇気がなかったからだ。

一歩踏み出す勇気が――

だから、このフラグを逃すわけにはいかないという気持ちで一杯になった。

しかし、現状何をすればいいのかわからない。

とりあえず、救急車を呼ぶべきだろうか？

それとも人工呼吸……それ以前にまずは、呼吸をしているのかを確認するべきなのか？

こういう時にどうすればいいのか？ いまいちわからない。

とりあえず少女に近寄り、片膝をつき、呼吸を確認する。

どうやら息はしてるみたいだし、目立って大きな怪我は無い。

(わかっていたことだが、近間で見るとやはり萌えキャラだ。空を切り取ったような青い髪に、閉じた目を覆う長い睫毛。顔のパーツはどれを取っても俺の理想とするもので、完璧といってもいい。まるで俺の頭の中を覗いて、それを具現化したそんな少女だ)

まあ、そんなことはありえないんだけど、頭の中を覗くとか。

しかしこのまま放置するわけにはいけないので、呼びかけてみることにした。

「おお、大丈夫ですか？ 生きてますか？ 何があったんですか？」
反応はなかった。困ったな、どうするか？ 思索していると

「ここはどこ？ あなたは誰」

少女の声が聞こえ、思わず振り向いてしまった。

ビシューーーー

不覚にも、勢いよく鼻血が出てしまい、彼女にもかかってしまった、少し申し訳ない気持ちになる。

いかんいかん、まさか三次元相手にこんな約束な展開があるとは、油断した。

相手も凄く驚いている、しかし悲鳴をあげる様子はない。固まっているのか？

（そりゃ驚くよな、いきなり知らない人が目の前にいて、鼻血をかけられ、普通驚くよ）

俺の心臓もバクバクで、あたふたとしてる。もう拳動不審で完全な変質者だ、このままではまずい。

とりあえず血を拭こうとした、彼女の白く滑らかな体に血で汚してしまったから、そう決断し、彼女の身体を直視する、艶めかしい、それでいて素朴な感じもある。実体がまるで掴めないミステリアスな女性である。直視したまま動けなくなる。

身体にこびりついた血を、指で拭って軽く舐めつた。妖艶で萌えるしぐさだ。

「この血は、お前のか？ 感謝する」

（傷が治った！ 一体何者なんだ、この少女は）

腰まで伸ばした、艶やかな光を醸し出すスカイブルーの髪で胸を隠していると言っても、貧乳だけだね。とても残念な胸で、くせ毛のない整った清纯派に髪に、日焼けのない滑らかなので、生クリームのように白く柔らかそうな肌、全身から醸し出される甘い香りに魅了され、心奪われる。

大きく丸みを帯びたエメラルド・グリーンの瞳はネコみたいで可愛く、断然ネコ派の俺には好印象で、鼻と口は小さく、まさに萌えキャラと言った顔立ちだ。

十人中十人が萌えキャラと答えるだろう。

背は低く、百五十前後といった感じで、幼さない少女といったイメージの人形のように可愛い女の子である。

間違いない日本人ではない、だが外人のそれとはまた違う、言葉ではうまく言い表せないが、彼女からは何か異質なモノを感じる。本能的にこの少女と関わるな、危険だと訴えている、警告して来る。

だが、動けなかった。

蛇に睨まれた蛙のように、妖艶な体に魅了され動くことができなかった。

それだけ彼女の身体は美しかった。

まさに二次元美少女以上の美しさがあった。

まあ萌えキャラだけだね。

両手で胸を触り目線を下げ、彼女は自分の体を見る。

小さくて可愛い胸を直視する、視線を外すことができない。

（三次元はクソゲーで、三次元女に興味のないこの俺が、目を離せなかった）

「きゃああああ」

今度は叫び声をあげた、だが心地よい叫び声だった。

どうやら自分が何も着ていないことに気が付いたらしい。

耳まで真っ赤に染め腫を返し、そして逃げるように走り出した。

俺はその背中に向けて叫ぶ、できるだけ紳士的に優しく。

「ナイス——— 恥じらい」

そして親指を立てる。

（決してロリコンではないが、思わず叫んでしまう！ これはたぶんお約束なんだろう）

振り返って涙目で「ま……マント……生成」と叫び胸の前で祈るように手を合わせ、手全体が光り出す。そして少し開き、野球ボールぐらいの粒子の集まりが弾け、体に纏わりつきマントとニーソックスを形成した。

変身した。

それはまさに魔法少女が変身シーン。

このクソゲーな世界で、夢にまで見た。

魔法少女の変身シーンが見れるとは、それだけ生きてて良かった
と思える。

もう思い残すことはない。

イヤ違うだろう俺、ここで終わっていいのか？

いいわけがない、確かにこの少女は危険かもしれないでも、俺は
「魔法少女が大好きなんだ」と腹の底から歓喜の声を上げ、ガッツ
ポーズをとってしまった。

（だってリアルで魔法少女を見てしまったら叫ばずにはいられない
でしょう。これもお約束だよ。このチャンス逃すわけにはいかな
い。夢にまで見た非日常ライフが待っているんだから）

「私とした事が裸身を見られたぐらい動揺してしまったが……」

逃げるのを止め、振り返り叫んだ、しかし、その顔はまだ赤いし、
声も少し震えていた。

それがとても可愛く抱きしめたくなったがこらえて、俺は少女と
視線を合わせるために屈んだ姿勢をとることにした。

「リアル魔法少女とか……マジ、俺の予想を超えてるぜ！ ついに
俺様の時代がきた——」

「いいか、繰り返し言うが、血の提供痛み入る」

あまりない胸を張り、右手を腰にをあて、左手を突き出し、勢
いよく叫ぶが届かない。俺はしゃがんだまま一方的にわめき続ける。
もはや会話など存在しない。

「オタクが夢を見る時代は終わらない、エロは世界を救う！ 魔法
少女最高」

「人の話を聞けっ！」

腕を左右に振りオーバアクションで叫ぶも、聞く耳を持ったない。
自分の言いたいことだけをひたすら語る、相手の話はまったく聞か
ないで押しつけがましく、まさに自己中と言った感じだった。

魔法少女に会えたことがあまりにもうれしくて熱くなり過ぎてい

た。

「よし大丈夫だ、全て任せろ——で、その下はまだ何も着けてないのか？」

（言った後に激しく後悔した。でも、だって気になるじゃないか）
ゆでダコのように頬を赤く染め、目を見開きビツクリした表情はまた萌える。もうホント可愛いな、お持ち帰りしたいくらいだ、マジで！ 貧乳好きの俺としてはたまらないな、このほっそりとしたスレンダーな身体。

「ええい、もういい。ココはどこだ」

そのしぐさ、表情、全てが可愛くて、俺は思わず脱ぎ出していた。
これが妖しの術か？ 何て恐ろしい術だ！

魔法少女を目の前にして興奮を抑えることができなかったのかもしれない。

「この変態！ 人の話を聞け。コミニケーション能力ゼロか、それとも上手く言語が翻訳されていないのか」

視線を下ろして不敵な笑みを作り、蔑むように、憐れむように見つめてくる。とりあえず服を着るか、寒いからな。自制心は大切だよな、やり過ぎるとひかれるからな。少し自重してちゃんと相手の話を聞か、それがいいな。これ以上怒らすのは得策じゃない。

「うん、大丈夫。ちゃんと聞こえてるよ、でキミは何者？」

「よくぞ、聞いてくれた、わたしは兵器だ」

「……………」

「——兵器」

「うむ、そうだ」

どこをどう見ても、萌えキャラである。しかもボク好みである。

「こ……っころっ！ だからジロジロ見るのをやめろ」

耳まで赤く染めて、何とも頼りない紺色マントをしっかりと掴み胸を隠し、足を固く閉じているが——黒いニーソックスが眩しい。今の姿からは異質な物を感じない。俺の気の所為だったんだろうか？

まあ、可愛いからどうでもいいや。

「最初は堂々と見せていたじゃないか」

「それは確かにそうだが、なんか貴様に見られるのはイヤなんだよ」
何かを思い出したようにいきなり辺りを見回す。

「教会からの追っ手が！ 近くにいますはずだ」

手にマントが引つかかり下半身が露になるが、本人は気がついていないみたいだ。

危機迫る感じで公園を見回しているが、人の気配は全く感じない。
これだけ叫んでいるのに誰も来ない可笑しいのかもしれないが――
――少女が空から降ってくる何ていう、『王道展開』にあったせいで、驚く気にはなれなかった。

しかしというか、やはりというか、下は何も入っていないかった。
つまりノーパンだったなどという、いやらしいことを考える余裕はあった。

「どうやら近くに敵はいないみたいだな。貴様に一つ教えておきたいことがある。この身体のことだ」

「改まってどうした」

「大人しく聴け」

「ああ」

――それは戦国時代。

キリスト教、仏教、神道――あまたの宗教が神を求めていた。神を欲していた。天下統一のためには神が必要だと考えていた。花守の巫女の一族を筆頭に神を顕現される計画が進められた。神とはいかなる存在なのかを知りたかった。神の定義、神の在り方、神の規定。それらが全て謎だった。神とは一体どうゆう存在なのかわからなかった。だからこそ神を求めた、欲した。そして生み出されたのが自動人形。オートマター

生贄。器。神を顕現されるための道具。

元は巫女だったという。

霊的濃度を上げるための改造され、神の供物として洗脳を受けた

者達。生き人形。それは神の傀儡^{くぐつ}。

これで神を顕現できるはずだった。でも何も起きなかった。計画の儀式は失敗に終わったのだ。

彼女たちは軍事利用されることになった、死を恐れない最強女忍者^{くのい}の誕生である。

猿飛忍軍によってさらに改造され、兵器として造り変えられた。

戦乱の世に暗躍し、人知れず活躍続けた。彼らは歴史の表舞台に立つことはなかったという。巫術を基盤とした、忍術を用いた自動人形^{オートマター}。

あたかも人間のように、しかし決して人間では無い脅威の力――

「そうだ！　それが私だ。日本最強のオートマター」

誇らしげに顔を近づくる。よほど兵器として生まれたことが嬉しいのだろう。

俺には理解できない感情である。戦うための兵器だと言われて嬉しい人間がいるだろうか？　人間ではないのかもしれないが！　それでも彼女が兵器であることが悲しく思えた。

「まあ、驚くのも無理はない。これは極秘事項だからな」

「なんで戦国時代の兵器が空から降ってくるだよ」

「長き眠りで身体が鈍っていた。そうでなければ教会の奴等ごときに、遅れをとったりはしなかった。やつとの思いで転移術を使ったのが……」

「転移場所を間違えたという訳か」

「イヤー、それは違う。何か強力な魔力のようなものに引き寄せられたのだ」

「魔法には憧れているが、普通の人間だからな！　それは思い違いの勘違いだな」

「そんなはずはないけどな、まあいいや」

どうにも納得のいかなそうな顔をしているが、俺は嘘を言っていない。マント一枚というのは、いろいろとまずいよな、精神的に

——よし決めた。

「ちょっと、ついてこい。貴様の服を買ってやる。その格好ではいるるまずいだろう」

「施しは受けん。服ぐらい自分で生成できる、私をあまり愚弄するな」

「そういうなよ、貴様の力は有限なんだろう、血がなれば何も生成することができない。そうだろう」

「なぜ、それを知っている、貴様は何者だ。まさか教会の人間か？私を追ってきたのか？」

（やつぱり、そうか？ だから俺の血を浴びて傷が治ったのか？人間の血をエネルギーとしているわけか？）

「俺は教会の人間じゃない、お前の言動を聞いていればそれくらいわかる。いざって時に力が使えなかつたら困るだろう」

「お前が教会の関係者じゃないなら、私に血を吸わせる。そしてたからお前を信じてやる。もちろん買物にも付き合ってやる。なかなかの好条件だと思わないか？」

「思わないね、だって痛いのはヤダもん。それに面倒事にも関わりたくないしね。血を吸われるぐらいなら逃げるね、全力で……」

「私を置いて逃げるといふのか？ こんな軟弱者が教会の人間のわけないか？ 恥を知れ、それでも男か」

「何とでも言えればいいさ、俺は争いごととは嫌いだよ。だから、お前がどうなろうと構わない。俺は見ず知らずの人間のために命を掛けられるほど、おしとよしじゃないんだよ。成さなければならないうことがあからな」

（なんで、俺こんなこと話してんだろう、まるでバカみたいだ。関わりたくないならとつと逃げればいいのに……）

「お前にも成さねばならないことがあるのか？ わかった、お前について行こう」

「おお！ わかってくれたか、さっそく服を買いにいくぞ。ついて来い」

「私に命令するな」

「いろいろとめんどくさいヤツだな」

「面倒言っな」

地面に落としたエロゲーを拾い、俺達はコスプレショップを目指して歩くことにした。できるだけ人のいない道を選んで向かった。さすがに人通りの多いところを堂々と歩く勇氣はなかった。

なんとか、コスプレショップに来た俺達は驚愕していた。

「俺も来るのは初めてだが、ココは凄いな！ いろんな種類のコスプレがある、バニーや、ナースや、メイド、あとアニメの衣装もたくさんあるな」

「ああ、凄いとしか言えないな。こんな摩訶不思議な服を見たのは初めてだ」

（そりゃあ、戦国時代の兵器だからな、まあ、本当に戦国時代にこれほどの技術力があつたのかはわからないけどな）

「好きなものを選び、金の心配はしなくていいからな」

「本当にいいのか？ お前へ意外といい奴じゃないか」

「今頃気付いたのかよ、まあいい。早く選べよ。日が暮れちゃうから」

「ああ、そうしよう」

「よし、これに決めた。じゃあ試着して来るね、覗くなよ。覗いたら殺すからな、絶対殺すからな」

「わかったから、早く行け」

何度か振り返りながら、慎重に試着室に歩いて行く。俺はとりあえず試着室の側で待たせてもらうことにした。衣擦れの音が想像を駆り立てる、覗く気はないが、女の子の着替えを見たいという気持ちはある。それが可愛い子なら、なおさら見たいと思うものだ。男はそういう生き物だ。

しばらく葛藤が続いた、命は惜しいが、覗きたいという気持ちも

捨てきれない。俺はどうすればいいだと、頭を抱えていると……カ
ーテンが開いた。どうやら着替えが終わったようだ。

「どうかな？ 似合うかな？ 私、こういう服着るの初めてだから、
よくわかんなくて、感想聞かせてくれる」

とてもしおらしく言う彼女は可愛らしく、ハロウインの衣装も非
常に似合っていた。まさに彼女のためにしつらえた、ピンクドレ
ス、その上に紺のマントを羽織っており、頭上に輝く紺色のとんが
り帽子は魔女といった出で立ちを強くしていた。

魔法少女らしさの欠片もないコスチュームだ。まるで俺のこの身
をわかっていない。ほんとうにコイツは魔法少女としての自覚があ
るから……はなはだ疑問だ

「何だ！ その格好は！ 確かに好きなのを選んでいいといったが、
それはないだろう？ 魔法少女らしさがまったくない。却下だ、着
替えなおせといたいところだが……それはそれで、なかなか似合
ってるし、時間もないから今日のところは許してやる、ありがたく
思え。ふはははは」

「いちいち、何で偉そうなんだ！ 素直に誉められないのか？ 全
くホントめんどくさい奴だな」

苦笑を浮かべているが、どこか声は弾んでいた。会計を済ませて
俺達は次の目的に向かうことにした。

もちろん下着も購入した、さすがにノーパンのままではまずいから
な。あとブーツも買ってあげた、服に似合うやつね。いつまでも
靴下一枚で歩かせるわけじゃないでしょう。ふびんな子だと思われ
ちゃうよ、ホント捕まらなくて良かった。

「なあ、どこに向かっているんだ」

「お前は黙ってついてくればいいだよ」

紺色のマントを靡かせながら、人気のない路地裏を進む少女、
その斜め後ろからついていく俺。かれこれいぶん歩いている、ほ
つけないオーラーを出していたので、仕方なく一緒に行動してい

る。あくまでも、仕方なくだ。俺は決して優しい人間じゃないから、見ず知らずの他人のために行動できるほど立派な人間じゃない。ただコイツが本当に兵器なのか、気になっているだけだからな！

「ところで本当に貴様、兵器なのか？」

「その眼は、私の言う事を信じてないという眼だな」

「イヤ、貴様の言うことを信じてないわけじゃないだ、ただ現状それを確かめる術がないしな。でも決して疑っているわけではない。信じてくれ」

「まあ、こちら辺でいいか？ 人気もないこの廃墟ならゆっくり話すこともできるか？」

そう言いながら辺りを見渡す、ここは確かリーマンショックの影響で捨てられた場所……復興作業は進んでないみたいだな。

「魔法少女になる決意ができたのか？ 異世界の話を俺に聞かせるれるんだな。どんな悪と戦っているんだ、なんだかわくわくしてきたな」

「最初に言っておく、私は魔法少女になるつもりもないし、異世界から来たわけでもない。お前の考えているような不思議な力はない。しかし倒さなければならぬ敵がいる。頼む、私のパートナーになつてくれ、お前はなかなか見所のある男だ！ もちろんお礼はする。どうしてもバトルアで優勝しなければならぬだ」

「でも俺、普通の人間だし、戦う力なつて持つてないよ」

（確かに非現実の世界に憧れてたけど……それはエロゲーの世界で、バトルモノじゃないんだよな。武闘派の家に育ったからかな？ こういう運命的な出会いでもバトルモノ展開なのか？ 争いごとは嫌いなにいつもこうだ）

体力が尽き、喘息の発作も起こらなくなった、点感だけは謝しているが、あの家は嫌いだ。

「それは大丈夫だ、私はお前に力を与えることができる。ここで会ったのも何かの縁だ。力をしてくれ」

（何でこんな展開になっただろう、俺はただ平和な世界で魔法少女

とイチヤイチヤできればそれでいいのに、武術の世界は逃げられないのか？　これでは少女を助けた意味がないじゃないか？)

「私には共に戦う、パートナーが必要なんだ。頼む」

「そんなこといきなり言われても困るよ」

「血の契約を交わそうではないか」

「契約？」

「そうだ、契約だ。私と契約しバトロアで優勝すれば世界を変えるほどの力が手に入るかもしれないぞ」

「世界か？　なかなか面白そうな話ではある。だが断る、怪しげ宗教や武術勧誘はお断りだ」

「力が欲しくないのか？　世界を意のままに動かす力が」

「いらないな！　独裁者の末路は酷いものだ。それに争いは嫌いだ」

(まあ、ハーレム王国はちよつと創つてみたいけどな)

「やつぱりこの世界に私の味方など独りもないのか？　私は孤独だな！　帰る場所すらないとは」

陰りのある表情を見て俺は唇を噛みしめ、こみ上げてくる感情をぐつとこらえる。

彼女の虚ろな瞳を見ているといたたまれない気持ちになった、こらえきれない涙が溢れてくる、何とか励ましてあげたかった。彼女にはずつと笑顔でいて欲しかった。

「つまりお前は魔法少女で俺の家を仮住まいしたいと」

満面の笑顔浮かべ、歯を光らせ、ガッツポーズを取って

「という事だな！　パートナーになるのは無理だが、友達にならなくてもいいぞ」

それが精一杯だった、もつと気のきいたことが言えればいいんだけど、うまく口にできなかった。

「友達か？　変わったことを言う奴だなお前は、私は兵器だぞ」

顔を真っ赤に染めて「それも悪くないか！」と微笑む。

見てるこつちまで恥ずかしくなり。

顎に手を当てながら

「と、なると俺はマスコットか？　つまり兵器もとよい、魔法少女にエロい事しほうだいというわけか？」

子供だな。バカだから、こんな時どうしたらいいのか、わからないから、ついふざけてしまう。

真剣に人と向き合うことはできない。本当に弱く情けない人間なんだよ、つくづく嫌になるぜ。

「おい！　貴様はどこまでふざけているつもりなんだ。ええい！　それなら私がどんなに恐ろしい兵器を見せてやる」

「何を」

全身の筋肉を張りつめて身構える俺。　彼女から目が離せない一体どんなものを生成するつもりだ。ゴクンと息を呑む。

（アレ？　何も起きないぞ）

可哀想な目を見る彼女を見る。ここまで緊張感を出しといて、それはないだろうと思った。この空気に絶えかねた少女は、身振り手振りで説明を始める、その姿は滑稽でしかなかった。

「ち……ちがう！　これはちがうぞ。私は本当に恐ろしい兵器なんだ」

「わ・わかった、わかったから、泣きそうになるな」

「これはエネルギーが足りなくて武器を生成できないだけで……」

「燃費の悪い奴だな、やっぱり服を買つといて正解だったわ」

「また、私を愚弄するつもりか、許さんぞ！　お前から血を根こそぎ奪ってやる、覚悟しろ」

「ほお、やる気か！　俺は強いぞ、小さい頃から鍛えられてたらな」

手をポキポキと鳴らしながら

「やれやれ、どうやら少しお仕置きが必要なようだな、ここなら人目もないし丁度いい」

「ずいぶんと自信満々だな、逃げるじゃなかったのか？　この臆病者め」

「あの不思議な力が使えないということがわかったからな、今の貴様など恐れるに足らん」

「あまり私を舐めるな」

爪を立てて猫みたいに飛んでくる

（先手必勝ということか？ やられる前にやる。良い根性だ）

「とにかく血をよこせ」

「こら、抱きつくな？」

（あれ何ともない？ この子は本当に人間じゃないのか？）

異性に抱きつかれると、全身から猛毒を出し相手を殺してしまうという呪いがかかっている。

これはとある力を手に入れた、対価みたいなものだんだけどね。

望んで手に入れた力じゃないけどね。

まあこれが原因で、普段女には興味ない振りをしているだけなんだけね。

あとこの呪いを解くために魔術書を探しているだけだね。

もちろん名も知れない少女も捜すけどね。

いろいろと目的があるわけよ、普通の高校生にもね——アイツとの誓いも果たさないといけないしね、ホントやることがたくさんある。

「やれやれ、いくら昨今では美少女バトルが多いとは言え、安易に主人公に襲いかかるのは感心せんな。それでも魔法少女か？ 愛と正義のために戦え、そしたら俺も力を貸してやる。血はあげないけどな、痛いのはやだもの」

「いいか、私は魔法少女なんかじゃない兵器だ！ だから愛と正義のためには戦わない、自分の信念のために力を振るう」

（魔法少女じゃ無い、どうやらホントみたいだ……呪いが効かなかったしな。人間じゃない何て……あんまりだ）

その場に倒れこみ、涙を流しながらコンクリートを叩く。冷たくて堅い、でも俺には心地よいくらいだ。

「そんなに落ち込まなくても……」

「だから最初から言っているだろうが！ この身は兵器、戦に勝つ為の武器だと」

「ぐすん、そりやそうかもしんだけどさ。まあ、そんな都合良く魔法少女が現れたりしないよな」

「自分で言うのもなんだけど、兵器が見の前に現れた事にはやっぱり驚かないだな」

「イヴという少女が残した魔術書について何か知っていることはあるか？ 何でもいい、どんな些細なことでもいい、知っていることがあるなら教えてくれ。頼む」

「気持ちを切り替えて、今必要なことを聞く。俺にはまだあの少女がいるじゃないか？ 理想の魔法少女が……ひよつとすると彼女の手掛かりを知ってるかもしれないと思い問いかけてみた。」

「……………」

「その様子だと知らないみたいだな」

「イヴ？ 聞いたことがあるような？ 気もしくないが、よく思い出せない。でもマスターなら知っているかもしれない。マスターとは、私を生み出した人で、凄い博識なんだ」

「そのマスターというのは、今どこにいるんだ」

「それはわからない、敵に襲われてはぐれてしまったからね」

「そうか！ では貴様に用はない。イヤ、まてよ？ コイツが神秘的な力を持っているわけだし」

（変身もできるし、コイツといればそのマスターというのにも会えるかもしれない。独りで闇雲に探すよりも効率がいい）

「おい……ちよつと、どうしたんだ。急に黙りやがって、何を企んでいる」

「てっ事は……俺がお前を立派な魔法少女なるように教育すればいい。それ、全て、思うがままか？ よし決まりだ。俺がお前の面倒をみてやる。行くところないんだろっ」

「ちよつとまて……勝手に話が進んでいるぞ」

第1話 魔法少女との出会い そして契約。 その4

「やっと見つめた……永遠とも思える時間を生きて——」
機械的などても冷たい声が聞こえた、いつの間に現れたのだろうか。

目の前に、黒いミニドレス着た少女が立っている。

俺と背丈の変らない、でもどこか大人びた雰囲気がある女性。

少女は自称兵器を静かに見つめ佇んでいる。

その姿は、深淵の闇、深い夜、そして絶望的な黒を思わせた。

肩の上で切り揃えられた髪も、ひじまで覆う手袋もみんな漆黒で、手に握る剣……それも黒刃の剣だ。

剣先だけが赤い漆黒の両刃の剣は、艶めかしく光り、切れ味の恐ろしさを物語る。

左手で剣を軽く持ち上げた途端、黒刃に細かな赤の装飾文様が浮かび上がったと同時に、長い前髪の下の黒い瞳が、かすかに光を放つ。

「久遠の魔導具を渡せ」

（何を言ってるんだ！ この女は？）

「カサンドラ、お前も生きていたのか？ イヤ、永き悪夢から、目覚めたのか」

「ひさしぶりね、最後にあったのは一世紀くらい前だったかしらね。ホント懐かしいわ」

「もうそんなに経つのかしら、時が経つは早いものね、カサンドラ」

「一体何を話しているだ、貴様たちは知りあいなのか？」

「ええ、彼女とは古い付き合いよ、人間。大人しく渡してくれるなら、危害は加えないわ」

「ふざけるな！ そんなことできるわけないだろう。コイツは俺様の所有物だ」

「どうやら死にたいようだね、キミは」

不敵な笑みを浮かべ強く地面を蹴り、一気に距離を詰めるのカラサンドラ。

俺が身をひるがえすより早く首目がけて斬りかかる。

食らう寸前しゃがんで避けたが、すぐさま第二撃目を後方に転がって避けるが、頬をかすつていたみたいだ。血がパタパタ垂れた。

「どうやら武道の心得があるみたいね。でもただの人間じゃ、私は倒せないわよ」

「ここは一旦逃げるぞ！ コイツは危険だ」

「何処に逃げるといふの？ この時の止まった世界で。私の能力で時を止めているのよ、だからどんなに叫んでも助けも来ないわ」

「おい、奴の言っていることは本当か！」

「ええ、本当よ！ 私の能力は創造で、カサンドの能力は時の凍結」

「でもそれ可笑しくないか？ 奴が本当に時を止められるなら俺の時間も止めれば、それで済むだろう」

「そうね、たぶん彼女もまだパートナーを見つけてないからだと思う」

「確かに私はまだパートナーを見つけてないわ、でもそれだけじゃないの？ あなたから、強大な魔力を感じるの？ 初めは彼女と契約したのかと思っただけで違うみたい出し、でも普通の人間にこれほどの魔力はないはずだわ、あなた一体何者なの？」

「普通の人間だよ。両親も普通だしね」

（嘘である。両親のことはよく知らない。でも本当のことを答える義理もない）

「まあ、そんなことどうでもいいわ、どうせすぐに死ぬんだから」

「奴は本気であなたを殺す気よ、早く逃げて」

「逃げるって言われてもな！ 折角手に入れた、魔法少女をミスミス手放すわけにはいかないよな！ やっぱ俺も戦うよ」

（こんな危機的状況なんても恐怖を感じない。これも呪いの影響だろう、それに彼女を見捨てて逃げるといふ思考はなかった。もちろん

ん危機感はあるが引くに引けない状況だった。俺は臆病な人間だから、誰かを見捨てて逃げるなんて、勇気ものもないんだよな」

「あんた本当に馬鹿ね！　まあ、そういう馬鹿は嫌いじゃないけど」

「どうやら死ぬ覚悟はできたみたいですわね。せめてもの情けですゝ苦しまないように、一瞬で終わらせてあげますわゝ」

アレは一撃必殺居合いの構え。迂闊に近づくのは危険だな。ここは遠距離からの攻撃にきりかえるか

「おい、飛び道具か、何か持っていないか」

「ごめん、持っていない」

「そうか、ならしょうがないか？」

遠距離攻撃は無理だ。拳一つで何とかするしかない。覚悟を決め、地面を強く蹴り、カサンドラ目掛けて殴りかかる。

「ぐつは」

致命傷は避けたが、やはり斬られた。血がドバドバでてる。何て切れ味のいい剣だ、かなりの業物とみた。右脇腹がキリキリ痛む。

「おい、かなり血が出てるぞ大丈夫か」

叫びながら少女が掛けっ寄って来る。

「これくらい大したことない」

「そんな傷まで覆って、よく笑ってられるわね」

「俺には恐怖心が無いからな！　傷つくのも、死ぬのも怖くない」

（でも、痛いのは嫌いらし、血を見るのも好きじゃない。できれば争いごとにはかかわりたくない、しかし、なぜか見捨てることのできない）

「死ぬのが怖くない人間何て存在しないわ。死ぬのはみんな怖いはずだもん」

「感情の一部が欠落しているんだよ。そういう魔術に掛かっているだよ」

「いまから応急処置から、あまり動かないで」

ああ、ありがたいと思いながら、昔のことを話を始める。

「両親を早くに無くした俺は、親戚に引き取られることになった。よくある話だが、上手く馴染めなかったんだよ、新しい環境って奴にね。そして孤立した。」

家にも居づらくて、一人で公園で遊んでいた。そんなある日一人の少女と出会った。

傷だらけの身体を見て、何か感じるモノがあったのだろう。突然呪文のようなものを唱え、そしたら恐怖心が無くなった。普通ここは、傷を治すとか不死身にしてくれるとか、いろいろあるだろうと思ったが、文句を言うまえに姿を消してしまった。

だから恐怖心がないだけで、不死でもゾンビでも超速回復もない、普通の高校生だ。

特別な力なんて持って無いんだよ。それでもキミをおいて逃げたりはしない、俺の矜持から外れるからね」

話し終えた頃には応急処置は終わっていた。

自称兵器は俺の血を使い、壁を作り、敵の攻撃を防いでくれただけでなく、傷の担当までしてくれた。

何ていい奴なんだ、見ず知らずの俺を助けてくれる何て……クソ、泣けるぜ！

「もう動ける、俺も戦う。お前の力になりたいだ」

「ありがとう。でもこれ以上、無関係の人間を巻き込むわけにはいかないわ、これは私の問題だから。お前はここに隠れている」

「ふざけるな！ 貴様一人で何ができる、みすみす死に行くようなものだ。命を軽んじるな、成さなければならぬことがあるのだろう。なら、諦めるな、戦え、そして自分の意志を貫け」

「私とてむざむざ死に気はない。だが、しかし、な。お前はもうボロボロだ、その身体で無理をすれば死ぬかもしれない。そうなっちは目覚めが悪い」

壁に亀裂が走る、もう悠長に話している時間はないのかもしれない。

「最後、これでは言わせてくれ、死ぬな」

「当たり前だ！ もしもの時はコレを使え」

決意の言葉と同時にぐらいに風船のような物を俺に渡してき

「何だコレは」

「一度だけお前の命を守ってくれる。使い方はふくらますだけだ。うまく使え」

クソ！ 一人で行きやがった、かつこつけやがって、やっぱり正義の為に戦ってんじゃないか？ それでこそ魔法少女だ、俺もこんなところでじつとなんてしてられない。何か作戦を考えないと殺されてしまう。

壁が砕ける音ともに少女の悲鳴が聞こえた、俺は駆け出していた。無我夢中で走り出しのだ、少女の安否を確かめるために、全力で地面を蹴り、少女を探す。

そして瓦礫に埋もれている彼女を発見した。

「今、どかしてやるから待っている」

なんとか、瓦礫をどけ彼女を助けたことに成功した。

「おい！ 大丈夫か？ 血まみれだぞ」

「なぜ、出てきた。死にたいのか？ バカモンが」

「そんな、傷だらけ身体で他人の心配をするとは、貴様もずいぶん変わった奴だな」

「私達は似ているのかもしれない。強がり、意地っ張り、そのくせ、本当は弱い」

「ああ、そうかもしれない。だからほっとけないのかもしれない」

「仲良く話しているところ悪いんだけど、これで終わりにしてあげるわ。光を奪え、エクリプス」

少女のことで頭が一杯になり、敵が近づいてきていることにまったく気付かなかった。

辺りが真っ暗になる、世界から光が消えたみたいだ。何も見えない。

闇に紛れて無数の斬撃を繰り出してくる。アイツの悲鳴も聞こえ

た。

（バカなこの暗闇中で俺達の姿が見えているというのか）

音無なく迫ってくる刃、避けることは不可能に近い。完全に闇に溶け込んでいる、実戦経験をかなり積んだ、プロの暗殺者だ！

しかも斬れるたびに強い脱力感ある、まるで力を吸われているみたいだ、長期戦は不利だ。となると、とれる行動は一つだ。アイツの力に賭けるしかない。

「臆病者め、姿を隠しネチネチ相手を痛ぶることしかできないのか？ この弱虫」

「弱虫ですって、許せませんわ。この最強の一撃をもって葬ってあげるわ」

「俺の急所はここだ！ ちゃんと狙えよ」

「その減らず口も聴き飽きましたわ」

鈍い音が響き、光が世界に戻ってきた。やったな、特に作戦プランとかはなかったが、俺達は似たもの同士だ。奴等ならきつとやってくれると信じていたさ。これで俺達にも勝機が生まれた。

「一体何が起こったというのだ。なぜ光が戻った」

「地面を見てみる」

「地面が光っている。これはヒカリゴケか」

「それは普通のヒカリゴケ比較にならない明るさを放つ。どうやら半径三メートルまでしか暗闇にできないようだな」

（鈍い音の正体はゴムだった。ゴム風船で作った身代わり人形ですることで一命を取り留めた。そのあとは賭けだったが、成功して良かった）

「小賢しいことを。だがもう虫の息のようだな」

「ああ、このままでは死ぬ。まあ死ぬのは怖くないが、まだやりたいたことがあるから死にたくない」

恐怖心はないが未練はある、そんな心境である。恐怖心が無くても生への執着はある。とりあえずアイツと合流しよう、そして二人でコイツを倒そう。一人で出来なくても二人なら倒せるはずだ。ど

うやらアイツも同じことを考えていたみたいだ！ 何か叫びながらこっちに近づいてくる、声がだんだん大きくなる。俺も走り出す、彼女に向かって、全力で駆け出す。道をふさぐカサンドラ。

「そこをどけ、邪魔だ！ 俺達の道をふさぐな」

「なら、打ち破ってみてくださいな。お前たちの底力を私に見せてくれ、そして私をもっと楽しませてくださいな」

「私はここで壊されるわけにはいかない、これが最後のチャンスよ！ 私と協力してカサンドラを倒しましょう」

「それしかないか？ 俺もまだ死にたくない、あの少女に会ってないからな。いいぜ、協力してやるよ」

カランドラをはさみうちし、俺はありったけの力を込めた掌底を腹めがけてくりだす。同時攻撃だ、これはさすがに避けられないと思っただのもつかの間、身体を掴まれ、一回転し地面に叩きつけられ、その後俺の右腕を掴んで彼女のほうに投げられる。なんて俊敏で力強い動きだ、まったく見えなかったぞ。

「おい、変な所触るな、どけ！ くつつくな、変態」

覆いかぶさるように倒れた、俺は少女に罵倒された。すぐにどこうとしたが、変な倒れ方をしたしせいかな？ 絡まって身動きとれないという不可解な状態だ。甘い香りが鼻腔をくすぐる、とても幸せな気分になる。彼女の吐息や体温を肌で感じる事ができる、かなり密着した体勢だ！ この死んでもいいなと思えるほど心地良かった。

「コラ、息をかけるな、気持ち悪い。お前、今の状況わかってないだろう、だからそんなにふざけてられるんだよ。コラ、動くな。変なところに当たるから、この変態」

「仲良くじゃれあっているところ悪いんですが、そろそろトドメを刺さしてあげるわ、二人一緒に死んじやいなさいな」

「時間がない、早く私の血を飲め、死にたいのか」

「ああ、わかったぜ」

少女の首筋に噛み付く、血はとても苦く、錆臭いくてお世辞にも

美味しいとは言えなかった。

だが、死にたくなかった、だから無我夢中で血を吸った、血に飢えた、吸血鬼のように激しく吸った。

身体中が光出す、あまりの眩しさにカサンドラも近づけないようだ！ よし、ほどけた、身体を自由に動かさせるぞ、それに細胞の一つ一つが活性化しているのがわかる。傷がみるみる治っていく、全身から力が湧いてくる。これが血の力か？ 過ぎすぎる、一体どうなっているんだ。

「契約は成功したみたいね、力が溢れてくるがわかるわ。まるで生まれ変わったみたい」

「これが血の契約か？ 今なら何でもできる気がする。不可能なことも可能にできる気分だ」

こんなことならもっと早く契約しとけば、こんな痛いめにあわないで済んだのかもしれない。

（でもピンチからの大逆転の方がカッコいいか？）

「そうでなければ……面白くないわ、さあ、お前たちの全てを私にみせて。全力でお相手してあげるから、楽しいパーティーの始まりよ」
「貴様の戯言にいつまでも付き合うつもりはない。エロゲーを剣に変える力で一気にかたづけてやる」

（えっと、今日買ったエロゲーはどこだろう——あ・あった）

運よく近くに一つ落ちていた、エロゲーまでの距離約十センチ。

素早く地面を蹴り取りにいかうとするが、邪魔が入る。

（クソ、後もう少しなのに？ 手がエロゲーに届かない）

「自分の能力を喋るとは、救いようのないバカですね」

「それは貴様のほうだ、カサンドラ」

「どういうことですか？」

アマノムラクモノツルギ

「天叢雲剣生成」と叫び、手が光り出して少し開き、野球ボールぐらいの粒子の集まりが弾け、剣を構成していく。

それは両刃の大剣で、刀身は紫で、柄は黒。

大きさは少女の背丈以上あるが、片手で軽々持ち上げている。

ゆつくりとこちらに向かって歩いてくる。

「そういうことですか？　それで勝ったつもりですか？　爪が甘い
ですわ、スイーツのように考えですわ」

大剣を斜めに力強く振り下ろすが、軽く受け流される。

「残念でしたわね。このエクリプスはオレイカルコス製ですよ。
そんなナマクラでは、傷一つつきませんわよ」

この隙にエロゲーを掴み、武器に変えることに集中した。

ジャンルによって武器の形状が決まり、武器の効果が変わる。

俺が手にしているのは陵辱系、効果は服従。

形状は短剣。

刃渡り五センチぐらいの短剣。

材質はヒヒロカネ。

エロゲーが短剣へと変えていく。

両刃で細身の刀身は闇夜の中でも煌々と輝く緋炎。

それが自分の身に宿した力。

短剣を正眼で構えて地面を蹴ってカサンドラと間を詰め、素早く
頬を切り裂くことで効果が発動する。

「油断したな」

カサンドラの動きが止まる、これが俺の力だ。

「何をしたのですか、身体が動がまったく動きません。これはどう
いうことですか」

「今だ、トドメをさせ」

相手の動きを数分しか止めることしかできない。これも俺がこの
力を完全に把握していないからだ。

もって一、二分だろう、だから彼女にトドメをさしてもらったこと
なのだ。

「いちいち私に指図するんじゃないわよ、それくらいわかっている
わ」

「や、止める——」

構う事なく斜めに思い切り振りおろす、カサンドラの身体はか

ら血が噴き出し、地面を赤く染める。

「やった」

「イヤ、逃げられたわ。手傷を負わせることはできたけど」

「えっ！ どうやって逃げたんだ」

「それは簡単よ。あなたの想像以上に彼女の力は強力で、あなたの力は未熟だというだけのこと」

「俺の力は、ものの数秒しか効かなかったということか」

「そういうことね、この未熟ものめ。あと契約について伝えておかなければならぬことがいくつかある」

「簡潔に説明してくれ」

「お前の身体に私の血が馴染むまで三日（七十二時間）。それが過ぎたら二十四時間以内に私の血を飲まないと貴様は死ぬことになる」

「それはどうということだ」

「契約の対価だ、驚くほどのモノではないだろう。あと私の血を飲むことで繋ぎりが強くなる。もはや私達は一心同体なのよ。記憶の共有に感覚の共有。貴様が傷付けば、私も傷付く、もはや貴方と私は離れられない。どこにいても繋がっているのよ。」

それが血の契約……私とパートナーを組むということ、そして力を得るということ。

契約を終わらせるには、私の願いを叶える……それしか方法は無い。

貴様に選択の余地などもはやない。

さあ、私ともに生きましょう。

世界が終わるまで、ずっと、ずっと一緒にいましょう」

（ふざけるな……俺は、まだやることがあるだ）

などなどと思ったがとりあえず、短剣をエロゲーに戻し、散らばっているエロゲー紙袋に戻し、大急ぎで逃げようとしたが遅かった。巡回お巡りさんに捕まってしまった。罪名 幼女誘拐および強制わいせつ。もちろん無罪を唱えた。だが誰も信じてくれな

かった。

みんな口をそろえて『あいつならやると思ってたよとか、イカレ
タ野郎だからとか』、他にもこんなことを言っている奴もいた。

『ローリコンだからな、絶対やると思ってたよ』みんな好き勝手
いつてくれる。

第2話 白き少女と組織 その1

飾りつけもなくだった白だけの部屋。

そこにぽつんと、鳥カゴがある。

鳥カゴと言つても人間が一人丸ごと入る大きさだ。

その中で一人の少女が泣いている。

目は赤くはれ、喉もかれている。もう永い時間泣いているみたいだ。

少女の背中には翼があつた、白く綺麗な翼だ。

もしかしたら、少女は天使なのかもしれない。

決して比喻ではない、それくらい美しかった。

少女はある男の子を思い出していた。

とても優しい人のことを――

見ず知らずの言葉も通じない私のことを気にかけてくれた――
――とても優しい人である。

名前も知らないけど、その顔はわすれない。

もう会う事ができなくても。

鳥カゴの鳥は決して外にでることはできないから。

アレは淡い夢でうたかた。

でも決して忘れることはできない大切な思い出。

あの子は私のことを覚えているだろうか？

もし覚えていてくれたら嬉しいな。

ああ、会いたよ。会いたよ。

第2話 白き少女と組織 その2

地面が涙で濡れていた、何で俺は泣いているんだ。何か夢を見ていた気がするがよく思い出せない。

牢屋で迎える朝はとても寒い。

そして俺の身に何が起こしたのかを思い出し、愕然とする。

俺捕まっただけ。

そんな嘆き悲しんでいる時に、怪しげな神父が面会にやって来た。

もちろん知り合いではない。無神論者だ、教会なつて一度もいったことないし、教会関係者に知り合いはいない。

「お礼を言いに来たんだよ。スピ力を助けてくれてありがとう」

感謝の言葉を述べているのに表情一つ変わらない、のつぺり顔の男。服装は紺色のスーツに首から十字架を下げている。髪は綺麗に整っており、ほんとうに特徴らしい特徴のない男だ。

「なんのことを言っているのか？俺にはわかりません」

「キミが捕まる前に助けた少女のことですよ。我はその子の保護者みたいなものです」

「お礼は言葉より、俺の無実を証明してくれた方が嬉しいです」

「もちろん、そのつもりできました。ただし一つ条件があります。

何、簡単なことです」

何も書かれていない白い仮面を張り付けた顔で言われると、物凄く怖い。

「俺にできることなら何でもします」

「娘の恩人ということでしょうと調べさせてもらいました。特殊な環境で育ったようですね。しかも始まりの書を探しているとか？

実に面白い話ですね」

「神父さまは、一体何者なんですか なぜ俺のことをそこまで知っているんですか？」

「娘の恩人でも、それはお答えすることはできませんね。ただ貴様の敵ではありません」

「それで俺は何をすればいいんですか？」

「娘を助けて欲しいんですよ、あなたは娘と契約したんでしょ」

「まあ、成り行きでしましたけど、後悔はありません。魔法少女との契約は王道ですからね。もちろん助けるつもりですよ」

「ありがとうございます、断られたとうしようかなと思ってました。あなたを証明するものは、全て消去しましたから」

「消去？ それはアレか？ 捨てられたということか」

「少し違いますね、存在した痕跡を消したのです。簡単に言うと『過去改変』ですね、はい、だから捨てられたではなく、忘れられたです、世界に」

「そんなことが本当にできるのか？」

「出来ますとも、それが組織の力です。そして今日からあなたも組織の一員です」

「ちょっと待ってください、スピ力とか言ったか、あの子は守る。

だけど組織に入るとは言ってません」

「それは困りましたね、あたなの存在は全て消してしまいましたしね。組織に入ってもらわないと私の立場がないんですよ。考え直してくれませんか」

「それはできない」

「死ぬということですね」

「なぜ俺が死ぬ、貴様が俺を殺すのか」

「お忘れですか？ あなたは娘の血を飲まないと死ぬですよ」

「ああ、そのことか？ 血が身体に馴染むまであと二日、確かにあまり時間はないな」

「どうします？ ここで死ぬにますか？ まあ一樣娘の恩字ですから、丁重に埋葬してあげますよ。だから安心して、死んでください」

「少し考えさせてくれ？ すぐには答えを出せない」

「仕様が無いんですね？ では明日また来ます。それまでに考え

てくださいね。あなたに残された時間は……もうわずかですから、いい返事を期待してますね」

「わかりました」

「では、これで失礼します」

「いろいろとありがとうございます、ではまた明日」

そして神父と別れて牢屋に戻った。

神父の話を断っても地獄、乗ってみても地獄だろう。

どっちを選んでも地獄だな。

なら、神父の話に乗ってみるのも悪くないのかもしれない。

あの子にもう一度会いたいしな。

何て言っても魔法少女だしな、守ると誓ったからな！

まあ、ここに行っても死だけだしな。

しかし、存在消えたと言われてもいまいち、ピントこないな。

まあ、迷う余地なんてないだけだね？

こんな俺を必要としている人がいるんだから。

その人の役に立つことができるだけで幸せなはずだ！

よし、明日ちゃんと答えよう。

今日はもう寝よう、いろいろと考えたら疲れちゃった。

「おはようございます。決心はつきましたか？」

「組織とやらに入ってやる、だから早くここから出せ」

「わかってくれました、ありがとうございます。娘をよろしく願います。あとこれはスピ力を助けてくれた謝礼です。どうぞお納め下さい」

小麦色の封筒を押しつけてくる。中には十万ほど入っていた。

「こんなにもらえませんか」

高校生の自分が貰うには少し大き過ぎる金額だった。

「受け取ってください、ほんの気持ちですから。それに生きていくために金が必要です」

「わかりました。大切にに使わせていただきます」

第2話 白き少女と組織 その2（後書き）

最後まで読んでくれてありがとうございます。

面白かったですか？ わかりやすかったですか？ 気に入たキャラクターはいましたか？ 世界観はどうですか？ 好きですか？ 嫌いですか？

何か質問、感想がありましたら書いてくれるとうれしいです。

第2話 白き少女と組織 その3

牢屋を出た俺は、神父の紹介でとある教会に厄介になることになった。

そこは教会というよりも神殿と言った雰囲気建物だった。

巨大で立派な石組みの教会。

デザインはたぶん、イギリスとかにある大神殿だろう？

まあ写真でしかみたことのない建物だ！

石畳の教会を見るのはこれが初めてで目を丸くした。

扉を開けた先は礼拝堂になっていた。

石組みの壁にタイルの床、豪華なステンドグラス、列をなす長椅子に立派な内陣、十字架にかけられた救世主の像……どれも、西欧の歴史ある教会を思わせた。

教会という場所に来るのは、初めてだったが思わず息を呑んだ。異世界に迷い込んだと錯覚するほど中は美しく、空気が澄んでいて清々しい気持ちになった。

「申し訳ございません。ここは関係者以外立ちり禁止になっております」

紺なの修道服を着た、二十代後半と思しき女性が声をかけていた。とても落ち着いていた雰囲気纏った、修道服のとても似合う女性。

「俺はシリウス神父の紹介できたものです」

金の瞳を瞬かせ、納得したよう顔で手を叩き。

「ああ、あなたが……はい、話は聞いています。スピカさんの恩人で、確か天海大地さんですよ」

「はい、そうです」

「わたしは、シスターカレナといいます。立ち話も何でしょう、食堂まで案内します」

四十五度の綺麗なお辞儀に、爽やかな笑顔。差し出された手には

白い手袋がしてあった。その手を握りしめ俺は軽く頷いた。手袋越しとはいえ、女性と手を繋ぐのは恥ずかしいものだ、少し頬を赤く染めていた。

「こちらが食堂です。何か吞まれますか？ 紅茶とコーヒー、それとウーロン茶がありますが、どれになさいますか？」

「では、コーヒーを」

「ブラックでよろしいですか？」

「ミルク一つと、砂糖なしでお願いします」

「はい、かしこまりました。少々お待ちください」

綺麗に腰を三十度折り、あざやかな笑みを浮かべ、コーヒーを入れに向かった。

残された俺は辺りを見渡す、天使の絵が描かれたステンドグラスに、シャンデリア。長机に置かれた口ウソク、あと宗教画も幾つか飾つてある。待つこと数分で戻ってきた。

「熱いのでお気をつけてお飲みください」

テーブルの上にそおつと置かれる二つコーヒー。ミルクがたっぷり入ったコーヒーは彼女が飲むのだろう。

「ありがとうございます」

向かいの席に着き仕事の話が始める。その場の空気がらりと変わった気がした。

「あなたにはスピカさんの護衛と、各地で起きている超常現象を調査してもらいたいです」

「それが仕事内容ですか？」

「はい、そうです。やっていただけますか」

大人の笑みを浮かべ、艶めかしい声でお願いしてくる、その姿はまさに大人の女性と言った感じだった。

（いかにも怪しい仕事だ！ 超常現象の調査？ しかも報酬も高い。神父は死と隣り合わせの仕事だと言ってた。でも断ることはできない。断れば……務所……か）

「はい」

肩を落とし、口を震わせ、力なく答えた。まともに彼女の顔を見ることができない。

「ありがとうございます。」

彼女の明るい声に対して、目線を反らしたまま、苦笑を浮かべて軽く頷くことしかできなかった。

「では、宿舎にご案内しますので、わたしの後をしつかり連いてきてくださいね」

「わかりました」

シスターカレナの後を歩くこと数分、古びた建物が見えてきた。

「こちらの建物の一〇五号室です。あとこれが部屋の力ギです、無くないようにしてくださいね」

シスターから力ギをもらい、宿舎の中に入って行く。

薄暗く痛んだ廊下は、所々穴があいており、壁には不気味な染みがたくさんある。月明かりを頼りに歩いて行く。どうやらこの廊下は円形になっているらしい。五部屋で、二階に向かう階段らいきものがみあたらない。外から見た感じ五階ぐらいまでありそうなのに、不思議な建物である。

とりあえず、自分の部屋に向かうことにした。

「ここか、一〇五室は」

ゆるやかに扉を開き、中を覗く。

何もなかった、家具という家具がなかったが、思った以上に綺麗だった。白く真新しい壁に茶色っぽいフローリングで、埃一つなく、悪臭もしない。広さは四畳半ぐらいだろう。今日からここで生活することになるのか？

ただお布団がないのは厳しい、せめて毛布一枚ぐらいは欲しい、凍え死んでしまう。

よし、シスターに話して毛布を借りよう、そう思い経ち、教会に向けて歩きだす。

困った！ 道に迷ってしまった。土地勘もなく、シスターの後を連いていただけなので教会までの道がわからない。

道を聞こうにも人影が見えない。完全に遭難してしまった。

（このまま、ここで野たれ死ぬのかな？ どうしてこんな人里離れたところにあるんだろう）

見渡す限り木、鬱蒼と生えた木が見える。それ以外見えない。この木の所為で方向感覚が麻痺する。冷たい風と木々のざわめきが体を震わせ、魔性の森に迷い込んだ気分になる。

辺りは暗く、月明りとおぼろげな記憶を頼りに教会への道を探す。

「きゃあああ——」

女性の悲鳴みたいなものが聞こえてきて足がすくんで動けなくなる。

命の危険を強く感じた、ヤバイ！ マジでヤバイ！ この森で何かが起こっている。

（どうしよう、助けにいったほうがいいのか？）

そう思い、叫び声の方へ歩き出す。できるだけ静かに、物音をたてずに慎重に森の中を進む。

「この娘どうしますか、殺しますか！ アニキ」

「イヤー、縄で縛おけ。もしもの時人質として使えるからな」

「わかりやした」

話し声が聞こえてきたので、こっそり木の影から覗くと、ガラの悪そうな男達に少女が捕まっていた。数にして五人。捕まっている少女は、空から降ってきた、あの魔法少女だ！ 確か名前はスピカとかいったな。

服装は大日本帝国海軍航空隊のモノだ。

『零戦』の名で知られる零式艦上戦闘機は海軍の戦闘機であり、航空隊の着用する航空衣袴と呼ばれていて、布で作られていた。スピカが纏っているのは、上下ツナギ式で黄土色をしている。

アニキと呼ばれた男は、女子高生が持つてそうな、紺のナイロン製のうさぎのマスコット付いた、可愛いバグを持っていた。

たぶんスピカのものだろう。

なぜにバッグだけあんなに可愛いだろうか。実におかしいというか、アイツ！ うさぎが好きだったのか？ 驚きだ。

（とりあえず、助けないとまずいな）

「おい！ 貴様ら一体そこで何をやっている」

「見てわからないのか？ お宝を頂こうとしているんだよ」

「やはり貴様らは追い剥ぎだな、ということは悪だ！ 悪は許さない」

「正義の味方気どりの餓鬼が、いい気になるなよ。こっちには人質がいるんだよ」

スピカの首元にナイフを突きたて叫ぶ、仲間の一人が殴り掛かってくるが、そのパンチをカウンターで返す。まず一人。

「貴様、人質がどうなってもいいのか？」

「そいつが死のうと俺には関係ないことだ！ 俺はただ悪が許せないだけだ」

「イカレてやがる！ なら望み通り殺してやる、ざまあみやがれ」

スピカの首にナイフを突き刺そうとしたその時、ありえないことにスピカの蹴りが股間を直撃し、悶絶する男。

（アホだ！ アホがここにいて、人質に反撃されるなんて、アホとしか言えない）

「大丈夫ですか？ アニキ」

「よくもアニキをやりやがったな」

続いて二人掛かりで襲ってくるが、単調な攻撃なので避けるのは容易い。

「クソ！ こうなったら全員で行くぞ」

「さすがアニキ！ もう復活ですか」

どうやら、回復したらしい、意外とコイツ等、タフだな。

「つかまえた」

賊の一人が俺の肩を掴み叫ぶ。

「汚い手を退けろ！ カスが」

肩に触れてきた男を思いつきり投げとばす。

そして残りの三人を一瞬で蹴散らすし、バックを取り返す。

「クソ！ 覚えてやがれ」

「待ってください、アニキ」

仲間の一人を抱えて逃げていく、アニキと呼ばれていた男。その後ろを三人の下っ端。悪役とはいっつ見ても惨めなものだ。

「大丈夫かい、すぐにほどこいてやるからな」

「ええ、また助けてもらったわね、ありがとう」

「お前意外と弱いだな、あとこれお前のだろう」

そっぽを向いてバックを押しつける。縄はもうほどこいてある。

「血、貴様の血さえあれば、あんな奴等に遅れをとることはなかった」

バッグを受け取りながら皮肉言う。全く素直じゃないし可愛くもない。まゆ毛がよつて、怒っているようにも見えるが頬は少しだけ赤い気がした。手を伸ばし立ち上がるのを手伝う。細く綺麗な手だった。

「俺の血じゃないとダメなのか？」

「一度契約を結ぶと、契約者以外の血を飲むと死ぬだよ。そういう風に私達は作られている」

「じゃあ今は、俺の血しか飲めないのか？」

「まあ、そういうことになるな」

まゆ頭を上げ、頬を赤く染め気恥かしそうに言うスピカは少しだけ可愛いと思った。手や足をもじもじさせ、可愛らしく身体をくねり、髪を靡かせる、その姿は絵になっている。俺の心を震わせた。「なるほど、いろいろと大変だな！ ここで何をしてたんだ」

「貴様には関係ないことだ。私は人に干渉されるのが嫌いなんだ」突然怒りをあらわにするスピカ、心と表情の変わるヤツだ。一緒にいても飽きないタイプだな。冷静に観察する、にしても俺には関係のないことだな。別に口出しするつもりもないしな、ここは一つ謝っておこう、ついでに教会の場所も聞く事にした。

「個人的問題に首を突っ込むつもりは別にない！ 言いたくないならそれでいい。あとお前、教会の場所わかるか」

「先から貴様は偉そうだな！ 私はお前という名前ではない。スピカだ。覚えとけボケナスが！ 教会の場所なら知らん」

「お前——ここに住んでるじゃないのか？ なんて知らないんだよ」

「だから私はお前じゃない。スピカだ。知らないもは、知らないんだから仕方ないだろうが。ボケがっ！」

「逆ギレかよ！ どうするだよ」

「私が知るか？ ボケナス」

「クソ！ このままここで話していても、埒があかない。空から探すぞ！ スピカ」

「お前空を飛べるか！ 凄いな！ 私は飛べないぞ」

「俺だつて——飛べるか？ 貴様が俺を抱えて飛ぶんだよ」

「えっ！ どうやって」

「俺の血を吸って、空を飛べそなものを生成すればいいだろう」

「ああ、その手があったか？」

「やっと気がついた？ ホントバカだな」

「うるさい、さっさと血を吸わせろ」

「はいはい、わかったよ」

「なんだ、そのなげやりな返事は？ 貴様は私に対する敬意が足りないぞ」

「何でもいいから、早く吸えよ」

なんでコイツはいつも首筋を狙ってくるんだろう、出会ったときもそうだったな。たぶん深い意味とかないだろうな。バカだから——

——まあいいけど、やつぱり、血を吸われるのは好きになれないな。痛いし、力が抜けていく感じがあるし、もうとにかく最悪な気分になるだよ。

「終わったか？ なら、早速生成頼むわ」

「そのくらい言われなくてもわかってるわよ！ 少し黙ってなさ

い」

ツンケンしたい態度をとりがって、ツンデレでも目指しているのか？ 今時流行んねえよ！ まあ、でも意外と可愛いな。これはこれでいいのかもしれない。決して嫌いではない。

「なにっ！ ほさつと立ってのよ。できたわよ」

「翼か？ しかもハヤブサの翼。スピカ良い選択だ」

「では、いくわよ！ しっかり掴まっていないと、振り落されても知らないからね」

「これでいいか？」

「コラ、だからって抱きつくな、変態」

「無理を言っな」

「まあ、仕方ないか？ でも変なことしたら、容赦なく落すからな。いいな」

「何もしないよ！ たぶん？」

「たぶん？」

「何もしません」

「わかればいい、では行くか？ 空の旅に」

空から辺りを見渡す。一面に広がる緑。この森はどこまで広がっているのか？ 気になるが、今は教会を探すのが最優先事項だ。

「えっと、教会は！ あった。意外と近くにあったぞ」

「シスターカレナ。毛布一枚貸してください」

「ええ、いいわよ。あそこはとても冷えるから。暖かくしないとけないわよね」

「ありがとうございます」

「あと必要なモノがあったら、スピカちゃんに作ってもらいなさい」

「でも、アレとても疲れるですよね」

「じゃあ給料が入ったら、家具とかそろえればいいわ」

「それまで我慢するしかないですね。ところで給料日はいつですか

？」

「依頼達成後に渡しているわ、だからね、給料日とかはないの？」

「そうなんですか？ わかりました」

「では、失礼します」

宿舎・自室。

「ふう、何とか無事に帰ってこれたか？」

「私の血も汝の身体に溶け込んできているようだね、そろそろ、本契約に入るか？ 心の準備はできているか」

「契約って血を飲み交わすだけじゃないの？」

「まあ、アレは仮契約というか、時間が無かったんだ、しょうがないだろう」

「危機迫る状態だったからな、わかった。その本契約というのを結ぼう。俺の覚悟は遠の昔に決まっている。それにキミの血を飲まないと俺は死ぬだろう」

「そうだな、もう私の血は汝の身体に入ってしまったからな」

「拒否権何て最初から無いんだ。それにお前が気にすることない。

これは俺の選んだ道なのだから」

「それでも、お礼を言わせてくれ、ありがとう。では、一言信義と呼ばれる誓いの儀式を行なう」

一言信義とは、武士に二言はない、その武士道の“誠”と同様。

約束ごとに二言はなきようにという意味は合いの“信義”を合わせた誓いのこと。

まあ、平たく言うと、指切りと同じようなものだと考えていい。

「私の言葉に続いてくれ。」

我、誓い立てし言葉、忘れることなかれ

汝、聞き届けし言葉、忘れることなかれ

今度は俺がゆっくりと口を開き

「我、誓い立てし言葉、忘れることなかれ

汝、聞き届けし言葉、忘れることなかれ」

「我と汝、ここに結ぶ契り、互いに破ることなく、破られることなきよう努めるべし。」

誓いに？偽りあれば、その不義に制裁をもつて応じ、その命に鉄槌を振り下ろす。

我と汝、交わす言葉、これすなわち一言信義の契りなり」

綺麗な声が心に響く。

この後は確か、実際に誓う内容を言うんだったな……

「我、天海大地は、汝、スピカに誓う“キミと友達になる”と」

「我、スピカ、天海大地の誓い、聞き届けたり。これにて、一言信義の儀とする」

これで契約完了と

「大な魔力を感じたんで来てみたが。ついに見つけたぞ。星喰い」

「また変なのが出た。コイツに出会ってから変な奴に良く会うようになったな」

まあ、退屈はしないからいいけどね。

白のロングケープに身を包んだ白人女性がそこにいた。金髪碧眼か？手に持っているのはレイピアか？

身長は俺より高いな？たぶん百八十はあるな、しかも八頭身だ。胸はでかく、魅力的だ、F、イヤ、Gカップはあるな。スピカにない魅力を持ち合わせた女性だ。まあ俺は貧乳派だけどね。

「マスターはどうした。なぜおまえここにいる」

「貴様と一緒に居た男か、知りたいなら私の所に来い。そこはお前の居る場所じゃない」

「ふ、ふざけるな。仲間などにはならん。私は貴様らがしたことを決して忘れない」

（スピカの様子が可笑しいな、震えているみたいに見えるし、何処か感情的で。声にも覇気がない）

「なぜスピカを狙う。一体何者なんだ」

「おっと。自己紹介が遅れたな。私はイギリスからやって来た。星

喰い討伐部隊者で、名をメツリサ・リナルドという。貴様はそれが
どういう存在だかしているのか？ 世界を滅ぼすかもしれないほど
恐ろしい兵器だぞ」

「俺のパートナーを侮辱するな」

「侮辱ではない、事実だ。そいつは恐ろしい兵器なんだよ。地球そ
のものを壊しかねない力を持っている」

「コイツにそこまでの力があるとは俺には思えないがな」

「何も知らずに契約したのか？ そいつの力は貴様の手にあまるも
のだ。一滴の血でドラゴンを生成した恐ろしい女だ。万物を創造す
る力、例外は無く、彼女は全てのモノを完璧に創造することができ
る。それが例えフィクションでも」

「スピカを手に入れてどうするつもりだ」

「世界平和のために役立てる。争いのない平和な世界で暮らした
らう」

「そのためにスピカが必要だと言うのだな」

「ああ、そうだ。貴様ではその兵器は手にあまるだろう。我々なら
有効に使うことができる。もちろんタダとは言わない。一千万出
そう、それだけあれば、再就職先も見つかるだろう」

「断る。いくらお金を積まれてもスピカは渡すつもりはない。貴様
らがつくる平和にも興味はない」

「自分の身を心配しているなら安心しろ、契約解除の方法なら知っ
ている。星喰いを渡してくれたら教えてやる。それが条件だ」

「必要ない。契約したことは後悔してないし、自分の意思で決めた
ことだ。それにお前らは気に入らない。スピカをモノみたいに扱い
やがって、そういう考えが気に入らないんだよ」

「姿こそ人間に近いが、それは紛れもなく兵器だ、人間ではない。
そんなこともわからないのか」

「全然わからないよ。わかりたくもねえよそんなこと」

「どうしても、渡さないというのだな」

「ああ、渡さない。絶対にな」

素早く背後にまわり込み、喉元にナイフを突き立ててくる。

胸が背中にあつたている、だかその感触を楽しんでいる場合じゃない。

「早く俺から離れる、死ぬぞ」

「動くな、騒ぐな、お前は人……」

だから離れろって言ったに、結局何も聞き出せないまま死にやがった、クソ。

「ねえ！ 何で死ぬじゃったの？」

（震えも止まり、陽気な声で訊いてくる。やっぱりコイツのことはわからない。何を考えているのか全く読めない）

「俺の身体から出た毒にやられたんだよ。俺の身体は少し特殊でな、抱きつた相手を瞬時に殺すことができるだよ」

恐怖心を消してもらった対価がこれだよ。おかげで異性と付き合うことできない。

「で、この遺体はどうするの？」

「陽のあたりのいいところに置いとけば、自然消滅すぞ」

「マジでか」

「ああ、ホントだ」

「今日はもう疲れた、俺は寝る。お前も自分の部屋に帰れ」

「おい、待って！ 汝は、大切なことを忘れているぞ。まだ私の血を飲んでいない」

そう言われて見れば、血を飲まないと死ぬだけ、忘れてたわ。

「わかった。飲むから準備してくれ」

血の入った銀の聖杯。

「早く私の血を飲め、死にたいのか？」

「それでは頂きます」

「苦い……」

「まあ、そのうちなれる」

「そういうもんかね」

（記憶が、ビジョンのようなものが見える。これが記憶の共有か？）

一面に焼け野原が広がっていた。無数の死体が転がり、血の臭い充満している。

ここが秋葉原であることに気付くのに数分の時間を要した。

人影が見えた。

女性だ。

二人いる。

一人はスピカで間違いないだろう。あの軍服には見覚えがある。

もう一人は、成熟してきた、大人の女性だ。

でもどこか、あの少女に似ている。白髪に白肌でも傘は差してしない。たぶん陽が射していなかろう。空は黒い雲で覆われていた。

「私のせいでまた戦争が起きた。多く人が死んだ。私が殺したんだ」

返り血で、白いドレスは赤く染まっていた。

「泣かないで、貴女せいじゃないわ。貴女の力を求める、貪欲な人間が悪いのよ。あんなゴミために泣く必然なんてないわ」

「私が殺した。私が殺した。私が殺したんだ。私を守るために多く血が流れた。私がいなければ、私さえいなければ、戦争は起こらなかった」

「お願い私の話を聞いて、耳を傾け……自分をそんなに責めないで」

しかし、スピカの響きは少女には届かなかった。

そこまでだった、それ以上何も見えなかった

（今のは本当にスピカの記憶なのか？ 何て悲しくて苦しい、そして寂しい記憶なんだ）

「その恰好で寝るのか？」

「そうだけど、何か文句でもあるのか」

「別にないけど」

（寝巻姿も見なかったけど、まあいいや。軍服も似合ってるし）

「もう俺は寝るよ。スピカ、お前は隣の二〇四号室だろう」

「お休み」

スピカが部屋を出て行くのを確認して眠りにつくことにした。

「朝だ！ 起きろ」

「まだ眠いよ、今何時だ」

「わかるか？」

「時計ないんだけここ」

「朝食ができたらしい、食べに行くぞ」

「教会まで歩くのか？」

「ここの食堂で食べられる！ 黙ってついて来い」

「わかりました」

食堂は二階にあるらしい。またこの宿舎には階段というものがな
いらしい。では、どうやって行くのかというと、一旦外に出つて梯
子しを使って窓から入るらしい。まったく変わった入り方だ。

二階は食堂の他にお風呂や談話室があるらしい。

「なかなか美味しかったな！ いろいろと訊きたいことがあるんだ
が、訊いていいか」

食事を終えた俺達はとりあえず談話室でこれからのことを話すこ
とにした。

「まずは私達の絆を深めましょう」

「わたしの名前はスピカ、あなたの名前は？」

「俺は天海大地、一様お前の護衛だ。よろしくな」

「ええ、こちらこそ、よろしく」

「組織のことを教えてくれ」

「まあ単刀直入ね。でも私もそんなには知らないわよ」

「それでも構わない。知っていることを全部教えてくれ」

「わかったわ。教えてあげる、その代わりわたしの質問にも答えて

ね」

「ああ」

「世界規模の宗教組織なんですって。何でも人類が生まれる前から存在していたものらしいわ。組織の名前は不明、その目的も明らかになっていない」

「超常現象を調査することが目的じゃないのか」

「それは本来の目的を誤魔化すモノ。他にもいろいろやっているわ」

「始まりの書でも探しているのか？」

「わからないわ」

「質問を変えよう、シリウス神父のことは知っているよね」

「ええ」

「一体何者なんだ」

「私の保護者で、魔法・魔術の研究者らしく、昔アイルランドで魔法・魔術を学んでいたと聞いたことがあるわ。歳は不明だけど多分人間ね。あとマスターの友人らしいわ」

「アイツは信用できるのか？」

「それはわからない。私もほとんど話したことがないから、でも悪い人ではないと思うわ」

「そうか。今のところは様子見ということか」

「他に訊きたいことはある？」

「今のところコレくらいかな」

「では私からいくつか質問させてもらうわね。答えられる範囲でいいから正直に答えてね」

「ああ」

「なぜここに来たの？ 目的は何？」

「それはキミ会いたかったからというのもあるが、死にたくなかったからかな、やっぱり」

「あの子ため？」

「あの子？ 誰のことを言っているだい」

「気にしないで、今言ったことは忘れて」

「なんでだ」

「なんでもいいから、忘れなさい」

「わかった、そう睨むな、もう変な詮索はしない」

「ならいいです。貴殿、桜の息子らしいな。シリウスから聞いた時は、正直驚いた。だが私の眼に狂いなかったということだな」

「知り合いなのか？ 母さんのことを教えてくれ」

「時期が来たら話そう。今はその時ではない」

「そうかよ？ 話せないことばかりじゃないか」

「まあ、そう怒るな。これが最後の質問だ。始まりの書を手にして、何を成す」

「まず呪いを解きたい、この身体じゃ女の子と付き合えないし。あとーそうだな、あの名も知らない少女に会いたいかな。それと魔法使いになりたい、子供の時から夢だからな」

「それだけか。始まりの書があれば世界を創り変えることもできるんだぞ」

「興味ないね」

「ふっ！ 興味ないか、お前らしい答えだ。よし、カレナの所に行くぞ。教会までの道はもう覚えただろう」

「完璧だ。任せとけ」

教会・食堂。

「貴方達にはアキバに行ってもらわう。そこで人体自然発火現象の調査を行ってほしいの」

「人体発火ですか？ それは確かに超常現象です。人の身体が急に燃えだすとは」

「ええ興味深いわ、もしかしたらアレが関わっているかもしれないしね」

「呪術を用いた自動人形か？ 確かにその可能性はあるな」

「時間が惜しい、もたもたしてないで、秋葉原に行くぞ」

「その前に一度部屋に戻ってみて。シリウス神父から大地君宛てに荷物がとどいてるの？ きつと役に立つはずだから持っていくといいわ」

「はい、わかりました。では一度部屋に戻りますね、いくぞスピカ」

「ええ、私はここで待つてるわよ、準備ができたなら声をかけて」

「わかったよ、独りで戻るよ。大人しく待つてるんだぞ、いいな」

「まず呪いを解きたい、この身体じゃ女の子と付き合えないし。あとーそうだな、あの名も知らない少女に会いたいかな。それと魔法使いになりたい、子供の時から夢だからな」

宿舎・自室。

「え」と、神父からの荷物はこれか？ 中身はエロゲー、アキバの地図に、怪しげな魔術書。あとはケイタイ、ノートパソコンにリュック。それから意味不明なガラクタがたくさんか」

ノートPCもあること出しネットで調べて見るか？ 頭に埋め込まれたIDチップを利用することで電話線を介さないで、ネットに接続することができる。しかも無料。

人体発火

概要 「人体自然発火現象」という呼称は基本的に、人体が燃えてしまった状態で発見された事例に対してさまざまな判断が加えられて用いられている。

燃えてしまった人の周囲には火気がなかったなどの理由により「人間が自然に発火した」と判断した人が、その事例にこの呼称を用いているのである。

たとえば、ある人が友人や同僚の家や仕事場に行ってみたら、その友人や同僚の身体が一部ないしほとんどが燃えてしまった状態で発見され、なおかつ周りにはストーブなどの火の気が無く、人体の周囲だけが焦げ、部屋全体は燃えておらず、しかも人体そのものは

ほんの一部を残して炭化ないし焼失してしまっている状態で発見された、といったような事件が、（今まで知られているだけでも）数百件以上発生しているのである。

発見された時は死体がすでに燃え終わった状態で発見される事例も多いが、死体が燃えている最中に発見された事例もある。

発火は、一定の時間でおさまる。

また、発火後の炎上の仕方は、はっきりと下半身のみを残して焼けていたり、片腕だけだったり、背中の一部のみだったりする。被害者は死亡した状態で発見される事例が大半であるものの、命にかかわらない部位が焼けたのみで生存した者も多くいる。

なるほどこれが『概要』か？

仮説は、たくさんあるな！ 面倒だけど一通り見ておくか？ これも仕事だしな。

・アルコール大量摂取による発火説

「アルコールを大量に摂取することによって、体内にアルコールが残り、残ったアルコールが燃料状態になる」という説である。しかし、アルコールを摂取しない人も被害に遭っているため、現在ではこの説は否定されている。

・リンによる発火説

「大気中で激しく燃え上がるリンが、発火を引き起こしている」とする説である。

しかし、リンが体内で発火することは考えにくい。

・プラズマ発火説

「プラズマが被害者に偶然移ることによって、発火する」という

説である。

「イギリスでプラズマが多く発生するため、イギリスでの事例が集中している」ともいわれていた。

・人体ロウソク化による発火説

「人体がロウソクのような状態になることによって発火する」とする説である。

「火災を誤認した」として「何らかの疾病などで急死した人物の着衣にタバコや照明・暖房などを熱源として火が付き、締め切った断熱性の高い屋内で着衣やその周辺がゆっくりと燃える過程で人体の脂肪分が燃料となり更に燃え続け、周囲への延焼も無く室内の酸素が消費されつくして建物が延焼せず鎮火した偶然の結果だ」という推測もなされた。

・人体帯電説

「被害者の体内に、ある一定の量の電圧が発生し高温になった状態で、何らかの理由で発火する」という仮説である。

・発火性遺伝子による発火説

「人間の体に含まれる遺伝子の中に、発火性のものがあり、それが突然発火する「要出典」」という説である。

・その他

漂白剤・消毒剤として用いられる次亜塩素酸ナトリウム水溶液を浴びた衣服を洗浄せずに乾燥させ、着用していたところ突然爆発した事例がある。

これは化学反応によって塩素酸ナトリウムなどの強酸化剤が生成され、摩擦熱などによって着火したものである。「要出典」

衣服に用いられるフリースは構造上多量の空気を含むため、調理

時の不注意などで着火すると爆発的に炎上することが知られている。これは起毛部分の多いセーターなどにも見られる「着衣着火」および「表面フラッシュ現象」と呼ばれる現象で、調理のための熱源コンロを操作した際に袖口に着火したケースや、タバコに着火しようとして胴体に引火したケースが報告されている。

こうして着火したものが、そのまま全身の表面を移動するように燃烧が進行することで全身大火傷を負う危険もあり、死亡したケースも少なからず存在する。

特に寝巻きやバスローブ・セーターなど、柔らかな風合いが好まれる着衣で、手触りを良くするために緩やかで起毛させてある素材の危険性が高い。

フリー百科事典『ウィキペディア』より

なるほど全然わからない。まあ調べるのはこんぐらいにしておくか？

パソコンを閉じ。ケイタイはズボンのポケットにしまい。エロゲーと地図はリュックに入れる。

持つて行くのはこれくらいかな。

よし準備もできたし教会に戻るか。

早く戻らないとスピカに怒られるからな。

教会に戻って見ると、白いセーラー服を着た少女がいた。

襟と袖口に紺色の三本が入っており、胸元のスカーフと下を合わせるスカートも紺で統一されてある。三つ折り白ソックスもあいまって鼻血を出しそうになった。

自然な美しさ。素朴で家庭的な安心感をかもしだす、和心だった。「スピカちゃん可愛いでしょ！ さすがにあの格好じゃ目立つからね、着替えさせたの」

（まあ、確かにあの軍服で街を歩いたら目立つよな）

「あとこれ——秋葉原で起こっている事件の詳しい資料よ。事件解

決のために使って」

「ありがとうございます」

小麦色の封筒を受け取り、無くさないようにリュックにしまっておくことにした。

「あんまりジロジロ見るな、バカ」

「その服。超似合ってるじゃ、めっちゃくちゃ可愛いよ」

「そうか、まあ悪い気はしないな。でも私には少し可愛過ぎないか」

「そんなことないわ！ 同性の私から見ても綺麗だと感じるもの」

「でもこの格好で外を歩くのは、恥ずかしい」

（何故？ 夏服なんだ！ 今は冬だぞとツツコミを入れたいのに、言うタイミングがわからない。二人ともそのことに触れようとしていない。このまま外に出れば確実に目立つ）

「それは困ったわね。どうしましょう」

「あ、あのちよつといいですか？ その服装で外に出るのは止めた方がいいと俺も思います」

「やっぱり変か？ 外に出たら笑われるか？」

「全然変じゃないよ、すーんごく似合ってるけど——」

「けど何だ。はっきり言ってくれ、頼む」

「それ夏服だね。真冬に着てたら、多分目立つと思うだよ」

「そうなのか？ これは夏服なのか」

（えっ！ そこ、そこを訊くの？ どう見ても夏服だね。生地が薄いし、半袖だし。間違いないく夏服だね）

シスターに助けを持ってみるが、微笑んでるだけで何もしてくれない。この人、わかってやってる。絶対楽しんでる。

「まあ、なんだ……。露出が多い服は夏で、少ないのが冬服だ。覚えておけ」

「なるほど、露出が少ない服を着ればいいだな。じゃあ着替える必要なかったな」

「軍服もマズイ、というか、目立つ。そうだ！ トレンチコートを着ればいいよ。よし、それがいい」

「おお！　そうか、コートを着ればいいのか。カレハはトレンチコートを貸してくれ」

「ええ。いいわよ」

「これで完璧だな」

セーラー服の上に紺のコートを羽織ったスピカが自信満々に言う。

「秋葉原を歩いても目立たないはずだ」

「ところ、お前は準備できたのか」

「OK」

「じゃあ、行くか」

第3話 伝説ハツカーと魔女（前書き）

お久しぶりです。

第3話 伝説ハッカーと魔女

アキバ・裏路地（ジャンク通り）

資料に書かれた事件現場に来ている。スピカに普通的女子高校生というものを一通り教えてあげた。

大半はウソである。なぜならば俺が知らないからだ。まあ大丈夫だろう。

「ここが事件現場か？ 特に変わったところはないな」

「魔力の残留を感じるのよ、あなたは何も感じなの？」

「そう言われてもな、わからないよ。どんな感じだよ」

「形容しがたいわ、まあわからないならいいのよ。ここで何者かが、異能を使っただのは、まず間違いないわ」

「奴等が関わっているのか？」

「その可能性は高いわね」

「お前は奴等の居場所とかわかるのか」

「魔力は感じないはこの辺りにはいないみたいなのよ」

「近づけばわかるのか」

「ええ、たぶんね」

「じゃあ、まずは情報収集と行きますか」

「ええ、それしかないわね」

シスターカレハから貰った資料には大したことがかかれてなかった。

事件現場と被害者の数。他には目ぼしい情報はなかった。

廃ビル、そこに伝説のハッカーいる。

仁科芳雄博士の優れた遺伝子を引き継いだ男。

強固なセキュリティも通用しない、世界の何処へでも潜入し情報

を引き出すことができる。金では決して動かないが、女には弱いという噂。

アキバの都市伝説の一つ。

「その伝説のハツカに会いに行くの？ 場所はわかってるなの」

「ああ、俺のマブダチだからな！ 普段はジャンク屋で働いているんだ」

「お前の友達ということは……変態なの？ 同類なのね」

「奴は確かに女好きだが、大丈夫だ！ 俺以上に二次元信者だから、三次元の女は安全だと思う」

「お前以上なの？ それはいろいろと心配だなよ。やはりここは別行動にするべきね、お前はその友達から情報を聞き出すのよ、私は別ルートから探すの」

「え〜〜〜スピカも一緒に行こうよ、きっと楽しいよ」

「イ〜〜ヤ〜〜なの〜」

「何でだよ。伝説のハツカーに会いたくないのかよ。そしたらお前のマスターのことともわかるかもしれないだろう。会いたくないのか」

「会いたい……でも……変態の所に行くのわ嫌なの。だからお前一人で行けなのよ」

「わかった、待ち合わせ場所は、ラジオ会館の前でいいな、あと時間十七時」

「了解なのよ」

廃棄された雑居ビルは駅の裏手にある。街の灯りも届かない、闇の中にそれはある。

最先端技術を扱っていたこのビルもリーマンショックの影響で倒産した。

「ひさしぶりに来たが！ とても人が住める場所とは思えない」
部屋の一角からぼんやりと光が漏れている。

「白山、俺だ！^{しやま} ダイチだ！ お前に訊きたいことがあつて来た」
ブラックカーディガンに迷彩ミリタリーカーゴを着た男が姿を現した。どう見ても中年オジサンである。不精髭^{ぶしょうひげ}にぼさぼさな頭。近いうちにハゲるな。お腹はもちろん出ている。相変わらず運動とかやってないんだろ。引きこもって機械とかいじってるんだろ。な。

「おお、来たか、待つてたぞ。立ち話も何だ、まあ中に入れ」
「ああ、そうだな」

部屋の中には所狭しと機械が置いてある。何の機械なのかはわからない。

「電気とか通ってるだよな、普通に。よく取り壊されなかった」

「コネだな。無理言つて親父に頼んだからな」

「お前の父つて確か『白山純』だよな。スカイブルーネット、バージョニカロスの開発者にして、ネット魔術師と称される男だよな」
ターミエーターを観賞中にひらめいたと言われている。自我を持ったコンピューターで、東京全土を監視するために作られた。東京から出ようとする者を瞬時に殺す。手段は選ばない。そのため巻き込まれる人多い。

また、経済、政治、宗教、世界構造を裏から操っているという噂もある。その力は東京だけでなく世界をも監視しているという。その実態のほとんどがブラックボックス。開発者の白山純にしかわからないプログラムで作られている。ネットの魔術師と揶揄されるだけあつて、彼の登場でインターネットは格段に進化した。世界最大のSNS・セクリッド。電話回線なしの高速インターネット。情報処理スピードとセクリティが格段に上がった。

スカイブルーネット、バージョニカロス。謎の多いコンピューターでる。

「そうだけど。世間が騒ぐほど凄い男じゃないぜ」

「まあ、いいけど。そんなにココが気に入っているのか」

「秘密基地つぼくて、好きなんだコ」

「そんなもんか？ あと前来た時より機械類増えてないか」

「俺にもいろいろとあったからな」

「おい、どうした。何でいきなり泣くだ」

「この世からお前の存在が消えたかと思ったんだよ。本当に。捜したんだぞ、携帯に電話しても繋がらない。学校にも行ってない。お前の家にいたら、ウチには子供はいませんとか、わけのわからないこと言われたしな。いくら俺でも、お手上げで、どうしようか？

困っている時にお前から連絡があったわけだ」

「存在の痕跡を消したとか……言ったような気がしたな。よくお前は覚えていたな」

「選ばれた存在だからな、俺には特種な力があるだ」

「どんな力だ」

「それはな、機械とリンクする力だ」

「おお！ 地味な力だ」

「地味じゃないこれは凄い力だ」

「どんな凄いことができるだ」

「ハッキングができる、あと機械と会話できる」

「ウイルスを流すとか機械類を操るとか出来ないのか」

「出来ない、だが、バレずに情報を盗むならできる」

「相手に攻撃はできないのか」

「出来ない、やれば俺が死ぬ」

「で、どうやってその力を手に入れた」

「それは教えられない、でも、今貴様ならおうよその検討はついているじゃないのか」

「雑談はこれくらいにして、本題に入るぞ。アキバで起こっている人間発火事件を調べているだが、知っていることがあたら教えてほしい」

「今、ネット上で人気のあの事件か。ああ、知ってるぜ」

「やっぱり知っていたか」

「だが、只で教えるわけにはいかない、条件がある」

「何だ、俺に出来ることなら何で言ってくれ」

「お前の自動人形をココに連れてくることだ」

「それが条件か？」

「ああ、そうだ。簡単だろう」

「貴様何を企んでる」

「企む何て人聞き悪いこと言っなよ。興味があるだけだよ、お前が選んだおもちゃにね」

「その条件は飲めないな、スピカはココには連れてこない」

「なぜだ！ 理解できない、それでは情報は手に入らないぞ、いいのか」

「ああ、それで構わない。一人で情報を集める、白山、お前の力は借りない」

「本気で言っているのか？ お前一人で何ができる」

「何だってできるさ、昔の俺とは違うだから」

「そうか、わかった。今度会った時は敵同士だな」

「ああ、そうなるな、じゃあ俺はもう行くよ」

ダイチが去った後、白山はあの日のことを思い出していた。

人形にしか見ないが、たぶん人だ。

漆黒の少女が倒れている。

国籍はよくわからないが、顔だちからすると外国人のようだ。まだ若い。十代の顔立ちだ。足元には漆黒の剣が落ちている。この少女の持ち物でまず間違いない。

何者だろうか。この暗殺者みたいな怪しい服装……アキバでいた何が起こっているだ。

シニールな光景だなと内心で嘆きながら、少女の安否を確認する

ために近づく。

少女の身体には無数の傷があった。たぶん誰かに襲われたのだろう。幸い息はしているので生きといることだけはわかる。とりあえず家に連れ帰って手当てすることにした。

なぜ救急車を呼ばないのか、医者が嫌いだからだ。

自室。

応急措置終わり、我ながら完璧だ。あとは起きるのを待つだけかな

「ここは何処だ」

「起きたか？　ここは俺の隠れ家だ。俺はキミの味方だ」

「コラ、動くな傷が開くだろう。もうしばらく安静にしている」

「血、貴様の血をよこせ、血がアレばこの程度の傷すぐに治る」

「吸血鬼か？　驚いた、実在していたとは」

「吸血鬼などという低俗なモノと一緒にするな、殺されたいのか？

私は生粋の魔女カサンドラだ。覚えとけ」

「魔女？　今時魔女はないな、俺の血で悪魔でも喚起するのか」

「確かに私は数体の上級悪魔と契約をしている。魔女だからな、だがここで喚起はしない。そんなことよりも早く血をよこせ……」

ヤバイ、傷がまた開きはじめている、血もかなりでている。顔色も悪い。このままほっておくのはかなりマズイ。

「血を飲めば本当に傷が治るんだな。その後殺したりとかしないよな」

「命の恩字を殺すなど、そんな無粋なこととはしない、私は高貴な人間だからな」

（何処をどう見ても人間には見えないが……たぶん人間なんだろう）

「わかった、早くしろ。だができるだけ優しく痛くするな」

「いちいちとうるさい男だ」

「美味しい、貴様。私と同じ高貴な人間だな」

「普通の高校生だけど、何か？」

「イヤ、何でもない。助かったとりあえず、礼を言うを。名前を何と言っ」

「伝説のハッカーこと、白山辰五郎だ、覚えとけ」

「シラヤマタツゴロウか？ ふっ！ 変な名前だな」

（イントネーションが少し違うがさすが気にしないでおう）

「今時辰五郎はないよな、確かに無いよな。何でも新門辰五郎にあやかっているだしよ」

「新門辰五郎か？ 聞き覚えのない名前だ」

「江戸町火消しの元締だったらしよ。詳しくは知らないけど……まあその先祖らしいだ」

「なるほどやっぱり、高貴な生まれだったらしいな」

「普通の高校生だから、親も普通だし、高貴とか全然ないから」

「高貴な人間ほどそれを誇らないものだ。気にいった力を貸そう。私に何か訊きたいことはあるか？」

「今、アキバで何が起きているんだ、知っていることを全て教えてくれ」

「はじまりの少女イヴ。彼女がこの場所にいるから、彼女の存在が大きく影響しているわ

みんな彼女の力を求めている。神に匹敵する力を持った彼女を……」

「大丈夫か？」

「思った以上に傷が深いみたいね。体内にあるナノマシンもほとんど壊されて、治癒力が大分低下しているみたいね」

「キミを助ける方法はないのか？」

「一つだけあるわ、魔女との契約。契約することで体内のナノマシンも修復されるはずよ。

でも魔女との契約は命掛けのモノ。失敗すれば確実に死にはそれでもやるの？」

「魔女との契約、良い響きだ。もちろん契約するさ」

「じゃあ、まず魔法円を描きなさい」

「描き方がわからないな」

「私が教えてあげるわ」

「中央の魔法円を直径9フィート（一・八m）で作る」

「ああ」

「外の円と内の円の間には、赤の蛇を描く。

この蛇頭から尻尾に向かって、ギリシャ語の悪魔の名を書く。

中心の正方形は、紫に近い鶯色で塗られ、中には“chaos”と書いておいて。

四つの六芒星形は、赤色で塗る。

三角の部分には、“MAGICA”と一文字ずつ書く。

中央の六角形には、木馬を緑で描く。

円の外の五芒星形は、赤で塗る。三角の部分には。“Te
ra , gram , ma , tom” と分かち書きする。

中央の五角形には、木馬を紫に近い鶯色塗る。

全ての文字を黒で書く。これで完成だ」

「出来た。疲れた」

「あとは魔法円の中心に立ち、契約の言葉を承諾するだけです」

「汝、我との契約を望む者よ、我は汝との契約を望む。汝は強き者、誇り高き者。

さあ、私の名前呼べ。それで契約は完了する」

「カサンドラ」

叫び声とともに闇が現れた。闇は俺を飲み込もうとするが、魔法円に阻まれて近づくことができないみたいだ。

（助かった）

「魔法円は正確に描けていたみたいだな。今からその対処法を教えてやる」

「それは助かる早く教えてくれ」

「自分の信じる正義をぶつける。そいつは正義とか、愛とかに弱い

からな」

「俺の信じる正義か？ それは萌だ。萌えこそが正義だ。くらえ萌え萌えパンチ」

手が赤く光り、闇を抜いおとす。

何て強い思いの力だ。あんなにも強く輝いている。

「ふう〜終わったか」

「ああ、無事契約は結ばれた。少し休ませてもらう、起きたら話の続きをしよう」

「俺もくたただ。今日はもう晚いし、話はまた明日だな。おやすみ」

翌朝。

「おはよう、よく眠れたか」

「おかげさまでゆくり休むことができました。ありがとうございます」

「それは良かったでは、昨日の続きを聞かせてくれないか」

「私にも叶えたことがあるから。はじまりの少女を追ってここに来たのです」

「なるほどね。それで、そうまでして叶えたいことって何？」

「それは教えることはできません」

「そうか、うん。別に言いたくないなら、それでいいよ」

「で、私なりに彼女のことを調べてわかったことがある、それはバトルロワイアル優勝すること」

「バトルロアで優勝すると願いが叶うのか」

「その解釈で間違いないと思うでも、優勝するには、久遠の魔導具の力が必要だわ」

「キミの力だけは優勝できないのか？ 何故久遠の魔導具が必要なんだ？ どんな力秘められているだ」

「彼女は鍵よ。森羅万象へ続く鍵。彼女の力無くしてイヴに会うことはできない。負けたけどまだ彼女のことを諦めたわけではありま

せん」

「わかった、俺も協力するよ。その人物が今何処にいるのか？ わかるのか？」

「天海大地と一緒に行動しているはずですよ」

「じゃあ、ちよつとダイチの携帯に電話して見るよ」

この時の白山は大地が警察に捕まったことも何も知らなかった。

「おかしいな繋がらない。ちよつと家の方まで行ってくるから、ここで待っていてくれ」

「たぶん無駄だと思うが止めはしない」

「よくわからないが、ダイチを連れてすぐに戻って来るからな」

数時間後帰宅。

「ダイチはどこにもいなかった。原因はわからないが、何者かに存在自体が消去されたみたいだ」

「やはり組織の手が回っているのか？ 相変わらず仕事が早い、ということとは奴を見つけるものはや不可能ということか」

「ああ。いくら俺様でも痕跡が全くないんじゃない、捜しようがない」

回想終わり。まあダイチには会えたけど肝心のスピカちゃんには会えなかったのは残念だな。でも発信器と盗聴器はうまく仕掛けることができた。

発信器からでる電波を見れば奴が何処に居るのかすぐにわかる。

さてと、これからどうするかな？ スピカとの待ち合わせまでは、まだ時間があるし。

そこら辺で聞き込みでもするか？ 足でかせぐしかなからな。

ふう〜疲れた。なかなか有益な情報は手に入らないな。

そろそろ待ち合わせの時間だな。集合場所に向かうか？

ラジオ会館の前。

「遅いぞ！　で、何か情報は得られたか？」

「特に収穫はないな、ごめん」

「まあ、そう簡単には見つからないか？　気にするな」

「ありがとう。お腹もすいたし、何処か食べに行くか。好き嫌いとかあるか」

「特にないな。好きなモノも嫌いなモノ」

「それはいかな。好きな食べ物は必要だぞ。キャラ的」

「そうなのか」

「そうだ。シャデイのメロンパンとかルナのピザとかな。好きな食べモノは必要なんだよ。わかるか」

「そうゆうものなのか？」

「俺がオススメの店を紹介してやるきつと氣にいるはずだ」

「てっ、何でメイド喫茶でオムライス食べてんだ」

「オムレツの方がよかったか？」

「そう言う問題じゃない、なんでメイド喫茶だと、訊いているんだ」
「もちろん。お前のキャラ作りのためだ。」

あと情報収集ためだよ。ここのメイドは以外と情報通なんだぞ。
知らないのか」

「知るか？　貴様はこうゆうふざけた店によく来るか」

「常連だな。お前も氣に入ったのなら、また連れて来てやるよ」

「はあゝゝゝ契約する相手を間違えた」

「そこでため息くな、幸せが逃げるぞ。それにここのオムライは美味しいと思うぞ」

「まあいいわ、済んだことだし、あなたの優しさは知っているから。確かに美味しいわね。」

でも、ここの空気に馴れそうにないわ」

「独得の雰囲気はあるよな。食事しながら情報収集しますか」

食事を終え、メイド喫茶出つて路地裏に向かうことにした。

「あのメイドモドキが言つてたことは信用できるか」

「行ってみればわかるだろう」

夜の十頃に路地裏で面白いモノが見られると言われた。面白いものがなんなのは、わからないけど、たぶん事件に関係したことな
どだろう。

「おう、来たか。待つていたぞ、ダイチ」

「貴様がなぜここにいる」

「俺が呼んだからに決まてるだろう」

「アイツはお前の知り合いか」

「アイツが伝説のハッカーだ」

「変態仲間か？」

「久遠の魔導具というのはお前だな、俺の相棒が話があるみたいだ。
出つて来い、カサンドラ」

「ふふふふ、ひさしぶりにね。また会えたわね。とても嬉しいわ」

「あなたも契約したのね。それで私に何の用かしら。深淵の魔女」

「教会の奴等を倒すために貸して欲しいの。もちろん、それ相応の
対価はお支払いしますわ」

「教会？」

確かスピカとスピカのマスターを襲つたものの教会の奴等だったな。
「教会とは何だ！ なぜスピカの力が必要なんだ」

「何も聞いていないのか？ 俺が教えてやるか」

「いいえ、私が話すわ。メッリサ・リナルドを思っているか」

「ああ」

「彼女はそこに所属している魔導師。そして目的は我々を根絶やし
にすること。そのためには手段を選ばないわ。元は私達の組織の一
員だったけどね。組織が大きくなると離反者もでるよ」

「お前達の組織の理念は甘々で吐き気がするぐらいだからな、反逆
者がでるんだよ」

「どんな理念で動いているだ」

「私も詳しくは知らないけど。確か世界の監視だったから」

「監視。具体的にどんなことをするんだ」

「秩序を乱した者に神の言葉を伝え、更生させるんだって。どんな悪人も殺さないみたいよ。でも基本傍観者みたいなものね。神のお告げがなければ何もしないから」

「じゃあ目の前で犯罪が起きても、神の予言みたいなのがなかったら見殺しにするか」

「ええ、するぞ。ヒトが何人死のうと全然気にしないだ。神の意志と言っただけで何もしないだ」

「身内が死のうと奴等は何もしない。そんなふざけた連中を倒すために力を貸せと言っているだよ」

「ああ、確かにふざけた組織だな、白山。ヒトの命なんだと思っていやがるだ、気に入らねえ」

「教会に寝返えた者も多くいるわ。お前達が捜している放火犯もその一人ですわ」

「放火犯も教会の使徒なのか」

「ええ、世界の秩序を乱す者を倒し、あるべき方向へ導くことが自分にかせられた使命だと思っっているですわ。全く愚かですわ。」

「奴等は表には出せない、禁断の知識や技術を用いて、時には非法な行為に手を染めることも辞さない、卑劣極まる外道ですわ。」

「人々を惑わし、歪める邪悪な存在を討ち滅ぼすのが使命だと言っていますわ、大ウソですわ。自分の正義をひたすら貫く、殺戮集団ですわ」

「（見殺しにするのはよくないが。犯罪を皆殺しにしている教会の奴もだいたい狂ってな）」

「バトロアの開催者も教会の人間だって知っているのか？ ダイチ」

「そうなのか？ 全然知らなかった」

「あなたの力が必要なの？ あなたも教会を憎んでいるでしょ。たぶんあなたのマスターも教会に捕えられているわ」

「お断りだ。信用できない。これで話は終わりね、いくわよ」

「ああ、わかった」

「ちよつと待ちなさい、話はまだ終わってないわよ」

「いいのか？ 何か叫んでるみたいけど」

「気にしないでいいわ、どうせ戯言だから」

「まあお前がそう言うならいいけど、でもまさか白山しらやまのパートナーが、カサンドラだったとは驚いたな」

「私も驚いているだ、まさかあの子が人間と契約するなんて思いもしなかったからな。あんなに人間を嫌ったのに、どういう心境の変化かしらね」

「対抗策を考えて置かないとな、でも今は、人体発火の謎を究明することが先だ」

「ええ、わかっているわ」

「なら、いいんだ」

第4話 魔法少女スピカ

一旦情報を整理して見るか？

被害者はみんな、激辛王選手権の参加者だったが、開催場所不明。あと分かったことは、激辛料理食べたらずぐに死ぬわけじゃないし、必ず死ぬわけでもない。

参加者は百人を越えていたが、死んだのは五人で、意識不明の重傷者三人、軽傷が者が約五十人。

ほとんどの人が軽傷、もしくは無傷だ。

発火場所も時間もみんな違う。

どういた条件で発火するのかまるでわからない。

規則性がない。原因不明のままである。

もしかしたら、辛いものを食べというのは、この事件とは関係ないのかもしれない。

でも他に被害者達の接点がないし、何か、見落としがあるはずだ。何かあるはずだ。

落ち着いてもう一度最初から考にえる。

クソわからない。いくら考えてもわからない。情報が少な過ぎる。おとなしくホテルに帰るか？

「ホテルに帰るぞ、スピカ」

「本当のこのホテルのなのか？　なんでこんなリゾート地がアキバにあるだ」

「これも組織の力よ。あと一般人にはオフィス街に見えているはずよ」

「だから今まで気付かなかったのか？」

「もつきたくたなの、早く中に入りましょうなのよ」

「俺も疲れた、早く休みたい」

「中也凄いな」

「私達の部屋は二〇一号室みたいよ」

「同じ部屋なのか、別々じゃなくていいのか」

「問題ないでしょね。それに敵が襲って来た時のことを考えるとね。別々で戦うのは不利よね」

「まあお前がよければ、いんだけどね」

フロントでチェックインした、俺達は部屋に向かって歩き出していた。

部屋の中には、質の高い調度類が各所に置かれている。基本装飾、家具はすべて木目のキリリとしたとしたオーク材にツインベット。

「部屋の中も豪華だな。そして予想以上に広い」

「ここなら思いつきり特訓ができるね。みっちり鍛えてあげるの」

「何の話だ。特訓って何だよ」

「特訓って言うのわね、特別訓練の略なのよ」

「そのなのは知ってるよ、なんで特訓するんだよ。しかしもホテルで」

「あなたが弱いからよ。このままではバトロアで優勝することはできないの。それでは私が困るのよ」

「俺は困らないけどな。お前がどうしても言うなら付き合っただけいい」

「一度その性根を叩き治してやるのよ」

床を蹴り跳びかかってくる。まるでネコみたいな奴だな。

「お前の動きは見えないんだよ。そんなに俺を倒せるかよ」
簡単にあしらって。欠伸がでるほど他愛ないことだ。

「血さえあれば、これほど簡単に負けることはなかった」

「負け犬の遠吠えにしか聞こえないぞ！　だが俺達鍛練が必要だな。お前は身体能力が低すぎだ。俺もお前からもらった力を上手く使えこなせないでいる」

「案ずるな、血さえ飲めば身体能力は格段にある。死角無しの無敵状態だ」

「血を飲まなければ最弱だけどな」

「私の愚弄するつもりか」

「イヤ、別に。それでその最強モードはどれくらい持続すんだ」

「一分くらいかな？」

「みじけーもう少し長くならないのか」

「無理だ。無敵モードは恐ろしくエネルギーを使うから、それ以上は体力が持たない」

「もう一度血を飲だら回復するってことはないのか」

「しない。回復にはスリープモードに入る必要がある。無防備になつてしまうからあまりオススメはできない」

「戦闘中の回復は無理か」

「ああ、最短で一時間は掛かるからな」

「基礎体力を強化するしかないな」

「私は兵器だからな特訓とかしても意味ないだけどな。というか、ぶっちゃけ、めんどくさい」

「そうか、何かアイテムが必要なのか」

「要らないと思う。マスターはシンクロ率が大切だと言っていたの覚えている」

「つまり絆が大切ということか」

「まあ、そうなるな。私なりに身体能力強化は考えてみるつもりだ。かつたるいが致し方ないか？ お前はあの力を完璧に使えるようにしろ。今のままでは話にならない」

「任せとけ、俺に不可能はない」

「と言つても具体的に何をすればいいだ。倒す相手と言うか、練習相手もコーチみたいなのも居ないし、何をどうすればいいのかわからないな。」

「とりあえずエロゲーを剣に変えてみるか？」

「リユックから適当にエロゲーを一つ取り出しために剣に変えて

みる。

（イメージしろ。強くイメージしろ。最強剣最強剣を剣を）

目の前に現れたのは日本刀だった。どうやら潜在意識というか、直観にさゆうされるらしい。モチーフは戦国。日本刀を持った美少女が活躍するものだった。

（前に出した『短剣』は『忍者モノ』だった気がするな。今回はサムライモノだから日本刀なのか？ だったから普通の学園モノなら何なるんだろう）

疑問に思いリュック中から学園モノを取り出したためしてみることにした。

なんの変哲もない木刀に変わった。ちょっとがっかりした。

（まあ、学生が持つても問題ないモノか？ 剣道部みたいだな）

最高五回。それ以上は変えられないみたいだし、変身時間もエロゲーによってバラバラだ。わからないことが多い。

「どうだ、実戦で使えそうか」

「まだまだ修行が必要だな」

「そうか！ 私はシャワーを浴びて来るから、今日はここまでにして、くつろいでなさい。あと覗いたら殺すから」

「はい、わかりました」

シャワの音が聞こえる。もちろん覗きたい気持ちはあるが、その前にいろいろと準備をしなければならぬことがある。

バスタオル一枚で出てきたスピカに向かって

「お前に着てもらいたい服がある、アキバで買った服んだけどさ、似合うと思うんだよ。

着てくれないかな」

「お前にもいろいろと迷惑を掛けているしな、よほど変な服じゃなければ着てやってもいい」

「マジか！ これなんだけど」

紙袋から服を取り出し、スピカに見せる

「なんだ、そのふざけた服は。そんなもの着れるか！ 何の攻撃も防げんわ」

「まあお前が、そんなにバスタオル一枚で居たいなら、別に良いけどな」

「やはり貴様の仕業か？ 私の服をどこに隠した。正直に吐けば命だけは助けてやろう。さあ大人しく教えろ、さもなければ殺すぞ」

「汚れてたんで洗っちゃった。てへ」

「可愛く言っても無駄だ。貴様という奴は、もう許さん」

「おっと、暴れると悲惨なことになるぞ。ポロリは恐いぞ。どうする着るのか？ 着ないのか？ どっちだ」

「わかった。着るよ着ればいいんだろう」

「なんだこのスカートは！ 短すぎる、ハレンチだ。セクハラで訴えるぞ」

「最近のスカートの丈なんてそんなものだ。気にするな」

「しかも肩や胸が少し出ているぞ。少し動いたらばんつも見えそうだぞ」

「魔法少女の衣装だからな。それでも抑えたほうだぞ！ もっと過激なものあるからな」

「やはり貴様は変態だな。死ね、この変態キング」

「ヤバイ！ 鼻血が出てきた。興奮し過ぎた、やっぱスピカ、お前は可愛いよ。俺の眼に狂いはなかった。立派な魔法少女に成れるよ。俺が保証する」

「バ、バカモン。血が……血が——もったいない。それに私は魔法少女になるつもりはない。何度言えばわかるんだ。この変態」

「このステッキでも持って、リリカルな呪文でも唱えれば完璧だよ」「そんなふざけたことできるか？ 私の服はいつ乾くだ」

「まあ、気長に待とうよ。このステッキでリリカルなポーズでもとつてよ。お願い」

「できるか？ ボケ、死ね、ボケ。私は兵器だ。戦うための兵器だ

と何度も言ってるだろう。この変態」

第5話 花守の一族

血の入った銀の聖杯が妖しく光る。

またこれを飲むのかと思うと気が重くなる。だって物凄く不味いだもん。できればもう二度と飲みたくない。

（結局、服が乾くまでずっと暴れていた。服が乾いたらすぐに着替えてしまった。かなり似合っていたのに残念だ）

「早く飲め、ほんとうに死ぬぞ」

「それでは頂きます」

「苦い……」

「でも栄養価は高いはずだ。疲れも一気に取れる」

「それは凄いな」

（またこの感覚か？ どうやら記憶の共有記憶が始まったみたいだ。ビジョンのようなものが見える）

焼け野原に二人女性が佇んでいる。

靄がかつたみたいに視界がぼやけて、顔がわからない。

そのシルエツトから、なんとなく女性だと判断しただけだ。

何かを話しているようだが……ノイズが酷すぎて聞こえない。

頭が痛くなりようだ。

片方の女性の身体が光だし、身体から鍵みたいなのが出てきた。

それをもうひとりの女性に渡す。

鍵みたいなのは女性の身体の中に入っていた。

ノイズが弱まり、微か声が聞こえた。

「それは……の一部。貴女が守って……私には……知らない……だから」

「でも……力は……にとって大切な……じゃ……」

「だからこそ……信頼できる……に託したいの？ 私のわがママを聞いてくる」

「わかったわ」

一瞬靄が晴れ女性の顔が見えた。アレは母さんだ。写真でしか見たことから断言できないけど。

母さんとおぼしき女性は、手からワスレナグサ出し、髪を飾ってあげていた。

とても喜んでるようだった。

母は花守の血筋のモノ。

花守の一族は第一子を大切にしていた。第一子しか子孫を残すことができないからだ。

ただ第二子だった。資格を持ったいものだった。花使いとしての能力は飛び抜けてい、他のついついを許さないほどだ。しかし一族には認めてもらえなかった。第一子じゃないから、ただそれだけの理由だった。一族の掟、仕来り、そんなくだらないモノに縛られていた母はどんな気持ちだったんだろう。苦しかっただろうか、悲しかっただろうか、今の俺にわかるはずがない。

神田花守神社という所で巫女やっていた。そこで父さんと出会ったらしい。

母のことは義妹である虹彩アイリスに聞いた。

俺に義理の妹がいたことは驚いた。

母を失った悲しみで飲んだくれていた父は、麗しい女性と出会い恋に落ちたらしい。

その女性というのが花守家第一子、胡蝶蘭。つまり虹彩の母だ。

当中坊の俺は口をばくばくさせていたよ。

あまりにも信じられない話を聞かされたからね。

父も母もよく知らないから衝撃の真実だったよ。

そして虹彩はさらに俺を驚かせることを言った。『一緒に暮らしましょう』。

兄妹が別々に暮らすのはおかしいということだ。俺もココの暮らしが気に入っているわけじゃない。逃げだしたいくらいだ。叔父さんと叔母さんとは上手くいつてないしね。

ここには俺の居場所はなかった。だからありがたい話ではあった。けれど断った。

虹彩は承諾してくれた。とても悲しい顔をしていたがわかってくれた。

別れ際に母の写真を渡してくれた。

翌朝、俺はスピカに連れられトレーニングルームに来ていた。

「なんでホテルにトレーニングルームがあるだ」

「身体を鍛えるためだろう。普通」

「まあそんなだけどさ、このホテルでいろいろと変わってないか」

「気にするな、訓練に集中しろ」

「ああ、わかった」

目の前にはスピカが呼んだ練習相手が五、六にいる。手練れの武道家である。練習相手としては不足はない。

どうやら思い出を対価として^{エネルギー}しているみたいで、一度剣に変えてしまつと。どんなゲームだったのか？ 全然思い出せなくなる。

また神ゲーだと最強の剣になり、クソゲーだと最弱な剣になる。判断基準も思い出みたいだ。未プレイゲームはその期待度で強さばかりまる。

今わかつているのはこのくらいだ、今日はスピカ特別メニューもあるし気合い入れて頑張るか？

今日の特訓終了。疲れた。ちょっとスピカの様子でも見てくるかな。

一体どんな修業をしているんだ、少し興味がある。

(こ、これは……)

「おい、どうした。ここで何があった。なんで、そんなにボロボロ

なんだ」

「いいところに来たね。血を、血を飲ませてくれなのよ」

「わかった、早く飲め」

「ありがとうなのよ」

血が吸われていく、強い脱力感だ。これは慣れそうにない。

「なぜ、そこまでする」

「バトロアで優勝するためだ」

「そもそもそれが理解できない。命を懸けるほどの価値のあることなのか」

「ああ、そうだ。約束したからな。約束は守るモノだ」

「一体誰とどんな約束をしたんだ」

「気安く声を掛けるな。貴様慣れ合うつまりわなない。干渉するな」

まただこの禍々しい感じ、剥き出しの憎悪。とても異質で歪な空気が。息苦しい、ここに居たくない。逃げだしたい。

「脆弱な人間が思い上がるなよ。黙って血を提供すればいいのだよ。それ以上のことは考えるな」

強きのネコのような大きな目で見据えてくる。思わず臆してしまふ。息苦しさも増した気がした。そんな眼で俺を見るな。全てを見透かした眼で――

また被害者がでた。五人ほど焼死体が発見された。

「むごい」

そう声を上げたのはスピカだ。ボク達は朝食を食べ、ホテルの自室でテレビを見ていた。

警察も懸命に調査しているみたいだけど、犯人に繋がる手掛かりはまだつかめてないみたいだ。原因の一つは、動機が見えないことだ。まるで無差別に殺している通り魔的犯行みたいで、その足取りが全く予想できない。犯人像が見えてこない。

まあここで考えててもしかたないので、聞き込みに行くことにし

た。

「おい、スピカ。出かけるぞ。準備しろ」
「了解」

第6話 神田花守神社、虹彩

電気街は昨日を一通り調べたので、今日は蔵前橋通り・末広駅周辺調べることにした。

「ここら辺も大分変わった。昔は萌えショップ無かったもんな」
「そうなんのか」

「ああ、ビルが多かった。無機質なビルがたくさんあって、面白くもなんともない所だった。今では萌えイラスト入り看板がいたる所に設置してある。萌え文化は東京全土に広がっている」

「日本ももうお終いな。お前みたいなのが增えたかと思うとね」
「俺も日本の将来が心配だ。ただ日本全土に浸透しているわけではない。」

大阪辺りも萌え文化が拡大してそうなものだが……そんなことはない。

今も食い倒れで有名だが、萌え文化は浸透していない。
他にも似たり寄ったりだ。

何故か？ 東京都心だけが以上なほど『萌え文化』に浸蝕されている。人口も年々増えていている。都市そのものは活性化しているように見えるのだが、不安要素もたくさんある」

「ニートの大量発生だね」

「その通り、働きもせず。ゲームやアニメばかり見ている『キモオタ』が増えたのは事実だ」

「今じゃ、日本の頭脳はつくばに移動したみたいね。東京では優秀な人材が育たないのが原因ね」

「そこなんだよ。問題は！ 何故！？ こんなことになったんだろうか。昔はもつと何でもあるって感じだった」

「そうね！ 少なくとも、萌え一色ではなかったの。目覚めたばかりではつきりとは言えないけどね」

「萌え豚の増殖は、もはや止めることはできないのかもしれない。」

だが腑に落ちないこともある。なぜ東京だけなのだろうか？ 他の都道府県では萌えが衰退してしまったのだろうか？ 何か人為的なモノを感じる」

「考え過ぎじゃないの？」

「そうかな」

「そうそう、そんな大掛かりなわけないじゃん、どこぞの組織が関与してるって言うのよ」

「まあそうだな、考え過ぎか？ 俺は行く所があるから、今日も別行動でよろしく。あと時間と場所も昨日と同様、もし何かあったら俺の携帯に連絡しろ」

「了解なの」

神田花守神社。コノハナノサクヤヒメ木花咲耶姫を祀り、オオヤマツミノカミ初源の巫女が眠る地。数千年歴史を感じさせる神社。

ここに来た目的は母のことを訊くためだ。

アキバで起こっている不可解な事件と母が関係している気がしたからだ。

俺は母のことをほとんど知らない。

境内の掃除をしている巫女服を着た（バイトらしき）一人の女性に声を掛ける。

「俺、天海大地って言うんだけど、ちょっと、虹彩に話があるだ。呼んできてくれないかな」

「虹彩様にお会いしたいのですか？ ですが、今日来客があるなんて聞いてません」

「約束はしてないからね。知らないのも無理なよ。でも至急訊きたいことがあるんだ」

「そう言われましてもね。何かっと忙しい人ですからね。わたしの

「一存ではどうすることもできないです」

「居場所を教えてください、俺が直に会いに行く」

「申し訳ございませんが、教えることができません」

「なぜだ」

「規則ですから」

「虹彩は俺の義妹だ、と言ったら会わせてくれるか？」

「いえ、無理です。規則ですから」

「どうしたら会わせてくれるんだよ」

「貴方が虹彩様の義兄だと言つのなら、それを示しなさい。そしたら会わせてあげるわ」

（クソ！ 急にそんなことを言われてもどうすればいいのか？ 全然わからない）

「どうしたんですか？ できないんですか？ なら帰ってください。そして二度と来ないでください」

「えっ！ ちょっと待って。しょ、証明ね。できるから大丈夫。OK、OK」

「なら早くしなさい。忙しいんだから。害虫が！」

「そうだね。うん。わかった。え〜〜と」

（何かいろいろテンパってる、無理だ。打開策が全く思いつかない。困った。どうしよう。どうしただらいいだ。誰か助けてくれ）

「騒がしいわね、どうしたの朔弥さくや」

「虹彩様。その無礼極まりない男が、虹彩様の義兄だとおしゃるのです。私にはとても信じられません。だから証拠を見せろと言つてやったんです。でも、明らかに様子がおかしくて、挙動不審でコイツ絶対ストーカですよ。間違いないですって。妖しさマックスですから、もう全身からヒシヒシと感じますよ。どうしますか？ 警察に突き出しますか」

「朔弥、少し落ち着いて。深呼吸して見て、はい。す〜は〜す〜は。どう少し落ち着いた」

「はい。大丈夫です。少し落ち着きました。ありがとうございます」

「それは良かったわ。確かこの方は、わたしくのお兄様です。わたくしもつい最近しましたけど」

「そうなのですか？ ストーカさんじゃないんですね？ どう見ても変態顔なんです。釈然としないというか？ 納得がいきませんね。でも虹彩様が嘘をおしやるとも思えません」

（腑に落ちないという顔している。そんなに俺って変態顔なのか？ イケメンじゃないとは思っていたけど、マジ落ち込むわ）

「どうやら誤解が解けたみたいだね。良かった。本当に良かった。警察に突き出されないで、正直どうなるのかと思ったよ」

（精神的ダメージは大きいけどね。出会う人、出会う人、みんなに変態呼ばわりされ。俺は悲しいよ）

「それでどういったご用件でしょうか？」

「母のことで少し訊きたいことがあってね？」

「桜様のことですか。てつきりスピカ様に関することだと思っておりました。生憎わたくしの口からお話できることはありませんね」

「そうですか？ わかりました。お忙しいところ申し訳 ありません。では失礼させてもらいます」

「スピカ様のことについてお聞きにならなくてよろしいのですか？」
「えっ！」

それはとても意味深な言葉だった。胸に突き刺さるような鋭さを持っていた。振り返ることできず、その場に足を止め佇んでいることしかできなかった。

「一体何を迷っているのですか？ 兄様わ」

（はっ？ 一体何を言ってるだ。この俺様が迷ってる。そんなはずあるわけない。奴は兵器で人形だ。どんな過去を抱えているかなんて俺には関係ないはずだ。そうだよ、関係ないはずなんだ。なのに、何でこんなに気になるだよ。ヤツが魔法少女だから、イヤ違うそうじゃない。そういうことじゃないだよ）

「迷い、ふっははは。そんなのあるわけじゃないか？ 俺の目的始まりの書を見つけ呪いを解くことそれだけだ」

（そうだよ。始まりの書を見つけ出すために奴の力を利用しているだけなんだ。赤の他人で兵器で人形だ。感情移入するなんてことはありえない）

「嘘ですね。それくらいわたくしにだってわかります」

「俺は誰も信賴してないし、誰の力も借りない。何だって一人でできるんだ。だから仲間何ていらない。スピカが何者であろうと関係ない。利用できるから利用しているだけだ」

（周りは全て敵だ！ スキを見せれば殺される。父のように――

――だから俺は誰も信じない。生き方を変えるつもりはない）

「そんな辛そうな顔で言われても説得力がありませんわ。なにより貴方様が誰よりも優しいのは存じ上げています」

「貴様に何がわかるというのだ。義妹風情が調子に乗るな。目ざわりだ」

「虹彩様に対する無礼な発言はこの私が許しません」

「おやめなさい。朔弥」

「でも……………わかりました」

「本当に何とも思わないんですか？ それでいいですか、兄様わ」

「俺は……………」

「兄様は一体どうしたですか？ 自分の意思をハッキリ示してください」

（俺はどうしたいだろう？ どうするべきなのだろうか？ どうすることが正解なんだろう？ わからない？ 全然わからない）

「わからないよ、そんなの。俺はどうしたらいいのかな」

（人を信じたこと何て、生まれてきて一度もないんだよ。ましてや相手は兵器だよ。俺にどうしろというだよ）

「そんなの？ 自分で考えなさい。兄様にはそれができるはずですよ。わたくしは信じております」

（そんなこと言われても……………わかねよ。一体どうすればいいだよ。クソ！ 俺にどうしろて言うだよ）

「虹彩様、こんな虫ケラに答えを出すなんて無理ですよ。所詮害虫

ですから」

「いいえ、兄様なら最善の選択肢を選べるはずです。優しい方ですから。わたくしは信じています」

（俺はアイツが——傷付く姿なってみたくない。けど……多分、イヤ絶対。戦うことを止めないだろう。生きるということは戦うということだから。なら、俺に出来ることは決まっている。守る、どんな強敵が現れようと絶対を守る。この命に代えても）

「わかったような気がする。俺は多分、スピ力を失いたくないだと思っ」

振り返り力強く叫び、俺は神社を後にする。虹彩は黙って後ろ姿を見詰めていた。

朔弥が何か叫んでる気がしたが気にせず歩いて行く。ごちゃごちゃ考えてもわからない。

他人の気持ちなんて理解できるわけないだ。だった俺は俺のしたようにする。

例え鬱陶しいがられても傍に居続ける。偽善だとか自己満だとか言われようと気にしない。

独りは寂し過ぎるから。

結局俺はアイツをどう思っているのかはわからない。

ただ独りにしてはいけない気がする。

この気持ちは何なのかは良く解らないけど、不思議と笑える、暖かくて優しいでもモヤモヤする。

これが好きという感情なのだろうか？

俺は誰かに愛されたことがないからわからない。

第7話 オタク狩り

携帯で某巨大掲示板を確認しが有力な情報はなかった。やっぱり地道に聞き込みするか？

ラジオ会館の前。

「たぶん犯人はオタクが嫌いだと思うの？」

「なんでそう思うんだ」

「この写真を見てなのよ」

写真には、間違いなくオタクが写っていた。

同人ショップの紙袋を両手に下げ、何かのアニメキャラのTシャツに、よれた綿パンを着ている。他も丸眼鏡に小太りな体といい、どこにでもいそうなオタクである。

「確かにコイツはオタクだな。まず間違いないだろう」

「でしょ。この人、背中に大火傷を負ったらしいのよ。他にもカメコ達が襲われているみたいよ」

「よく調べたな。確かに犯人の狙いは『キモオタ』で間違いないだろう」

「キモイ奴と変態は、世界に害しかもたらさないからね、燃やしたくなる気持ちもわかるのよ」

「燃やすのはマズイだろう、道徳的にな」

「あなたも炎で清めてもらったらなのよ。そしたらその変態も治るかもよ」

「死ぬから。死人でてるから」

「冗談なのよ。で、こんなことをする犯人に心当たりあるの」

「オタクが嫌いなヤツなんて、たくさんいるからな。それだけじゃ、見当もつかない。もう少し情報が必要だな」

「じゃあ、キモオタが集まりそんなところに行って情報収集し来いなよ。私は別ルートで捜すからね。お願いなの」

「俺一人で行くのかよ」

「当たり前なの！ 私がそんな所にいたら大変なことになるのよ」

「萌えキャラだからな。キモオタも喜ぶだろう。舐めまわすように見るだろうな。見るだけで済まないかもしれないしな……」

「想像しただけでもぞっとするのよ、あと萌えキャラ言わないで。結構気にしてるんだから」

「できれば俺も行きたくないが、そうも言ってられないしな。まあ幾つか心当たりがあるから行ってみるよ」

「わたしはグルメスポットを中心に回るの。お互い頑張りましょうね」

MMM（萌え萌えメイド）の前まで着て俺は驚愕した。

二〇一二年に出来たこの建物は、駅中にある。

その昔、アキハバラデパートというものがあつたが……その名残はもはやない。紹介制の会員制で、選ばれた人しか中に入ることのできない。特別な場所なのである。

中はデジタル空間になっており、生身の身体では入ることができない。高度なセキュリティで守られている安全、安心である。

覚悟をドアの前に設置された電子パネルに手をかざす。

ID認証中という文字がでる。

認証するのに一、二分掛かる。

認証終了。五〇二 天海大地と確認。これより電子化を行ないます。動かないでください。

（良かった、消去されてなかったみたいだ。組織もまだまだ詰めが甘い。もしかしたら白山の根回しがあつたのかもしれない。どちらでもいいか？ 考えてもわからないし）

デジタル
電子化終了、これより入室を許可します。

（ここに来るのは二度目だな。一度目は神中の紹介で着た。できれ

ばもう二度と来たくなかったのだが……これも仕事だ！ 気持ちを切り替えて聞き込みしろっ！

なかなか面白いことがわかったぞ。早速スピカに連絡するか？

電気街・秋葉原駅前。

「おおっ！ 来たか？ 待っていたぞ、スピカ」

「面白い話って何？ 早く教えて」

「カンナギルナの手料理が食べられるお店があるらしい。しかもそこで、例の激辛選手権をやっているという情報だ！ 驚いたか？」

「カンナ……ギ……ルナ？ 有名な人なの？ 全然知らないけど」

「お、お前——カンナギルナを知らないのか？ 歌手兼声優で有名なのだぞ。ネットでもかなり話題になってるし、あの毒舌がたまらないってな」

「わかったから、興奮するな。気持ち悪いから……マジで止めてくれ。頼む」

「で、激辛選手権で優勝と一日デート券か、五〇万がもらえるらしいんだ」

「キモオタが集まりそうなイベントだな。でも、料理を食べただけで発火する能力何て聞いたことないの？ そのお店がどこにあるかはもちろん聞いたんだろっな」

「そこまではわからない。でも喫茶店の名前は聞けたぜ、確かオリビア」

「オリビアか？ ちょっと調べて見るから待っている」

待つこと数分。メモ帳みたいなのを閉じ、話掛けてきた。どうやら終わったらしい。

「カード下にあるみたいなのよ。でもやっぱり事件とは関係ないと

思うの？」

「しかし犯人の狙いはオタクだ。それもアニオタを狙っている、それは間違いない」

「アニオタは特にキモイね。最近のアニオタは、萌え萌えとキモいし、ウザイし、臭いの」

「まあ、それは置いといて。カンナギルナは、超が付くほど美人で、スタイルがよくて。男を虜にする魔性の女なんだって、写真もあるから見るか」

「見るのよ」

ポケットから写真を取り出しスピカ見せる。

「この顔どこかで見たことがあるのよ？ ……うーん、どこだったかしらなの。思い出せないの。でも羨ましい身体なの」

「コイツの仕業だと思うんだけど、ずっと店にいたというアリバイがあるんだよ。お前はと思う」

「確かに怪しい顔なの、それに胸が大きいくて、背も高い。少し懂れちゃうの？ でもやっぱり関係ないと思うの」

「そうだよな。やっぱ関係ないのかな？」

「ただ気になることが一つあるのよ。事件現場で白衣を着た高校生ぐらいの男が、何度か目撃されているの。」

もし、その男がパートナーなら話は変わってくるのよ」

「なるほどその男が実行犯の可能性があるのか？ どのような能力を手に入れたのかわからないが！ その男は間違いなく異能力者だろう」

（オタク嫌いの白衣を着た高校生、まさかアイツが——犯人なのか？）

「とりあえずオリビアに行って見るか」

「激辛王選手権がやっている店ね」

「ああ、ついでに優勝賞金の五十万も頂くぜ」

裏路地。

「クソ、アレ辛すぎるだろう」

「完食した人はまだいないみたいなのよ」

「たぶん一生でない気がする」

「それよりもだ！ 本当にここで待っていれば、犯人がくるのか？

アレから、もうかなり経っているぞ」

「発火犯は多分太陽弱い。（仮説）

日の光を浴びると死んでしまう体質なんだ、被害者はみんな日陰で死んでいる。

だから必ず来るはずだ、ここは日陰になっているし、人通りもない。

この路地裏が一番目撃情報が多い。 きっと来るはずだ、それまで気長に待つだけだ」

「了解なの」

第8話 食料問題とオタク狩りと結晶

「火竜焰、やっぱりお前だったか」

「虫ケラか？ 最近学校にこないから死んだのかと思ったよ。まだ生きてたのか、ゴミグス以下の存在のくせに生意気だな」

「うるせえ、始まり書を見つけるまで俺は死なない。覚えとけ」

「ありもしないモノをまだ探してたのか？ やっぱり、貴様は救いようのないグズ野郎だ。それで何か手掛かりでも見つけか？ 聞くだけ無駄だか」

（コイツの言う通り手掛かりはゼロだ。始まりの書がどこにあるのか？ 見当もつかない）

「諦めず探していれば、いつか見つかるんだよ。焰、お前は諦めた。そうだろう」

「その——減らず口を叩けるのも今の内だ。お前との因縁にも決着をつけてやる」

「運が悪かったな、今のコイツは地上最強の兵器である私と契約したことにより、数段強くなっているぞ。そなたでは勝ちめはないだろう。わたしは最強だからな」

「ダイチ。それが貴様の人形か？ 貴様に似て貧弱そうだな」

「最後に一つ答える、なぜオタク狩りをやっている目的は何だ」

「貧困を無くすためだ。この世界には飢えて死ぬ子供がたくさんいる。それはお前も知っているだろう」

「ああ、最近の食料問題は深刻だ。餓死する子供が跡を絶たない。政府のずさんな対策の所為だ」

「あるお方から教えてもらったんだよ。東京の真実を！ 頭の中にIDチップを埋め込まれているのは知っているよな」

「俺達を管理するために政府が行なった対策の一つだ」

「じゃあ、なぜ他の地域では行なわれていないのか知っているか」
「比較的人口密度が少ないからじゃないのか？」

「ほんどうにそれだけだと思うか？」

「どういうことだ」

「こう考えたことはないか。東京で秘密裏に研究を行なっている。そのために頭の中にヘンテコなチップを入れられ。毎週行なわれていた検査は、実験体の観察と洗脳が目的だったじゃないか。毎回行なわる注射は、栄養剤だと言っていたが本当は別のもで、俺達を薬漬けにしろうとしていたんじゃないのか」

「お前からセカイ系の話が聞けるとは思わなかったよ。いつから中二設定が好きになっただ。焰くん」

「虫けら以下のゴミがマジめに聞け。これは本当の話だ」

「教会の奴等に洗脳されているわね。可哀想だけど、ああなってしまったら、もうお終いね。人間として、教会の犬として生きて行くことしかできないわ」

「うるさい。人形風情がわかったようなことを言うな。俺は選ばれたんだよ。お前達とは違う。俺は特別な存在なんだ」

「憐れね。あなたも使い捨ての道具だということに気付かないなんて」

「うるさいうるさいうるさい、選ばれた人間なんだ。だから結晶を集めないといけないんだ。そうしないと多くの人が餓死して死んでしまう。だから仕方ないだ」

「一体何を言っているだ」

「これは極秘事項なんだけど。特別に、ミジンコン並の頭のお前にもわかるように説明してやるよ。ありがたく思っただけよ。」

食糧問題を解決するために新しく考えだされたエネルギーこそ『萌え』だ。

一般人には理解不明な感情だが、ドクター神崎はその感情を使って食べ物を作成することに成功した。ただ萌えという感情を抜き取られたオタは廃人になってしまった。そこでドクター神崎は考えた。なら殺してしまおう。どうせ社会のゴミだ。死んでも誰も困らない。そしてドクター神崎は『萌え』という感情を結晶化して取り

出す道具とIDチップを発明した。IDチップにアクセスすることによって最高萌え体験がわかり、それを疑似体験させることができる。萌え度がマックスになったら殺すと、結晶化がでてくるという寸法だ」

「キモオタを一掃し、さらに食糧問題も解決させるという一石二鳥、イヤ、三鳥になるかもしれない作戦か？ 人間にしておくのが勿体無い頭脳だな」

「そこ関心するところか？ スピカ。奴等は人殺したぞ」

「萌えオタはキモイから死んでもOKだよ。どうせ、ろくに働かないニート。社会のゴミで社会に寄生する害虫でしかない奴らだ。死んで結晶化して世の中の役に立つならいいじゃないか。生きてるだけで迷惑をかける糞やろう達だろう」

「そうかもしれないけどな。そこは否定できないけど——殺しちゃうのはやっぱりマズイと思うわけだよ」

「これで俺の話は終わりだ。貴様の結晶も俺がもらいうける」

（やっぱりこの戦いは避けられないか？）

第9話 戦闘その1。塩水爆弾に、弱点は紫外線？

「いくぞ！ フォーメーションαだ」

「えっ！ 何それ聞いてないけど、フォメンションαって何だよ」
フォーメーションα：スピカを囫にして、相手の懐に正拳突きを打ち込むというもの

「そんな見え見えの手に引つかかるか」

（辛いモノ食べると身体から汗がでる。汗には塩が含まれている）
「貴様が発火させられるのは塩を含んだ水だな。そしてその弱点は太陽」

（死んだ人間に共通するのは陽が当たらない場所。日陰だ）

「それが貴様の推理か？ 穴だらけだな」

「今だスピカ！ アレを使い」

腰に巻き付けられたホルスターから、黄色いオモチャみたいな銃を取り出し、素早く構え標準を合わせる。

「くらえ、紫外線ビーム」

叫び声と同時に引きがねを引く。オモチャみたいな銃から紫外線が放たれる。

視覚できる紫外線。これをくらっては一溜りもないだろう。

俺の勝ちだな。

思わずカッズポーズを取る。

しかし予想だにしないことが起こった。

（アレ、効かないぞ。どうなっているだ）

全くと言っていい、皮膚は焼けてなかった。

むしろ白くなった気すらする。

一体どうゆうことだ。

奴の弱点は紫外線じゃないのか？

「おい、お前の作戦は失敗したぞ」

（おかしな、俺の考えに間違いないはないはずなんだけどな）

「死ぬ前に教えてやるよ。塩を含んだ水なら、海でも汗でも何でも燃やすことができる。」

あと俺に弱点はない、紫外線に弱いだ、とんだ的外れな答えだな」
弱点は必ずあるはずだ、何を見落としている。

「塩水爆弾」

激しい爆音とともに辺りが燃える。

（このままではやられる、早く奴の弱点を見つけなければ）

辛いモノ、汗、塩水、日陰、あと見落としているのは……そうか

？ 感じなことを忘れていた。

今度こそわかったぞ。

奴の弱点が……

「スピカ、俺に力を貸してくれ、いい考えがあるんだ」

第10話 戦闘その2 静電気

俺にスピカがいるように、奴にもパートナーがいるはずだ。

そして今まで汗だと思っていたモノが、実は汗じゃないとしたら、たぶん奴の能力は静電気。

俺の考え方が正しければ、奴のパートナーの燃料系を生み出す能力はずだ。

静電気で火花を散らし、身体から噴き出す何かに引火したんだ。

だから日陰の人だけ死んだ。日なたにいた人は汗が乾いから引火しなかったんだ。

つまり俺の考えは間違ってたということだ。

奴自身は静電気しか使えないはずだ。

「足止めを頼む、スピカ。俺はエロゲーを剣に変える」

「わかった。でもそんなに長くはもつたないぞ、できるだけ急いでくれ」

リュックから戦国モノ・ハーレム系のエロゲーを取り出し剣に変える。

付属効果は媚薬。誘惑の剣。

形状は日本刀。

刃渡り六三センチぐらいの長刀。

材質は鉄。

エロゲーが日本刀へと姿を変えていく。

錆一つない透き通る刃、腕にずっしりくる重み。

この刀で奴の能力を確かめてやる。

刀を強く握りしめ、地面を蹴り走り出す。

焔との距離が一気に縮まる。

「下がれ、スピカ」

スピカが退いたのを確認した俺は、思いきり両手で斬り裂く。
「酸化しただ」と

焰の身体を斬り裂こうとした日本刀が突然、錆で砕けてしまった。地面に落ちた、残骸を見て唖然としているスピカ。

「これが奴の能力だ。静電気を使うぞ、気よつけるスピカ」

「静電気だつて、ちやちい能力だな」

「どうやら俺様の真の能力に気付いたみたいだな」

不敵な笑みを浮かべる、まだ隠された能力があるというのか？底の知れぬ男だ。

（通常能力は一つだが、相手は教会だ。油断はできない。きっと卑劣な手を使ってくるはずだ。それにあの自信に満ちた顔も気になる）
「だがこの程度で勝つたになるなよ。静電気の恐ろしさを教えてやる」

奴の身体にどんどん砂鉄が集まっていく。

これほどの砂鉄どこから現れたのだ！

まさか、これも奴のパートナの仕業か？ 近くにいるのか？ 姿は見えないけど。

「砂鉄武装、そして砂鉄剣」

「砂鉄の鎧に砂鉄の剣か？」

「発火だけが俺の力じゃない、静電気を上手く使えばこんなことだつて出来るだぜ」

リュックからエロゲーを取り出し、素早く木刀に変える。

これなら酸化も防げるはずだ。

「考えたな、だがその程度では俺様は倒せん」

木刀を構え、相手の隙を窺う。下手に動く事は出来ない。

（クソ！ 全然隙がない。無いなら作るしかないな）

「スピカ、同時に攻撃するぞ。お前は後ろから俺は正面から行く」
「わかった」

「いいぜ、二人掛かりでも負ける気がしない。どこかでも掛かってこいよ。俺は一步も動かないからさ」

「クソクソクソ、舐めやがって」

思い切り木刀を顔面に向かって振り落す。脳天直撃だぜ。

そしてスピカの鋭い突きが背中に綺麗に決まった。

しかし砕けたのは木刀だった。

「痛いぞ、めっちゃ痛いぞ。何て硬さだ。先に拳が壊れるぞ」

（バかな！ 鋼鉄すら砕く、スピカの拳が効かないだと。修業して各段にパワーアップしているはずなのに、ありえない）

「どうした。貴様等の全力はこの程度なのか？ 痛くもかゆくもないな。まあムシケラにはお似合いの攻撃だな。フハハハハハ」

第11話 戦闘その3 静電気の対抗策

（あの砂鉄を何とかしないと、焰を倒すことはできないな。そうだが、塩水でもぶつけてやろう）

「スピカ、塩水って生成できるか？」

「塩水だな、もちろんできるぞ。しかし時間がかかるぞ」

「大丈夫だ、奴は動かないんじゃない、動けないんだ」

「なんだ、そうなのか？　なら安心だな」

（磁力じゃなくて、静電気だから——塩水が効くはずだ）

「小賢しいことを考えているようだな。残念だが俺様に死角んない」

「大した自信だな、そんなもんやってみないとわからないだろう」

「なら、来いよ！　お前らの希望は全て打ち砕いて、絶望の底に沈めてやる」

「できたわよ、塩水」

三角フラスコに入った塩水を受け取り、焰に向かって投げつけた。でも砂鉄の壁に阻まれて届かなかった。

（砂鉄の絶対防御か？　なかなかやるな、でもそれくらいは予想の範疇だ。塩水を受け取ったときにスピカにもう一つ生成を頼んである。まあ、塩水は陽動みたいなもんだ。当たったらラッキーてきなやつだ）

「無駄だということがわかったようだな、なら死ね」

無数の槍を形成し投げってくる。

その数、二十前後。

どれも砂鉄で作られたものだ。

だから壊すのは容易い。

俺には秘策があるからな。

「バカ、なぜなぜなぜ！　砂鉄が届かない、容易く崩れてしまった。なぜだ！　一体何をしゃがった」

「洗剤だよ。静電気ってさあ、摩擦を利用してるんだろ。だから

さ、洗剤を使っただよ。摩擦を小さくするためにな。あと周りをよく見る」

「なんだ、この泡わ。いつの間に――俺の俺の砂鉄の鎧に浸み込んでいく。隙間から入っていく洗剤が――鎧が壊れていく、無敵の鎧が――」

「自分の力を過信し、俺のパートナーの実力を甘くみた！ お前の負けだ。命だけは助けてやる、大人しく捕まれ焰」

「クソクソクソ、これで終わったと思うなよ。俺にはまだ切り札があるだよ」

「負け惜しみだな！ 静電気の使えない、今のお前に何ができるというのだ」

「油断してはダメよ。何か嫌な予感がするの？」

「ああ、そうだな」

第12話 戦闘その4 誓い

「今、やれ。奴のリュックを溶かせ」

「何っ！」

音をたててリュックが溶けた、間一髪、投げ捨てたため肉体にダメージない。

「これで、貴様も能力が使えなくなったというわけだな。さあどうする」

「スピカ、敵位置はわかるか？ 魔力探知というのはできるか」

「私の索敵スキルをなめないで。ええ、もちろんできるわ」

「なら、頼む」

「任せて」

「作戦開始だ」

焔に向かつて走り出す。全力で、躊躇なく走り出す。敵の攻撃がどこからくるかわからない。

「来るな来るな来るな。奴を近づけさせるな。全力で阻止しろ」

腕、足が痛い、強い酸をかけられたみたい。でも止まらない。これくらいの痛み我慢できる。コイツは多くの命を奪った、そんな奴にくすることはできない。

「スピカ、まだか？ まだ、敵の位置はつかめないのか？ できるだけ、急いでくれ」

（痛い痛い痛い、イタイ、イタイ、イタイ。身体が溶かされるといふのは、想像を絶する痛みだ。並大抵の人間では耐えられないだろう。俺も限界だ。このまま死ぬのか？）

「おい、しっかりしろ。気を確かに持って」

スピカの声が聞こえた意識が朦朧としているのに、ハッキリと聞こえた。

（そうだな、ここで倒れるわけにはいかないよな。誓ったはずだ、守ると。スピカにこんな痛い思いをさせるわけにはいかない。全て

俺が引き受けてやる。必ずスピカだけは守る。この身体がボロボロになろうとな絶対守る。それが俺の矜持だ」

「ああ、俺は平気だ。だから、お前は索敵に集中しろいいな」

「本当に大丈夫か？ そんなボロボロで、今にも倒れそうじゃないか？」

「何、こんなのわ。掠り傷だ、唾でも付けとけばすぐに治る。だからそんな、泣きそうな顔をするな」

「でも――」

「何、心配はいらないよ。ホント大丈夫だから」
痛みを超えらて優しく笑う。

「何、二人だけの空気を作ってたんだよ。ふざけやがって。俺様は無視されるのが一番嫌いなんだよ。もう少し痛ぶってから殺そうと思っただけだ。今すぐ殺してやるよ。覚悟しな」

（クソ！ やられる。ここで死ぬのか？）

「諦めるな、希望を捨てなければ、勝機は必ずあるはずだ！ 私を信じろ」

「いまさら何をしてもう遅い」

「それはどうかな？」

「バカな？ 黄金の楯だといつの間に」

「私を舐めるなどと言えはわかる。人間風情が」

「助かったぜ、スピカ」

「礼には及ばないぜ、当然のことをしただけだからな。敵の場所がわかったぞ」

「それは本当か？」

「ああ、二時の方角だ。これを使え。銀の槍だ」

「ありがたく使わせてもらぜ」

銀の槍を思い切り投げる。

（当たれ）

第13話 戦闘その5 カンナギルナまたの名をベルヴィル

空間に亀裂がはしるとともに声が聞こえた。その声に聞き覚えがある、カンナギルナだ。

まず、間違いはないだろう、ファンだからな。

「オプティカルカモフラージュを見破るとは流石ね」

「やっと姿を現したな、黒幕」

突然赤い絨毯表れ、その上にフランス人形みたいな少女が佇んでいた。

どこか絵になる、まるでお姫様みたい品格をかしらしれていた。

とても美しい姿で、思わず息を吞んでしまう美しさだ。

「何を見惚れている、奴は敵だぞ。これだから男というヤツは救いようがない。少しは見込みがあると思ったが、貴様ただの工口餓鬼だな。救いようのない変態だ。失望した」

「そこまで言わなくてもいいだろう。俺は魔法少女一筋だから、機嫌なおしてよね」

「誰が魔法少女だ。わたしはそんなモノになんと言っているだろうが——」

スピカが何か叫んでいるが気にすることなく、視線を焰に戻す。

焰は騎士の礼を取っていた。

片膝をついてしゃがみ、握った右手を左胸に当て頭を垂れるこの礼は、騎士が仕える主人に向かってする最敬礼。

絨毯の上を堂々とフランス人形が進んでくる。

ふんわり柔らかそうな縦ロール、色は鮮やかな金色で頭上に光らせた王冠には、色鮮やかな宝石が幾つも散りばめられている。豪華な白いドレス、フリルがとても魅力で、身体中から溢れだす、気品、品格、風格、どれも高貴なもの、その立ち振る舞いは王族のモノで、身に纏う空気も女王のモノである。

女王であることを示す、紅く長いマントが彼女のあとを追って

く。

「それがキミの本当の姿か？　美しい、とても美しいよ。まるで中世の人だ」

「お褒めに預かり光栄だわ、でもあなたここで死ぬのよ、私に殺されちゃうの。ウフフフ。楽しいショーの始まりよ」

「その前に一つ訊いてもいいか？」

「なんですね？」

「お店はどうした？　ここに居ていいのか？」

「それは心配ないは、影武者いるから」

「なら何の気兼ね無く戦える」

「あ、思い出したわ、確かベルヴィル、そんな名前だった気がする。
かさんかすいそ過酸化水素使い。血まみれの王女」

かさんかすいそ過酸化水素：化学式 H_2O_2 で表される化合物。

しばしば過水かすいと略称される。

主に水溶液が酸化剤・殺菌剤・漂白剤として利用される。

性質：常温では無色の水よりわずかに粘度の高い弱酸性の液体。

エタノール、エーテル、水に可溶。

僅かにオゾンに似た臭いがする。

過酸化水素は不安定で酸素を放出しやすく、非常に強力な酸化力を持つヒドロキシラジカルを生成しやすい。

過酸化水素は活性酸素の一種ではあるが、フリーラジカルではない。

強い腐食性を持ち、高濃度のものが皮膚に付着すると痛みをともなう白斑が生じる。

また、可燃物と混合すると過酸化物を生成、発火させることがある。

水に溶けると、分解されるまでは水生生物に対して若干の毒性を

持つ。

実験室では、酸素を得る際に使われる。

この反応式は以下の通りである。

反応速度を大きくするため触媒として二酸化マンガンを酵素の一種カタラーゼを使用する。

傷口の消毒時に生じる泡は体内にあるカタラーゼが触媒として働いて生じる酸素である。

なお、過酸化水素は消防法第二条第七項及び別表第一第六類二号により危険物第六類（酸化性液体）に指定されている。

また、重量％で六％を超える濃度の水溶液は毒物及び劇物取締法により劇物に指定されている。

「彼女の手料理を食べると身体からメタノールが出るんだよ。食べても身体の以上に気が付かなかつただろう」

メタノールは有機溶媒などとして用いられるアルコールの一種である。

別名として、メチルアルコール、木精、カルビノール、メチールとも呼ばれる。

示性式は CH_3OH で、一連のアルコールの中で最も単純な分子構造を持つ。

ホルマリンの原料、アルコールランプなどの燃料として広く使われる。

燃料電池の水素の供給源としても注目されている。

「メタノールか？ なかなかに恐ろしい力だ。だがわからない、なぜ人体発火なのだ。他にも殺し方はあつただろう」

「人が燃えるのが好きだからな？ 人が悶え苦しむ姿を見ると恍惚するんだよ」

「狂ってやがる」

「お前みたいな雑魚の感性和俺様の感性を一緒にするな。胸糞悪い

……と、とっと焼け死にやがれ」

「死ぬかよ」

第14話 戦闘その6 禁呪

「これが何かわかるか？」

黄金に輝く鉱石を見せてくる。

「そ、それは希望の鉱石」

「ほーバカなお前でも知っているようだな」

希望の鉱石と呼ばれる鉱石がある。

これの輸入より火力発電が主流なった。

原子力の時代は終わったのである。

だが……希望鉱石には謎が多い。

鉱山元不明。成分不明。わかっていることはアメリカがそれを大量に有しているといことだ。

日本もアメリカから、高値で買っている。

アメリカがそれをどのようにして手に入れたのかは謎のままだ。

一説では、宇宙から飛来した隕石のようなものだと言われている。

その実体は謎のままだ。

そして戦争が起こった。

戦争のきっかけは些細なものだった。

いつだってそうだ！

くだらないブライドの性で戦争が起こる。

いつだって苦しいものは弱者だ。

何も変わらない。

だから権威を振りかざすヤツは嫌いだ。

「これから面白いモノを見せてやる」

「アレをやるつもりですか？ 待つのです人間。アレは私に掛かる負荷が大き過ぎます」

「うるさい。黙って俺に従え。口答えは許さん」

薄ら笑いを浮かべ、希望の鉱石を食べやがった。美味しいのか？
そっという問題ではないな。一体何が起これるというのだ。

「見るがいいこれが自動人形の真の力だ」

「まさか合体しただと。これが真の力だというのか」

「これこそがまさに一心同体。俺が辿り着いた境地。お前でも一生辿り着けない場所だ」

嘲るように叫ぶその姿はとても禍々しく、もはや人ではなかった。これが本当に真の姿なのか？ 俺にはそうは思えない。ベルヴィルも苦しんでいるように見える。

全身から溢れだす瘴気^{しよつき}に蝕まれ、醜い、とても醜い姿をしている。かろうじて人の形を保っているが、もはや人とは呼べない。バケモノだ。

「バカなことを、アレは禁呪。禁じられた技。悪魔に魂を売り渡す代わりに絶大な力を手に入れる」

「対価は生体エネルギーということか？」

「ええ、そうよ。しかも性質が悪いことに、契約者。つまり人間の方にはなりのリスクもない。一見、一心同体だと思えが、それは間違いだ。人間の方には、一切ダメージを受けないだ」

「道具のように使いやがって許せない奴だ。ぶん殴ってやる」

怒りを露わにして、大声で叫ぶ。拳は強く握っていた。臨戦態勢は整っていた。

第15話 戦闘その7 黒真珠・神への反逆者

今にも跳びかからん勢いだったが——あることに気付いた。
スピカの様子が可笑しい。

殺気だっていたのに、今は静かだ。

それはまるで嵐の来る前の静けさ、何かよくないことが起こると直感した。

「フフフフ」

悪魔のような、背筋がぞつとする、不気味な笑い声が木霊する。
スピカの髪が青から黒になり、ところどころ、血のように赤い場所もある。肌も浅黒くなり、瞳は地獄の業火のように赤い。先まで着ていたトレンチコートは脱ぎ捨てられ、セーラ服が露になる。

「こちらの方が動きやすいな」

「目覚めたか、黒真珠。^{カオス}待ちわびたぞ」

「スピカに何をした。答えろ」

「別に俺は何もしていないさ。本来の姿に戻っただけだ」

「どういうことだ」

「どうもこうもない。目に見えているモノが真実だ。現実を受け入れる」

改めてスピカを見据える、敵意を剥き出しにした瞳は、まあいつも通りだろう。コイツはいつも俺を殺そうとしているからな。隙あれば殺そうとする。正確に言えばただ血が欲しいだけなのかもしれないが、手段を選ばないところが怖い。

「私は黒真珠、^{カオス}神への反逆者にして世界の崩壊を望む者」

「お前……知ってるか？ 自動人形の力の源は我欲だよ。俺の人形が願ったことは清楚女性になりたいというものだった。何でそんなことを願ったかという、コレがバカみたいで、ホント笑えるんだが

な！ コイツ、娼婦の娘な、小さい頃からやりまくってたんだったよ。マジ受ける。しまいには親に売られて神の器にされちゃったよ。その頃にはもう心は、壊れてたんだろうな。まあこれは教会から聞いた話なんだけだな。マジ、受けるだろう、処女を十二で失ったんだってよ。まあ、その前から男の相手はしてたみたいけどな。淫みたらな人形だと思わないか？」

「そんな歪んだ環境で育ったから、能力も歪んだのか？ 全然笑えねよ、スピカ—— お前も—— 闇に捕らわれているというのか？ なら俺が必ず救ってやる」

「我の目覚めとともに世界は破滅へと向かう、もはや誰にも止めることはできない」

「正気に戻れ、お前はこんなことを望んでいないだろう。こなんくだらないことをするために戦っていたじゃないだろう。俺の知っている、お前は確かに生意気だったが、正義の味方に憧れていた。人を愛する心を持っていたはずだ。おい、スピカ、なんとか言えよ。聞こえてんだろう」

「全てを破壊するまで止まらないぜ、神への恨み、憎しみ、負の感情を吸収し力へと変える。究極の兵器、それが黒真珠、カオスもはや誰にも止めることはできない」

銀色の細剣を生成して、蝶のように軽やかに舞い、激しい突きを繰り返してくる。

スカートが靡く、美しい太腿が見えるがいつもみたいに楽しむ余裕はない。

「止めるスピカ、俺がわからないのか？ 味方だ。危害加えない。信じろ」

「今のソイツに何を言っても無駄だ！ 貴様の声は決して届くことはない」

「クソ！ 完全に暴走してやがる。一体なぜこんなことになったん

だ。理由がわからない」

猛攻を皮一枚のところであわし続ける。かわすことだけに全神経を傾ける。

（さすがにいつまでもかわし続けられないよな。体力にも限度があるしな）

「なかなか頑張るじゃないか？ 虫ケラ以下ゴミの分際で。だがそろそろ限界のようだな」

息が上手くできない。頭くらくらす。身体が重い。目が疲れてきた。体力的にも厳しいな、このままではやられる。

しかし俺にはスピカを傷つけることなどできるはずがない。

「スピカ、目を覚ませ！ スピカスピカ」

「うるさい！ その名で呼ぶな。私は私は――」

「スピカ、お前が何と言おうと俺はスピカと呼び続ける。これだけは譲れない。大切な仲間だから、帰ってこいよ、スピカ」

「うるさいうるさいうるさいうるさい」

「また、この感覚だ。血も飲んでないのになぜだ！ 俺の中に何かが流れこんでくる。」

これも記憶なのか？

その輪郭は朧げでよく見えない。幼い幼い女の子。

「ねえ、何でキミは泣いているの？」

声が届くとは思ってなかった。

ただ声を掛けずにはいられなかった。

あまり寂しそうで、孤独で震えていたから。

その寂しさは誰よりも知っているつもりだから……ほって置けな

かった。

まるで昔の自分を見ているようで我慢ができなかった。

「キミはずっと独りでココにいるの」

届くはずがないと思いつながら喋り続けた。

その程度のこと、彼女の孤独を埋められるとは思ってなかったけど。

俺は叫び続ける。

何度も何度も何度も何度も何度も、喉がかれるまで、ひたすら叫び続けた。

「誰からも愛されたことのない人が——人を愛せると思う？」

その呟きは、誰に問うわけでもない。

答えを求めているわけでもない。

ただ自分に言い聞かせるだけのもの

「わたしは多くの人を殺した。仲間を守るために仲間を殺し、友達を守るために友達を殺した。自分の身を守るために多く人間を殺した。殺したくなんてなかった。でも死にたくもなかった。でももう疲れたな、ゆくり眠りたい。ココで静かに眠りたり、今はそれだけだ。もうわたしの物語は終わりだ」

「ふざけるな！ 犠牲の上になり経つ世界など俺は認めない。絶望が世界を覆い隠そうと、俺は希望を捨てない。どんな悲しみが待ち受けようと乗り越えて行く。だからお前も諦めるな」

悲痛な叫びがこだまする。

決して彼女には届くことのない声。

ココがどういう場所なのかは分からない。

だけど、思いは通じると信じたかった。

希望を捨てない。

だから叫ぶ

「俺を信じる。必ず朝は来る。そしたら笑って暮らせる。だから諦めるな。自分の可能性を信じる。俺はいつまでも傍にいてやるから。もうお前を独りにしないから。俺を信じる」

少女に向かって思い切り手を伸ばす、届く、絶対に届く。

次元の壁だろうとなんだろうと越えてみせ。

信じる力は、思いの力は、世界を変えるだ。

それが俺の信念で覚悟だ。

「届けー」

何かが砕ける音がした。

とても脆く儚い音。

けれど、どこか力強さを感じた。

不思議音だった。

さらに腕を伸ばす。

もう少して届く。

あと少しだ。

そう確信した時に強い風が吹き、弾かれる。

黒い影が現れ、声が聞こえた。

「何故わからない。何故邪魔をする。彼女はそんなこと望んでいない。ただ静かに休みたいだけだ。私は彼女の一部だからそれが痛いほどわかる」

「生憎、俺は人の話を聞かない性格でな、疎まれようと、嫌われよう、憎まれようと、彼女の傍を離れるきはないさ。だって死にたくないからな」

「全く身勝手な性格じゃ、まさに我欲の塊だな。お前みたいな男を自己中と呼ぶんだろうな、自己中で変態でオタクなんて最悪だな」

「だからスピカは連れて帰る。彼女の意味など関係ない。異論は認めない」

「はい、そうですかと帰すと思うか」

「お前を倒して連れて帰る」

「それは無理な話だ。彼女が私で、私が彼女だ。つまり私を倒すということは彼女を倒すということに等しい。さあどうする、それ

でも私を殺すか？ まあそれもいいだろう」

「人殺しは悪だ。だから俺は殺さない。それが人外の化け物や兵器でも変わらない」

「理想ばかり高い男だ！ これだから中二病は性質が悪い。どうすると言うのだ」

「助けるさ、お前もスピカの一部だというなら——まとめて全部、助けるさ。」

もう誰も見捨てない。決めだ！ 誓った、あの日に——だから諦めない」

「私達を救おうと言う、救済する言うのか？ そんなことできるはずがない。」

私は彼女の我欲によって生み出されただよ。

彼女の能力は創造、その能力に例外はない。

人格すら生み出すことができる。

友達が欲しかったという理由で生み出された。

彼女はいつも独りだった。生まれてすぐ人の殺し方を覚えた。人が息をするように、彼女は人を殺す。何の躊躇もなく、まるで害虫を駆除するかのように、平気な顔で人を殺す。

それが私の生まれる前の彼女——でも彼女は温もりをしてしまった。

そして私が生まれた。

私は負の情念、彼女に殺された者達の怨念が寄り集まって出来たモノ。世界の崩壊を望む意志。

それが私、カオス。

私達の手は汚れきている。人を殺し過ぎた。化け物だ！ 人殺しで、同族殺しで、バケモノ。救われる価値などない」

「俺は人殺しは嫌いだ。平気で人を殺せるヤツは人間じゃない。だけれど自分をバケモノだと言うヤツは最も嫌いだ」

「ならどうしろというだ。わたしは彼女を苦しめる」

「そんなのは自分で考えろ、お前は化け物でも兵器でもないんだか

ら……自分で答えを見つけれはるはずだ。お前がどんな姿になると、お前は人間だということだけは忘れるな」

「答えが見つかるまで一緒に居てくれる？」

「当たり前だろう。仲間なんだから」

「ありがとう」

（今のビジョンは現実ものなのか？ スピカはどうなった。頭痛、目眩、耳鳴り。

これは貧血の時の症状だ。血が足りない）

「まだ、完全覚醒にはほど遠いか？ 使えない奴だ。俺様直々にドドメを刺してやる」

かわせない、やられる。

ここで死ぬのか？

死を覚悟した瞬間ありえないことが起こった。

目の赤に染まった。

血血血血血血だ。

俺の血か？ いや違うこれはスピカの血だ。

なぜなぜなぜ？

一体何が起こった、わからない。

何もわからない。

一瞬で頭が真白になった。

「何で俺なんかを庇ったんだよ。バトロアで優勝するだろう。約束を守るだろう。だったらこんな所で死ぬなよ。おい！ 俺達は一心同体何だろ。何とか言えよ。全部嘘だったかよ。お前の覚悟はその程度なのかよ」

「脆い、これが最強最悪と畏れた魔導具なのか！ あまりにも脆すぎる、話にならない」

俺を庇ってスピカがやられてしまった。

俺のせいだ、俺が弱いからスピカが……
守ってやるて——約束したのに——結局守れなかった。

第16話 戦闘その8 友情の剣、フェザーブレイド

「何、ぼつさしている。死にたいのか、貴様は」

全身をパワードスーツで武装した白山がそこにいた。

「何故！ お前がここにいる。その格好はなんだ」

「今はそんなことどうでもいいだろう」

「いいか、奴を倒すことだけ考えろ。他のことは考えるな。目の前の敵を倒すことだけに集中するだ。お前の力なら必ずヤツを倒せるはずだ。俺はそう信じている」

白山を包むパワードスーツから煙りが上がる。長くは持ちそうにない。

相手は火に電気を使う。

相性は最悪だ。普通戦つてもまず白山に勝めはない。

「これを使え！ 我が主から饒^{せんべつ}別だ」

（このエロゲーは三人で作った思い出のゲーム。

あいつ等との友情の証。

俺がキャラクター原案で、神中がストーリーを担当。白山はプログラムと音楽をやってくれた。

アイツはあまり乗り気じゃなかったな、結局、たいして売れなかったけど――

それ以降作ってないけど――最初で最後の作品。

でも大切な思い出だ。

明日への翼。

それがこのゲームのタイトル）

エロゲーを剣に変える力。

剣の強さは思い出での大切さで決まる。

友情の剣、フェザーブレイド。

羽根のように軽く、しかし決して折れることのない最強の剣。その形状は長剣。

刀身も柄も白。

全てが白い剣。

刃は鋭くいかなるものでも斬り裂く。

この剣なら奴を倒すことができる。

だが間に合わなかった。

白山はすでに地面に倒れていた。

生死は不明だ。

「安心しろコイツはまだ死んでねえよ。じっくり痛ぶってから殺してやるよ」

「汚い足を退ける」

「誰にもの言ってんだ！ 貴様から先に殺してやるよ」

「カサンドラ、スピカと白山のことを頼む。俺はコイツを倒す」

「ええ、任せつて。今の私なら隔絶結界を張ることもできるわ」

「俺様を無視するんじゃない。無視されるのが一番嫌いのんだよ。望み通り貴様から殺してやる。覚悟しらがれ、負け犬くん」

「火だろ？ 静電気だろうと全て吹き飛ばしてやる、俺の風で」

「その前に感電死させてやるよ。スパーク・ゲヘナ」

「お前の攻撃は俺には届かない。決して届くはずがないんだ。お前と俺では背負っているものが違い過ぎる。覚悟なき刃など俺には届かない」

スピカの想いを白山の思いを無駄にするわけにはいかない。

全ての思いをこの剣にかけて奴を斬る。

「電炎^{でんえん}を斬ったというのか？ 何だその剣。クソ！ 死ね死ね死ね死んじまえ」

ヤツの攻撃を全てかわし、間合いを詰める。

右腕を斬り裂く。

これでもう細剣を使うことはできないはずだ。

「バカな、なんだその剣は？ なぜそんなに身体能力が上がった。風、風はどうした」

「本当に風を操れると思ったか？ 残念、俺にそんな力はない。この剣の俊敏性上がるそれだけで」

頭の回転がよくなるだけでだ。

あくまでも特殊能力はだがな？

剣の強さは思い出の大切さできまる。

まあそれでも、敏捷性も上がっていないんだけど、奴は俺のスピードについてこれなかった。

死を恐れたからだ。

だから俺の力を見誤ったのだ。

「貴様の負けだ。大人しく捕まれ」

「ゴミグズに俺が負けた、そんなはずが……あるって、いいはずがない！ 俺は最強なんだ。負け組は嫌だ——」

「予断するな！ 戦意は喪失していない」

「もう遅い死ね」

残った左腕で襲い掛かってきた。

「バカな、今までの攻撃をかわしたというのか？ ありえない」

「貴様の考えは全て読んでいる。」

不意打ちのつもりだたんだろうが、残念。

今の俺には通じない。筋肉の動きが手に取るようにわかるかな」

「クソ、クソ、クソ——なぜ当たらないだ。クソ——」

「無駄だというのがまだわからないようだな」

「なら究極の奥義を見せてやる。俺の魂を喰らえ。ベルヴィル」

「悪魔に魂を売ったのね。愚かだわ！ なぜこの術が？ 禁呪と言われているか知ってる」

「人間の方リスク無く。自動人形から生体エネルギーを吸うからだろっ」

「それは誤りだわ！ バーサーカーの恐怖はこれから始まるのよ」

「どういうことだ」

「理性を失った人間と自動人形の合体は『真のバケモノの誕生』を意味する。もはや誰にも止めることはできないわ、世界の全てを焼

きつくすまで。これがあなたの望んだ未来なのね」

「世界の崩壊——それが俺の望んだ未来だというのか？」

「ええ、そうよ。あなたはこうなる前に殺すことができた。でもしなかった」

「俺は……………」

「悔んでる時間はないわ。バケモノがその姿を現すわ。あなたにアレが止められるかしら」

「なんだアレは気持ち悪い。皮膚が肉が溶けてやがる。うえっ」

辺りを包む腐臭。うえっ、マジ吐きそう、気持ち悪い。

切断された右腕からは何本も触手が生えている。

歩きたびアルファルトが酸化していく。

「情けないわ！ 殺す覚悟も無いのにバトル・ロワイアルに参加するなんて。これは生き残りを賭けた勝負なんですよ」

あまたの触手がカサンドラを襲うが気にすることなく切断していく。

黒剣・エクリプス、なんて凄い切れ味と強度を持っているだ。

「俺は人を殺さない。どんな悪人でもだ。それが俺の矜持だ。だからお前の手も借りない。手出し無用だ」

「綺麗事だけで生きていけるほどこの世界は優しくない。それを私は痛いほど知っているわ」

「ならあのバケモノを殺さずに捕まえてやる。俺の誇りにかけて」

幸い動きは遅い。この程度のスピードなら攻撃を喰らうことはないだろう。

まあ、厄介なのはあの触手だけか？

アルファルトを蹴って走り出す。

どんどん加速して行く。

もつと速く、もつと速く、誰も追いつけない次元に！

「いまだ！ もらった」

うなじを柄で思い切り叩きつける。

これで気を失うはずだ。

「バカな、倒れない。全然効いていないといのか？　しかも触れたところが蝕まれている」

「早くそれを捨てる、手を持っていかれぞ」

地面に投げ捨てる。

一瞬にして剣が消滅してしまった。

（危ないところだった。もう少しで手まで持っていていかれるところだった。まさに危機一髪）

「これでわかっただろう。殺す気でいかなければ死ぬぞ。それでも私は構わないがな」

（彼女の言う通りだ。しかし俺は活慈剣^{かつじけん}を目指す。

生かし、慈しむことを忘れない。それが俺の目標とする剣だ）

「アレはもはや人ではない、バケモノだ。迷う余地ないであろう。
なぜ躊躇^{ためらう}う」

「それでも——嫌なんだ。傷つくのを見るのも。傷つけるのも。全部イヤなんだ。だってそれじゃあ、誰も救われない。傷つける方も傷つけられた方も、みんなみんな不幸になるだけだ」

「じゃあこのままアイツをのさばらせておくつもりか？　やはり世界の破滅を望むのだな。器に小さく男よ」

（俺はどうすればいいだ。どんな生物だって生きているんだ。それを殺すことなんて俺にはできない）

「ほとほと呆れたわ。久遠の魔導具が選んだ相手だから期待していたが、とんだ腰抜けだ」

一息ついて——沈黙が続く。

嫌な空気だ。

息苦しいココに居たくない逃げだした。

そんな気持ちになっていた。

最初から無理だっただよ。

俺にできるはずがなかったんだ。

ここで死んだら争いのない平和な世界に行けるかな？

もう俺は疲れたよ

第17話 戦闘その9 絶望

「我が主はお前みたいなの、クズに何を期待していたのかわからない」
胸ぐらを掴み、腑抜け顔をした俺に向かって叫んで来た。

「悔しくないのか？ 大切な者を踏みにじられて！ 私は悔しい、
そして無力な自分が腹立たしい」

顔を思いきり叩かれ、膝について倒れ込む。頬がヒリヒリする、
痛い、心が痛む。

俺が本当に望んだ結末はこんなものじゃないはずだ。

こんなバッドエンドでいいはずがない。

俺の物語はまだ終わらない、終わらすわけにはいかない。

「貴様はそこで倒れている、私一人で奴を倒す。とんだ腰抜けだったな」

地面に倒れこんだまま、俺は自問自答を繰り返してた。まるで出口のない迷路に迷い込んでしまった心境だ。自分の為すべきことがまるで見えてこない。絶望と後悔と自責の念が俺を支配する。

俺は何の為に戦っていたのだろうか？ もはや戦う理由すらわからない。全てのことがどうでもよくなってきた。ただ虚しく悲しい。ぽっかりと心に穴が開いてしまったかのような。

息をするのすらめんどくさい、もはや視界には何も映らない。思考能力がどんどん落ちていく。

もう疲れたな、少し休もう。俺は頑張った、やれることは全てやった。もう十分じゃないか？

あとはカサンドラに任せて、俺はもう休もう、これでいいはずだ。これが正解のはずだ。

だけど、頬をがヒリヒリ痛むよ、何でこんなに痛いだよ。

俺は俺はどうしらいいだよ。頼むよ、誰か教えてくれ、俺は俺は

第18話 戦闘その10 イブと呼ばれた少女。

「——ちゃん、起きて、お兄ちゃん起きて」

俺を呼ぶのは誰だ！ どこか懐かしい声。俺は何か大切なことを忘れている気がする。なぜ、バトル？ロワイアルに参加しろうと思っただ。スピカに出会ったからか？ イヤ、違う——もっと前に何かあったはずだ。何か大切なことが、思い出さなければいけないことが——それが俺の戦う理由だったはずだ。決して忘れてはいけないことだったはずだ。思い出せ俺、俺はのために戦っていたはずだ。

そう、一人の少女、イヤ幼女との誓い。
己にかせた使命。

俺は俺はあの子を捜さなければいけない。

もう一度、会わなければいけない理由がある。

そのために魔導書を探すと決めたんだ。

その手段としてスピカと契約してバトル？ロワイアルに参加することになったんだ。

「全てを思い出したのね、お兄ちゃん。なら、もう大丈夫ね。戦つて、そして私を見つけて——助けて」

「ああ、もう大丈夫だ。心配をかけたな、必ず助けに行くから——

——もう少しだけ待ってくれ——絶対に行くから——這つてでも行くから——ごめん、もう少しだけ待ってくれ」

「なぜ、お兄ちゃんが謝るの？ 悪いのは私なのに、お兄ちゃんにいつぱいいつぱい迷惑かけて、今だってお兄ちゃんを困らせている。怨まれても仕方ないことたくさんしたのに、ホント優しいな。やんでそんなに優しいのかな？ 言葉の通じない私に親身になってくれて、友達にもなってくれた。あの時は本当に嬉しかった。でも私はあなたの優しさを裏切った」

「ああ、突然居なくなった時は悲しかった。怨みもした、でも今は

違う」

「私を許してくれるというの？　こんな愚かな私を――」

「許す、許さないの話じゃない。お前は何もわかっていない。俺は最初から――イヤなんでもない。とにかくだ、自分を卑下するのだけは止める、俺はそういうのが一番嫌いなんだ」

「本当にあなたは変わらないのね、あの頃のまま、何も変わっていない、素直で優しい子」

「お前の眼は節穴か？　俺はそんな綺麗な男じゃない。何もわかってないんだな」

「もう照れちゃって、可愛いだから。あなたに力を貸したあげる。信念を、優しさを貫ける力をあがるわ」

今の一体何だっただろう。

「ぐだぐだ考えるのは俺らしくない。俺は人の話を聞かない主義だ（協調性ゼロで空気が読めない男だ。それがどうした。何も気にすることはない。それが俺の生き方だから。胸を張って生きて行くさ）状況を把握するために辺りを見渡す。まだカサンドラとバーサー力が戦っていた。激しい死闘を繰り広げていた。

「苦戦しているみたいだな。力を貸そうか？」

「いらん、コイツは私一人で倒す。手出し無用だ」

第19話 戦闘その11 決意の力

「まあ、そう言っなよ。俺に考えがあるんだよ。力を貸してくれよ、殺さずに捕まえる方法があるんだ。でも一人じゃ無理なんだよ、頼む」

「なぜ希望を捨てない。なぜ笑える。なぜそんな目ができる。何故なんだ。お前を突き動かすモノは何だ！ 私の想像を超えている、ありえない、お前は一体なんだんだ」

「ただの変態さ。頼む力を貸してくれ、俺はアイツらを救いたいんだよ」

「わかった。話だけ聞こう」

「たぶんなんだけどね、合体の核となるモノを壊せば、多分元に戻れると思うんだよ。確証はないがやる価値はあるはずだ。俺は決して希望を捨てない。自分の可能性を信じて前へ進むだけだ。だから、俺を信じて力を貸して欲しい」

「私は何をすればいいんだ」

「俺が核を見つめるまでの時間を稼いでほしい。できるか？」

「あたりまえだ。あまり魔女を舐めるなよ」

「ああ、心強い」

目を閉じ、精神を集中させる。心の目。心眼で見えるんだ。俺ならできるはずだ。

「見えた。そこだ」

アルファルトを蹴り、核を目指して手を伸ばす。皮膚が溶ける、痛い、物凄く痛い。

だけど力を緩めることなく貫く。

ここから先は我慢比べである。

俺が先にコアを壊すか？

コイツが俺の腕を喰らうか？

「バカか？ 死ぬ気か？ とても正気の沙汰とは思えない。自殺行

為だ」

言葉で言い表せないくらい痛い。

でももう少して届くはずだ。

それさえ壊せば俺の勝ちだ。

だからもう少しかもつてくれ、俺の腕——頼む——

「掴んだ。これだ。壊れろ」

パリン。ガラスが砕けるような澄んだ音がした。

（やった。コアを壊したぞ。これで合体が解けるはずだ）

身体が光出す。

そして二人に別れた。

焰とベルヴィルの姿が見えた。

二人とも身体はボロボロである。

生きているのかさえわからない。死んでも可笑しくない状態だ。

見るも無残な姿だ。これが人間なれの果てなのかもしれない。

（成功したのか？）

近寄ろうとした俺の道を塞ぐ、カサンドラ。

「邪魔だ。そこをどけ」

目の前にそびえる壁。

それは微動だにしない。

まるで俺の声が聞こえてないみたいだ

第20話 戦闘その12 終局

「貴様の役目は終わった。そこで大人しく見ているんだな」

「一体何を言ってる。ちゃんと説明してくれ」

「私が片を付ける。手を出せばお前も殺す」

素早く黒剣を抜き、黒刃で親指を軽く斬り裂き、血を吸った黒剣は脈打ち紫色に光る。

俺はただ啞然としてしていた。

止めることも叫ぶことも出来なかった。

ヤツの放つ気に圧倒されたのだ。

これが本当の魔女の力。

今の俺では話にならない。

次元が違い過ぎる。

俺は弱い。

無力だ。

魔界の門が開く。人間界と魔界を繋ぐ光。

「ケール」

ケールとは『切断』とか『破壊』という意味をもつ。

悪魔を喚起する呪文。

その悪魔の名を呼ぶだけ、使役することができる。

並の魔女ではなきないこと。

悪魔契約はとても恐ろしいものだ。

一度悪魔と契約を結べば、その身体は普通ではなくなるという。

光の中から悪魔が姿を現す。

翼を持ち、全身は黒いが、血に染まって赤くなっている部分もある。

長い歯と爪をもち、異形の姿をしいる。

「その女の右手を切り裂け」

その叫び声とともにベルヴィルの右手が切断される。

何かが砕ける音がした。

「うわあああ——」

二人の断末魔がアキバに響く。

「手を切られただけで死んだというのか？ 自動人形は不死身じゃないのか？ それになぜ焰まで死んだ。どういうことだ。カサンドラ」

「コアを破壊されれば自動人形といえ、死ぬわ。力を手に入れた対価として契約者も死ぬわ」

「コアが右手にある知っていたんだ。それを壊したらどうなるかも知っていて壊したんだな」

「ええ、そうよ」

「どんな理由があっても人殺しは悪。絶対の悪だ」

「やはりあなたは何も見えてないのね。綺麗事では何も変えられない。何も変わらない。人殺しが悪、そんなの私にだってわかっていのよ」

わかっているなら、なぜ殺したんだ。そうしなければいけない理由があったのか？

彼女は一体何を背負って戦っているだ。

「魔女だと蔑まれようが、私には叶えたい願いがあるの。そのためには手段は選ばないわ」

強い覚悟のようなものを感じた。そこまでして叶えたい願いとは一体何だろうか？

「それにあなたに人殺しは似合わない？ 私みたいになって欲しくないしね」

「だから、変わりに殺したというのか？ うざけるな」

「私は人に恨まれるのは慣れているから」

「そんな悲しい事、真顔で言うなよ」

「どうしてあなたが泣くの？ 何も悪くないのに、人を殺したのは私で、私は魔女で、世界中の人から恨まれていて。そして心を閉ざした」

「なんでだろうね。なんでだろう？ 人殺し悪で許しちゃいけない

のに。キミの顔を見ていたら涙がでてきた。一人で独りで、苦しんで苦しんで、それでも挫けることなく歩いている。眩しく、眩しくて仕方がないんだ」

俺は弱い。

人を殺す覚悟なんてものはない。

そこまでして叶えたい願いなんてものも無い。

結局は、中途半端な人間なのかもしれない。

約束を守ることも、信念を貫くこともできない。

全てが半端者な男。

それが俺だ。

「変わっているわ、人殺しで魔女である私が眩しいだなんて」

「人殺しは悪だ。それは変わらない。しかしキミが悪だと思えないそれだけのことだ」

（悪だの？ 正義なの？ 一介高校生にわかるわけがない。難しいことを考えるのは苦手だ）

「やっぱり変わっているわ。バカな人間もいたものね。貴方が捜する少女の名前はイヴ。始まりの少女と言われているわ」

（イヴか？ うん、良い名前だ）

「あとスピカと出会えたのは偶然ではなくて、必然。イヴの意味ね。貴方はイヴに気に入られるみたいね。

彼女に会いたかったら、バトル・ロワイアルで優勝することね」

「何故、俺に教えた」

「単なる気まぐれ、深い意味はないわ」

「では、私はもう行くわ。最後に我が主を助けてくれてありがとう」

「礼にはおよばないぜ、友達を助けるのわ、あたりまえだろう」

「でも今は、敵同士だわ」

「先に助けてくれたのはあいつだ。借りは返す」

「随分と律儀な人ね」

「お互い様だろう」

「そうかもしれないわね」

「でもこれだけは忘れないで、私達は、あなたの味方ではないということを」

「ああ、分かっているつもりだ」

「ならいいわ。次会う時まで必ず生き残りなさい。貴方達を倒すのは、魔女である私の仕事だから」

「ああ、お前も死ねなよ」

「私は死なないは、だって魔女は不死だから——」

「そうか、そうだな」

「やっぱりおかしな人ね。何がそんなに嬉しいのかしら。

でもまた会うのが——何だか——楽しみになってきたわ」

「そうだね。俺から最後に一言だけ言わせてもらっよ。白山をよろしく」

「私はもう行くね。これ以上のんびりしているといろいろと面倒臭いことになるから」

「ああ、また必ず生きて会おう」

カサンドラの背中を静かに見守り。

俺もスピカを担ぎに帰ることにした。

思いの他スピカは軽かった。

そして裏路地には何も無かった。

ビルの残骸も無く平地になっていた。

見渡しよかった。

ただ地面は白く——アルファルトとは思えなかった。

しかも異臭はまだ残っていた。

まあこれだけひらけた場所になれば、もう事件は起きないだろう。

教会・礼拝堂。

「シスターカレハ、無事に任務は完了しました」

「お疲れ様でした。これが今回の報酬です」

「ありがとうございます」

麦色の封筒を受け取った。何も書かれていなかった。機密保持のためか？

とりあえず、今日はもう疲れた。

部屋に帰って寝るか？

「失礼します」

自室。

ベットとかなかったんだだけ。

まあいいや。

もうまま寝よう、着替えるのとかめんどくさい。

お休み。

翌日。

「おい、起きろいつまで寝てるきだ」

どこか、聞き覚えがある気がした。

「いいかげんに起きろ」

腹に強い衝撃を受ける。多分蹴られたのだろう。冷静に分析する。

「おい！ いきなり何をする。もう少し優しく起こせないのか？」

「うるさい、黙れ。起こしてやったことに感謝しろ」

「朝から機嫌が悪いな」

「もう昼過ぎだ！ ボケ」

ゆっくりと身体を起こす。

全身が痛い。

昨日無理しすぎたな。

「イテテッテ。もうそんな時間か？」

「これを飲め。あと助かった。礼を言う」

無愛想な顔をして血の入った、聖杯を押しつけて来る。

「ありがとう。では頂くとするよ」

相変わらず苦い、そして鉄臭くて気持ち悪い。

血というのは何度見ても慣れない。

でも痛みがひいていくが分かる。

スピカの血を飲むことで『自然治癒力』が高まる。

こうして見るとスピカはやっぱり人間にしか見えないが。

でも人間じゃないだなと改めって思った。

まあどうでもいいこだ。

スピカはスピカだしな。

その事実が変わらない。

「どうしたの？ 難しい顔して」

「どうもしないさ！ ただね。うん。何でもない」

「変なの？ まあ、出会った時からお前は変な奴だったがな」

「スピカほどじゃないさ」

「私のどこが変だというだ。だいたい貴様は、何でいつもそう言うことしか言えないんだ」

「もう傷は大丈夫なのか？ 心配したぞ」

「核を壊されない限り大丈夫だ。安心して、もう少し休みめ」

「ああ、そうさせてもらうよ。まだ疲れているみたいだ。おやすみ」

第21話 思いが形になる時、イヴは姿を現す。

白。白い場所に居た。

壁も床も全て白い。

扉も窓も無い。

完全な密室でどうやって入って来たのかすらわからない。

ここは一体何処だ？

これは夢なのか？

それすらわからない。

全てが謎に包まれていた。

「やっと会えたわね。ようこそ無限の世界へ」

背後から透き通る綺麗な声がした。

まるで天使の囁きだ。

振り向き姿を拝む。

美しい。まるで女神だ！

全身から滲みでる神々しさ。

無垢な笑顔。

整った顔立ち、すらりとした足。

長い白髪に凹凸の少ない身体。

全身を覆う白い布。

この世界と同調しているようだ。

緋色の瞳が俺を見つめて来る。

とても優しく愛おしそうに――

「ずっとずっと会いたかったの？ この日が来るのをずっとずっと待ってた」

「キミは誰？ お会いしたことありましたか？ ここはどこですか？」

「あつ！ この姿で会うのは初めてだっけ？ わたしはイヴ。ここは無限の世界」

「キミがあの子の少女？ 随分イメージが変わったね。ところで無限の世界何？」

「イヴちゃんにもわかんない。そんなことよりもね。お兄ちゃんって呼んでもいい」

「別に良いけど。質問にはちゃんと答えてね」

「わあ。ありがとうお兄ちゃん。私ねお兄ちゃんが欲しかった？ ずっとずっと昔からね。お兄ちゃんが欲しかったの？ だから本当にありがとう、兄ちゃん」

（うわあつ！ 思いつき調子の狂う少女。イヤ、幼女だ。出端のを挫かれた。完全に幼女ペースだ。このままじゃヤバイ）

「イヴちゃん？」

「な、に、お兄ちゃん」

「ずっとここに独りで居る？」

沈黙…… 答えたくないのかな？

でもここで折れるわけにはいかない。

「イヴちゃんのこと教えてくれないかな？ 知りたいな」

少し屈んで、目線を合わせ、優しく微笑みかける。手は膝ぐらい置いておく。

「イヴちゃんはイヴちゃんなの。でもねみんなイヴちゃんこと、女神さまで言うの。でね、優しくしてくれるだけね。寂しいの？」

どこか虚しく、消失感あるの。本当の私は私を誰も見てないの？」

目が潤んで泣き出した。悲しい顔だ、自分の存在を認められないというのは、とても悲しく辛いことだ。俺はよく知っている。

「ごめん。変なことを訊いて。確かに誰にも認めてもらえないことは悲しいことだね。だからもっとキミのことを教えて。好きな食べ物とか、いつも何をしているのか。キミのことがもっと知りたいんだよ」

手で涙を拭って、話始める。楽しそうに生き生きしているように

見える。

「好きなはね、チョコレートパフェ。あとお兄ちゃんも好きだよ。でね、うーと。いつね。冷たい檻の中にいるの？ そこはとても静かで何も無い所だなの？ 年に一、二回ぐらいしかお外に出ることができない。私の力は理を変え、秩序を乱し、世界を歪める力だから、隔絶されたの？ それを私は望んだの？ もう誰も傷つけたくなかったから、私のために誰かがの死のはもううんざりなの？ でもね、誰かの温もりに触れなくなる時がある？ だから年に一、二回は外にでるの？ そしてみんな、私のことを女神さまと呼ぶの？ ねえ、お兄ちゃん。神さまってどんな存在だと思う？」

「人の願いを叶える存在かな？」
「その答えはあながち間違っていないけど、正解とは言えないね。神の定義はそれだけじゃないから——神ってたぶん、この世界そのものなんだよ。だってね、神はずっと昔——人類が生まれる前からいるだよ。それはとても凄いことで、ちつぽけな人間が理解できることじゃないだよ。万物を司るということは世界そのものになるということなんだよ。お兄ちゃん。だから神はどこにでもいるし、どこにでもあらわれるんだよ。ただそれを認識することができないだけね。私の力は、神を顕現させることだができる。誰にでも神を認識することができるの。ただそれだけの能力——だっての？ でも今は違う。それは遙昔の話。遠い過去の私。願ってしまった。それが私の罪、過ち、後悔」

それ以上は何も喋ろうとしなかった。口を嚙み。沈黙が流れる。空気が重い、耐えかねた俺はずっと訊きたかった、あのことを口にしていた。

「キミが掛けた呪いを解く方法を知っているかい」
「ごめんね、お兄ちゃん。思念体である私にはわからないの？ 今の私は無数に存在する思念体の一人に過ぎないの？ 思念体は神を思う心。信心が生み出すの？ あなたの会った私と今の私は違うの？ 同じだけど違うの？ 私を生み出したのはあなたの心。十年間

私のことを思っていてくれた。あなたの心が私を生み出したの？

あなたは私のことを忘れなかった。そして強く会いたいと願ったただから私が生まれたの？ だから責任をとってお兄ちゃん」

「キミの言っていることは要領を得ない。俺がキミを生み出した、意味がわからない。それが神の力だというのか？ 一体キミは何もなんだ」

「私はイヴ。それ以上でもそれ以下でもない」

「本当に俺が生み出したのか？ 呪いを解く方法は知らないんだな」
「もう、時間はないは目覚めの時は近い」

第22話 イヴちゃん誕生。 それは思いの結晶

「こら起きろ、もう随分寝ただろう。それ以上寝ると豚になろぞ」
あゝゝゝスピカの声が聞こえてくる。

もう朝か？

結局、昨日はずっと寝てしまった。

でもスピカの血を飲んだおかげか、身体が軽い、怪我は治ったみたいだ。どこも痛くない。

じゃあ起きるかと思ひ身体を動かすと何か柔らかいものに当たった。

とても柔らかく暖かい。

毛布を退ける。

幼女が姿を現す。

いつの間に俺の毛布に忍び込んだんだろうか？

何処かで見たような気がするが思い出せない。

白髪で白い布を羽織ったみそぼらしい子。

ちゃんとしたをモノ食っていないのだろう。

か細く血の気の悪い肌は、恐ろしいくらいに白い。異常なくらい白い。

そのくせ瞳は赤い。緋色。スカーレット。まるで灼熱の炎のように真つ赤な瞳。

すべての血がいつてるじゃないか、と！ 思わせるほど赤かった。

「あまりじろじろ見ないでよ、お兄ちゃん。恥ずかしいわよ」

「えっ！ お兄ちゃん？ 誤解を招くことを言うな」

「お兄ちゃん。何も覚えてないの？」

ボキボキと指を折ることが聞こえる。凄まじい殺気を感じる。スピカが怒っている。

このままでは殺される。半殺しは確定だろう。誤解を解かなければ。

「落ち着いて聞け、俺にも何がなんだかわからないだ。だから落ち着いてくれ」

昨日腹を蹴られた時に思ったのだが、コイツの身体能力は格段に上がっている。

たぶん死の淵から回復したからだろう。まるでサ。ヤ人だ。

「そんな話が信じられるか？ この変態が！ 貴様が幼女好きの変態だということは知っている。だけど誘拐をする奴だとは思わなかった。見損なつたぞ」

「おい、人の話を聞け。誤解だつて。信じてくれいよ」

「貴様の話など信じられるか？ 貴様が変態なのは周知の事実だ。受ける聖なる鉄拳」

「あぶねえ」

「避けるな、バカ。当たらないだろうが」

「無理、当たったら死ぬ。手加減する気ないだろう」

「当たり前だ。変態に容赦するほど私は優しくない」

「お兄ちゃんをイジメないで。イヴの大切なお兄ちゃんなの」

イヴその名前に聞き覚えがある。

まさか夢の出てきた少女なのか？

にわかには信じられん。

それ以外考えられないのも事実だが――

「お前――イヴなのか？ 俺の心が生み出したという――幻影」

「そうだよ。お兄ちゃん。私はお兄ちゃんが思い描いたイヴ」

「一体どういうこと。説明しなさい。私達の間隠し事は無しよ」

イヤイヤ、お前謎だらけだろう。よくそんなこと言えるな

「どう説明していいんだか、俺にもわからないが……起こったことを掻い摘んで説明してやる」

「なるほどね。あなたも創造の力が使えるようになったみたいね」

「アレはお前だけの力じゃないのか？ それに俺は力を使った覚えはないぞ」

「私達はオートマターの力の源は我欲よ」

「どういう関係があるんだ」

「私は昔パンドラという女性にあったことがある。百パーセント。イヴの遺伝子を受け継いだ。完璧なクローン。つまり人工生命ね、私は実力を飼われパンドラの護衛を任された。彼女の力は神を顕現させる力。組織が求めた力よ。パンドラはとても素晴らしい女性だった。愛と正義のため身を捧げた聖女。彼女の意志を受け継いだ私が、やらなければいけないのよ。あなたとの出会いは運命だったのかもしれない。桜からパンドラ、もといいイヴの力を引き継いだ子との邂逅。偶然ではなく必然。これが神の意志というやつか？」

（俺……の……中に、イヴの力が流れてるだって）

「それは本当のことなのか？」

「現にお前の魔力はかなり減っているわ。たぶんその子を創造したからだと思うわ」

「イヴの力が具現化したというのか？ 今になってなぜ！ きつかけはなんだ」

「ねえ、お兄ちゃん。難しい話してないで、イヴちゃんと遊んでよ。俺の右腕を掴んで愛らしい眼で訴えてくる。

（めっちゃ、可愛い。抱きしめたい。幼女最高だ）

「もう少しだけ大人しく待ってね。そしたら遊んだあげるから」

「うん、わかった。イヴちゃん待ってる」

（素直で良い子だ。そして天使みたい可愛い）

「話の腰を折ってしまったな、でっ！ どうなんだ」

「お前の考えは間違ってる。補足するならその娘は、お前の記憶が具現化したものだろう。大元はお前に宿っていたイヴの力だがな。それときっかけか？ 私に思い当たる点はないな」

「なるほど、やっぱり俺の記憶が実体化したのか？ では俺が捜している少女ではないのだな」

「違うな、まだ教会に捕まっているはずだ」

「そうか、早く助けてやらないとな」

「バトロアで優勝するしかない。だがダイチ、お前は心も身体もま

だ弱い。修業が必要だ」

「今回のことで身に沁みてわかった。正義を貫くには強さが必要だ。力がなければ何も守れない。俺のプライドはズタズタだ。だから俺は強くなる。自分を信念を最後まで貫ける男になりたいから」

「その気持ちがあればお前はまだまだ強くなれる。犠牲の上になり経つ平和など真の平和ではない。わたしともに戦おう」

「ありがとう、スピカ」

「ねえ！ お話終わったの？ お兄ちゃん。だったら一緒に遊ぼうよ。ねえ、いいでしょう」

「ああ、そうだな。何して遊ぶ」

「絵本読んで、絵本」

「うん。わかった」

何冊か？ 読んであげた。今は膝の上よく眠っている。

寝顔もとても可愛い。

ぷにぷにした肌、サララサな髪に甘い香りがする。とても幸せな気持ちになる。起こさないように優しく頭を撫でる。あ、安らぐ、癒される。まさに憩いの空間である。

「何、和んでいるだ、貴様は」

「なんだ！ スピカまだ居たのか？」

「何寝ぼけたことを言っている。さっさと血飲む」

「もうそんな時間か？ いつもありがとう」

銀の聖杯を受け取り、一気に飲み乾す。相変わらず美味しくない。良薬口に苦しというからな、まあしょうがないのかもしれない。

第23話 完結

また、この感覚だ、今度はどんな記憶を見せてくれんだ。少し楽しみだな。

「あなたの叶えたい願いつて何？」

「桜になら教えてもいいかな？ 人間に戻ることに。そして家族を作りたいな。とてもささやかな夢、私ね。家庭っていうものに憧れている？ だって独りは寂しいもん。だから、暖かい場所がほしいの？」

「それがあなたの望み、叶えられるといいわね。わたしも力を貸すわ」

「ありがとう」

数日後、シスターカレハから話があるというので、教会に向かうこと。

「いまさるだけど——なんでスピカっていうだ。日本兵器としては思えない名前だよな」

「私の核石が真珠だからだ。まあ他にもあるそれは秘密だ」

「そうか。真珠か、確かにお前にピッタリな宝石だな」

「スピちゃんは可愛いもね。わたしも好きだよ真珠。あとお兄ちゃん大好き」

「こら抱きつくな、歩きにくいだろう」

教会・食堂。

「待ってたわよ、さあ座って」

「お話ってなんですか」

「約束通り、放火犯を捕まえたじゃないですか。俺達にまだ用があ

るんですか？」

「はい」

「貴方には魔術師としての適性があることがわかりました」

「えっ！ そうなんですか」

「驚いてるみたいですね。まあ無理もないでしょう。魔術師になるつもりはありますか？」

「はい。なりたいです」

「では、来週から魔術学校に通ってもらうことになります。もちろんスピカにも一緒よ。良かったわね」

「わたしも一緒に行くですか？」

「そうよ。オートマターも連れて来てね、頼まれたから」

「はーそうなんですか、わかりました」

「別にいいですけど、学費とかどうするんですか？ 俺そんなに持つてないですよ。あとイヴちゃんはどうするんですか？」

「全て免除されるみたいだから、心配しないで大丈夫よ。あとコチラム仕事をお願いするつもりだから、部活動とかはできないけど、我慢してね。あとその子ね、まあ連れていたも多分大丈夫よ。使い魔みたいなものでしょ」

「なら、いいですけど……」

「スピカちゃんは学校初めてだからいろいろ教えてあげてね」

「わかりました」

「お兄ちゃんと学校行くの楽しみだな」

新しい一步を踏み出すことになった。

俺は絶対に魔術師になってやる。

完

第23話 完結（後書き）

最後まで付き合ってくださいありがとうございます。

この物語はこれで完結です。

今後の展開につきましては、皆さまのご想像にお任せします。

では、名残惜しいですが、これでお別れです。

最後まで読んでくださった方々、誠にありがとうございました

キャラクター紹介

天海 大地（てんかい だいち）

一樣主人公。始まりの書を探している、十五歳の男の子。魔法少女や幼女が大好きな変態。

スピカ

メインヒロイン。言葉に統一性がなく、支離滅裂なことを言っている、自称兵器。

火竜 焰

大地の同級生で、大のオタク嫌い。

マッドサイエンティスト
狂気の科学者。

イヴ

幼い頃大地が会った不思議な女の子。

シリウス神父

スピカの保護者で、魔法・魔術の研究者。

昔アイルランドで魔法・魔術を学んだ男。

歳は不明で、人間。

マスターの友人。

マスター

相当の方向音痴。

スピカの生みの親だが、保護者ではない
ナマケモノで、めんどくさいこと大嫌い

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2184w/>

独りよがりの魔術師 ～ 幼女好きで変態の俺は、魔法少女を愛している～

2011年9月26日21時23分発行